

ようこそ転生者が無双
する教室へ

ハアート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よう実の世界に転生したオリ主が原作知識を活かして無双する話。

無双って書いてあるけど、原作知識以外のチート（身体能力チートとか）はないです。出来るだけ他の二次創作でもみない様なオンラインワンな行動をさせたいと思っってます！

現在、第二作目の

《link:https://syosetu.org/novel/304996》
ようこそ伝説の特別試験を起こす教室へ《link》

という小説を投稿しています。もし良かったらこの作品も見てください。

目次

中間テスト編

転生

入学

賭け将棋

仲間

初交渉

リーダーと参謀宣言

スパイ契約

Pr 稼ぎ

中間テストが終わって

須藤暴力事件編

王に詐欺

1

5

11

20

31

39

51

64

87

103

運命の会合

神崎、成長の第一歩目

戦の前の準備

無人島試験編

無人島試験はつじまるよー

洞窟取ります

食料と水の工夫された入手法

1日目終了(表)

1日目終了(裏)

今度こそ1日目終了

ハグ

罨

不満爆発

136

149

162

183

193

207

221

232

246

258

271

286

中間テスト編

転生

俺は今、真っ白な空間にいた。辺り一面真っ白。上下左右が存在しないフワフワして
いて重力を感じることができない空間だった。

確か……深夜のコンビニ帰りに居眠りトラックに轢かれたんだった。

っていうか、俺は死んだのか？それにここはどこだ？天国？だとしたら味気がない
な。

天国（仮）に愚痴を吐いていると目の前に綺麗な女の人が現れた。

純白のノースリーブで包容力の高そうな胸。サラサラなストリートな金髪に透き通
るような白磁の肌。慈愛に満ちたその笑みはどんなことでも許容してくれそうだ。

めっちゃキレイ。それこそこの世のものとは思えないくらい的美しさ、神聖さ。もし
かして女神とか天使か？

「服部晴秋さん。残念ながらあなたはトラックに轢かれて死んでしまいました。」

「ああ、やっぱり死んだんですね。ということは、ここは天国ですか？そして、あなたは
誰ですか？」

「私は女神です。後、ここは天国ではありません。ここ転生・召喚の間に召喚されることが決定しました」

「マジですか！異世界って剣と魔法の世界とかそんな感じですか?!」

「いえ。召喚先は現代日本ですよ。」

テンシヨンが一気に落ちる。はあ〜……………。

「そ、そんなに落ち込まないでください！あなたが行く世界は『ようこそ実力至上主義の教室へ』という小説の世界です。知っていますか?」

「知ってます！知ってます！マジですか?!よう実の世界に行けるんですか?!」

落ちたテンシヨンが爆上がりする。よう実はヒロインがみんな可愛い。しかも大体巨乳。つまり最高ってことだ。

「フフ、そんなに興奮しなくても本当ですよ」

「なんか転生特典とかチートとかはありますか?」

「残念ながらそういったものはありません。その身体一つで頑張ってください」

「分かりました。初期スタートは何クラスですか?」

「ウフフ。それはあちらに行つてからの楽しみです」

ウインクしながらそう言ってくれる女神様。綺麗だ。流石、女神様。

「ではそろそろあなたを召喚しますね。では、あちらの世界でも頑張ってください。」

そう言うのと、女神様は俺に手を向けた。俺は光に包まれた。

気がつくと、俺はバスの中にいた。おっ、丁度高円寺とOLが口論してる。

そのまま、原作通り、高円寺がOLを言い負かし、櫛田が出てきて、また高円寺が言い負かし、よく知らないモブが老婆に席を譲っていた。なんか原作キャラを見てると本当によう実の世界に來たんだなって、実感が湧いてくる。楽しみだ。

十数分後、バスが高度育成高等学校に着いた。俺は自分の名前を探し、クラスを確認する。どのクラスだ？

Aクラスなら坂柳の右腕になって、坂柳に頼られたい。

Bクラスなら一之瀬とイチヤイチャしたいなあ……。綾小路とのフラグをとことん横取りすれば惚れさせれるんじゃないかね？

Cなら龍園と悪友になって、他のクラスをかき回して嘲笑ってやりてえ。

Dなら綾小路と一緒にクラスの裏から暗躍したいなあ。とか考えてた所で、自分の名前を発見する。

Bクラスか。

俺は教室に向かって歩きながらこれからのことを考える。クラスの戦略とかの前に、

まず誰と仲良くなれば良いんだろうか。

基本的に仲良しでお人好しのBクラスだから友達には困らないだろうが、俺が欲しい仲間はそのうちのじゃない。俺が欲しいのはAクラスに上がる為に、他クラスを陥れたり、ルールの裏を突けることが出来るような奴らだ。

ルールの裏を突くつてのは、未来を知ってる俺なら簡単だが、それもずっと出来ることじゃない。2年の夏が終わったら俺の知らない展開が始まるし、その前に俺が原作介入して、未来が変わるかもしれない。

そうなった時、俺だけじゃどうにもならないかもしれない。仲間にしたのはまず神崎だな。神崎は一之瀬と違って、仲間も切り捨てられるだろうし、能力もBクラスで1、2を争うはずだ。

他の候補としては、4、5巻で新たに登場した姫野だな。姫野は髪が特徴的な女の子で仲良しこよしのBクラスの中で一步引いているらしい。あと、かわいい。ツインテール最高！

そんなことを考えていると、いつの間にか教室に着いていた。

入学

教室に入り、座って先生を待っていると俺が教室に来て数分で星之宮先生がやって来た。美人だ。29とは思えない。

「このクラスの担任の星之宮知恵です。気軽に知恵先生と呼んでね☆。この学校はクラス替えが無いから皆は3年間ずっと私が担当することになるよ。」

始業式まで時間があるから、この学校の特殊なルールについての資料を配るよ。」

説明のために先生が資料を配り出す。と、ここである事を思い付いた。

「先生、配るの手伝います。」

そう言つて席を立つ。すると、

「先生、私も手伝います。」

一之瀬がそう言つて席を立ち、先生に近づく。

「わあ。ありがとね、一之瀬さんと服部君。優しいんだね、2人共」

俺と一之瀬は先生から資料をおよそ3分の1ずつ受け取り、皆に配布する。

それにしても、少し意外だ。このクラスなら俺が配るのを手伝う、なんて言つたら一之瀬だけじゃなく他の皆まで「自分も手伝います」つて言つてワチャメチャになり、結

局星之宮先生が「ありがとね、皆。気持ちだけで十分だよ」みたいな流れになると思ってた。

もしかしてこのクラスがお人好しなのって最初からじゃなくて一之瀬色に染まった、ってことなのか？

まあ、この事は後で考えるか。

「じゃあ、説明するね。まず、この学校に通う生徒全員は敷地内の寮での生活を義務付けられていて、在学中は特例を除き外部との連絡が禁じられてるよ。

そして、もう一つ。Sシステムって言うんだけどね——」

Sシステム。この学校で最も重要な要素。Sシステムってのは、ポイントのことで、ポイントとはこの高校の敷地内だけで使えるお金のことだ。1ポイント＝1円。他人に譲渡可。この学校でポイントで買えないものはない。例えばテストの点を買ったり、退学を取り消したりなども出来、使い方次第で無限の可能性を秘めている。

「ポイントは毎月1日に自動的に学生証カードに振り込まれることになってるわ。今あなた達には全員に、10万ポイントが支給されているはずだから。この学校は実力で生徒を測るの。この学校に入学できたあなた達にはそれだけの価値と可能性があるってことよ。じゃあ、何か質問ある人〜？」

俺はここで手を挙げた。

「はい、服部君！」

「来月の1日に振り込まれるポイントは10万ポイントですか？」

クラスの皆が何言ってるんだ、こいつ、話聞いてなかったのか？みたいな目で見てくる。星之宮先生は星之宮先生で「へえ〜……」みたいな感じで見てくる。

「う〜ん…、ごめんねえ。その質問には答えられないかな」

「そうですか。分かりました」

その後何事もなくホームルームが終わり、入学式までに少し時間の余裕が出来る。すると、一之瀬が皆に向かって話しかける。

「ねえ皆！入学式まで時間があるから自己紹介しない？」

周りから賛成の声上がる。流石にこのクラスに須藤の様な集団の輪を乱す奴はいないか。

「私、一之瀬帆波です。3年間よろしくね。早く皆と仲良くなりたいたいから気軽に声を掛けてね。」

「私は白波千尋です。——」

何人かが自己紹介をして、俺の番が回ってくる。

「俺は服部晴秋。趣味は将棋やボードゲームやランプとか頭を使うゲームかな。3年

間仲良くして欲しい」

うん、綾小路みたいに失敗してないし、セーフだよな。とか思っていると、一之瀬が質問して来た。かわいい×巨乳。最強だなっ！

「服部君さ、さつき星之宮先生に質問してた、あれ。どういう意味なの？」

俺は少し思案する。どこまで話していだろうか…

「あー、アレね。まだ確証がある訳じゃないんだ。だから、少し調べる時間をくれないか？ちゃんと分かったらその時は伝えるよ」

「もちろんだよー今は何のことか分かんないけど、何か分かったら、その時は教えてね？」

「おうー」

俺はわざとポイントについての情報を誤魔化した。理由は簡単で、大天使一之瀬ならポイントについて知れば、他のクラスに教えてしまうかもしれないからだ。

今ある情報だけでは、AとDのクラスがポイントによって上下することや、Aクラスで卒業しないと進学や就職の恩恵を受けられないことは分かる筈がない。つまり、他クラスに情報を教えることのデメリットなんて分からない。

そんな状況なら一之瀬が喋ってしまったてもおかしくない。だからわざと誤魔化したんだが、なら何でそもそも質問したり、配布物配るの手伝ったりして、目立つような事

をしたのか。

俺がこのクラスの立ち位置として目指しているのは、一之瀬の参謀だ。一之瀬がこのクラスを纏めるBクラスの心臓なんだとしたら、俺は頭脳になる。それを神崎たちに支えてもらうってのが理想だ。

入学式が終わり、放課後。俺は日用品などを買っていく。料理しようかな。どうしようか。……面倒だし、普通に弁当買うか。

ある程度、生活必需品を揃えたところで俺はケヤキモールのスポーツ関係の店に行く。ここで何を買うかって？

それはサンドバッグやダンベルだ。この学校は武力メチャクチャ大事だからな。目標としては、1年最後の特別試験で龍園が空手とかを出してきても、切り抜けられるようにしたい。そして一之瀬のチャホヤさりたい。あわよくばキス……いやそれ以上も……!?

変な妄想をしながら、サンドバッグを部屋に設置した後、500発くらい殴ってみた。手の甲が赤くなってしまった。うくん、初日だしこんなもんか？今度グローブも買うか。

とりあえず、飯を食って風呂に入った後、俺はベットに寝転んで明日の予定を考える。

取り敢えず神崎とは接触したいな。欲を言えば、綾小路も。今のあいつ友達いなくて寂しいだろうから、簡単にイケると思う。あつ、その前にやる事あったな…。

そんな事を考えていると、いつの間にか寝落ちしてしまっていた。

賭け将棋

入学式の翌日。授業は初日ということもあって、授業の大半は授業方針等の説明だけだった。危うく寝そうになった。寝てないからギリセーフ。今から昼休み。俺は神崎にファーストコンタクトを行うつもりだ。

「確か、神崎……だよな。良かったら一緒に飯食わないか？」

「ああ、それは構わないが、どうして俺を誘ったんだ？」

「特に深い意味は無いよ。ただ、神崎と仲良くなりたいと思っただけさ。もしかして、嫌だったか？」

「いや、そうだな……別に嫌では無いぞ。飯は学食か？」

「ああ、そのつもり。じゃあ、行こっか」

まだ4月。今は裏の無い普通の友達として仲良くなれたら、とりあえずそれでいい。しかし……

「服部君、神崎君、今から学食？ご一緒していいかな？」

一之瀬だ。後ろにはBクラスの人達が20人近くいる。すげえな。

「俺は構わないぞ。神崎もいいか？」

「ああ、俺も構わない。」

まあ、4月の時点では普通の友達になろうとしてるんだし、2人きりで食べる必要はないか。移動中、一之瀬のおっぱいを凝視したが、揺れることはなかった。チクシヨウ！

学食で各々ご飯を購入し、上手い飯を食べながら交友を深めていく。そんな時に校内アナウンスが掛かる。

『本日、午後5時より、第一体育館の方にて部活動の説明会を開催いたします。部活動に興味ある生徒は、第一体育館の方に集合してください。繰り返します。本日——』

部活動か。この学校何か部活に入る気はないな。動きたくないし。でも、一応行くつもり。何故ならワンチャン綾小路と接触出来るかもしれないから。でも別に今無理して綾小路と知り合わなくても2巻で多分会えるんだよな。

「柴田は何か部活に入るつもりか？」

近くにいた柴田に雑談の話題として、部活の事を聞いてみる。

「俺はサッカー部に入るつもりだけ。中学校でもやってたしな。そういう服部はどうなんだ？」

「俺は部活に入るつもりはないな。でも、何か興味ある部活があるかもだから、説明会に

周りから、そんな声が聞こえてくる。おいよせ、お前らっ！ 戻れ！（ワンピース風）俺は黙って堀北生徒会長を見る。そして弛緩した空気が徐々に変わり、場が静寂に包まれる。

凄い。威圧感だけでよくこんな事できるな。そこに痺れる憧れる。流石、唯一綾小路にアドバイスを送れるような人間だけはある。静かになってある程度時間が経った頃、

「私は、生徒会長を務めている、堀北学と言います。生徒会もまた、上級生の卒業に伴い、一年生から立候補者を募ることになっています。特別立候補に資格はありませんが、もしも生徒会への立候補を考えている者がいるのなら、部活動への所属は避けて頂くようお願いします。生徒会と部活の掛け持ちは、原則受け付けていません。」

肌を突き刺すような空気を感ずる。

「それから——私たち生徒会は、甘い考えによる立候補を望まない。そのような人間は当選することはおろか、学校に汚点を残すことになるだろう。我が校の生徒会には、規律を変えるだけの権利と使命が、学校側に認められ、期待されている。そのことを理解できる者のみ、歓迎しよう」

一年生は一言も発することが出来ないまま、堀北生徒会長を見送ることしかできなかった。

部活動紹介が終わって数分後。俺たちは外に出ていた。

「服部君、部活に入らない子たちはこれからケヤキモールで遊ぶんだけど、服部君もどうかな？」

「あー、俺今日ちよつと用事あるから、無理。」

「そつかあ……。また誘うねっ！」

ちよつとだけ、冗談めかしてしょんぼりした雰囲気を出した後、一之瀬は元気よく皆と遊びに行った。俺も用事を済ませるべく、歩き出した。

数分後。俺は囲碁・将棋部の部室の前にいた。囲碁・将棋部に入るつもりはない。

目的はもちろん、二次創作のど定番！プライベートポイントを稼ぐならこれしかねえ！

チートで連戦連勝。数百万ゲットだぜ！

何故か「一年生だから」と、向こうだけ賭け金を多くしてくれるご都合チート！

・・・そう賭け事だ。

チートオリ主達はチエス、もしくは全他のボードゲームで稼ぐのが主流だが、あいにく俺は将棋しかできない。いや、正確に言うとおセロとかも出来るんだが、毎日やってるような人たちに対して勝てる自信がない。

「失礼します。1年Bクラスの服部です。ここ、囲碁・将棋部で合ってますよね？」
部屋の中を見渡すと、7人ほどの部員がいた。

「うん、合ってるよ。入部希望者かな？」

1人の女の先輩が答えてくれた。

「いえ、違います。今日は別の用事できました」

「別の用事？」

「はい。ポイントを賭けて僕と勝負してくれませんか？」

「へえ。良いよ。でも一つだけ教えてほしいな。どうやって部活でポイントを賭けるって事を思い付いたのかな？」

えー、めんどくさい質問だな。二次創作で知りましたよー。

「……………この学校って、生徒間でポイントの譲渡が出来ますよね？でも、特に賭博は禁止されませんでしたから。それで思い付きましたね。」

本当かどうかは知らない。でも、この学校は暴力でも『バレなきや黙認!』みたいな風潮があるから『賭博法? 知らん何それ楽しいの?』ってなる可能性がある。

「そっか。で、囲碁にする?将棋にする?」

結構アドリブこいて、適当かましたのにスルー。って事は当たってる?

「将棋をお願いします」

「オツケー。相手は私で良い？あ、副部長の安森です」

「はい。安森先輩よろしくお願いします。あ、掛け金って自分が決めて良いんですかね？」

「うん、良いよ。」

「では……、あつ、一つ聞きたいんですけど、安森先輩って何クラスですか？」

「へえ。私は3年Bクラスだよ。でも、まだ4月だよ？どうしてそんなことを聞くのかな？」

「まあ、面倒い質問きたよ。クラスなんて聞くんじゃない。いや、でも相手の強さを推し量るのに必要だからな。」

「簡単なことですよ。学校にある監視カメラの多さ、店にある無料品コーナーや学食の山菜定食や自販機での飲料水。ここまで来てクラス同士で優劣が付けられることに気付かないわけありません。」

「言いながら、俺はしまった、と思う。これは毎月貰えるポイントが10万ポイントじゃないという根拠にはなるが、クラスとポイントが連動している根拠にはならない。」

この情報だけならもしかしたら、評価が個人の可能性だつてあるし、ポイントでクラスは変わらず「Aクラス」ではなく、「最終的にポイントが一番多かったクラス」が恩恵を受けられる仕組みだったかも知れない。

「なるほど。入学してまだ2日なのに凄いね。」

でも、先輩はそのことに気付かなかった。俺と同様に既に知っているからこそ、俺たちが知っていてもおかしくない情報や情報から推察できることと、そうでないものとの区別が辛いのだろう。

「あ、話戻しますけど、掛け金はまず5000ポイントでお願いします」

バレない内に話を逸らす。後、自信はあるけどちよつとビビって低めのポイントで設定している。3年。Bクラス。副部长。ワンチャン負けるかもしれないからな。

「ああ、そうだったね。将棋をしに来たんだったね。じゃ、早速やろつか」

数十分後。俺は安森先輩に勝った。しかも余裕で。この対局は常に優勢だった。その証拠に俺の囲いは一切崩れていない。思ったより余裕だった。イケるな、俺。

「強いんだね、服部君。他の子ともやってく？」

「はい。あ、ついでに次の方との賭け金、5万ポイントに上げてもいいですか？」

副部长でこの強さなら他にこの人より強いのはいても1人か2人くらいだろう。それならこれくらい賭けても多分大丈夫だろ。知らんけど。

「ああ、いいぜ。次は俺とやろうや」

「はい、よろしくお願いします」

そうして、俺は部員全員と対局した。

「デュフフ」

おっと。つい、キモい笑い声が出てしまった。俺は帰りながら、自分の学生証を見る。367880と書かれてある。30万以上もある。あの後俺はずっと掛け金5万で対局し、全勝した。

なんでも、高校で将棋の大会はないらしく、皆本気でやっているのは囲碁で、将棋はたまにしかやらない遊び程度のものらしい。でも、もしかしたら俺に負けたから、将棋ちゃんどやりだすかも。流石に明日とか明後日に行くつもりはないが、来月には行くつもりだ。

一応、鍛えとくか。まあ、多分必要ないと思うけど。

そう思って、将棋アプリをダウンロードし、俺は寮に帰った。

仲間

囲碁・将棋部に賭け将棋を挑んだ翌日の放課後。俺は神崎と一之瀬を自分の部屋に誘っていた。

「それで。話って何かかな？」

神崎とは4月の内は普通の友達でいる、一之瀬にはポイントの変動を伝えない、と考えていたが予定を変更した。理由は早い内に俺が使える人間である事（ただの原作知識）を伝えといた方が立ち回りやすいかな、と思ったからだ。

「まずさ。この学校のことどう思う？高校生に1ヶ月10万円のお小遣いとか多すぎると思わない？」

「確かに。この学校卒業したら、消費癖ついてそうで怖いにやー」

「まあ、多少怪しくはあるが…それがどうしたんだ？」

「そうか。じゃあ、結論から言うぞ。来月貰えるポイントは10万ポイントじゃない。」

「理由を説明してもらえるか？」

「ああ。まず入学式の日に星乃宮先生が『この学校は生徒を実力で測る。』『毎月1日に振り込まれる』』と云ってたのを覚えてるか？」

「ああ」

「うん」

「星乃宮先生は毎月1日に10万ポイントが振り込まれる、とは言ってない。」

「なるほど、そういうことか。毎月1日に振り込まれるポイントは変動し、その変動の仕方は実力で決まると。だが、そうなると、実力とは？という疑問が出てくるぞ」

理解はやいな。これは役に立ちそうで俺もにつこり。

「おそらくだが、素行とかだと思う。教室に監視カメラがあるのに気付いたか？遅刻欠席早退をしないか、授業を真面目に聞いているか、とかをチェックされていると思う」

「なるほどね。義務教育の間に何度も言われた事ができてるかどうかってことね。でも素行でポイントが変動することを知れば、皆ちゃんとやり出すんじゃないか？」

「そう、だから、来月からは学力とか身体能力とか、分かりやすく実力つてやつも問われてくるだろうし、ポイントが変動する試験なんかもやるだろう。言い忘れてたが、実力の評価単位は個人じゃなく、クラスで、Aが一番優秀でDが最弱。ついでに進学、就職率100%の恩恵を受けられるのはAクラスだけだ」

2人がメツチャ驚いてる。なんで？

「……よく……そんなに調べれたな。そんなに。まだ入学して3日だろ」

……確かになく。普通こんな早く気づかないよなあ。どうしよう。なんて言い

訳しようか。

「ていうか、服部君さ、そのことに初日の内に気付きかけてたよね？」

「そういえばそうだな。星乃宮先生に質問していたやつか」

「それぞれ！」

「まあ、頭には少し自信があるんだ」

「というか、そこまで分かっているんなら早く皆んなに伝えた方がいいんじゃない？」

「そのことなんだが。皆に伝えるのは少し待ってくれないか」

「どうして？」

「学校側と取引したい。もしかしたら、クラスの人にポイントの増減について黙っとく代わりにポイントをもらえるかもしれない」

「でもそれじゃ…他の人が損するんじゃないかな？それに気づいたのは服部君なのに私たちだけ教えてもらってポイントももらうとかズルいよ」

「さつき言ったポイントが大きく増減する試験があると推測できるだろ？あれで実力が低いとみなされた生徒はすぐに退学にさせられるぞ。クラスメイトが退学させられることにお前が耐えられるか？」

「耐えられないよ。でもBクラスに実力が低い子なんていないし、もしいたとしても退学になんて私が絶対させない。」

「ならなおさらポイントは貰っておけ。2000万ポイントがあれば、退学処分を受けなくても回避出来るぞ」

「…ホントどうやってそんなに情報集めたの？」

「それは企業秘密だ」

まさか『君たちの事小説になってるよ！』なんて言える訳がない。

「話を戻すぞ。とりあえず先生に明後日取引を申し込みに行く。だからそれまで黙つていてくれ」

「それは分かったけど、どうして明日じゃないの？」

「明日もう1人この秘密を共有したい奴がいる。ウチのクラスの姫野だ」

「何故、あいつなんだ？」

神崎が聞いてくる。

「正直言わせてもらおう。これから他クラスとの戦いが始まった時、Bクラスは一之瀬に依存し頼りきる。断言出来るぞ」

神崎が苦い顔をする。何となくそうなるのと分かるのだろう。

「そうなったら、一之瀬に意見出来る奴なんて俺や神崎だけだ。足りないんだ。一之瀬に同等に意見出来る奴がもう1人欲しい。」

「それが姫野ってことか。」

「ああ。あいつはクラスを一步引いて見ている。仲間に行ければ、強力な戦力になる」
「……………よくクラスメイトの事見てるね。まだ入学して3日目なのに。」

……………確かに。クラスの事も学校の事も把握しすぎでは。まずい、なんて言い訳しよう……………あれ、なんかデジャブ。

「すまん、少し人に言えないような情報の集め方してるんだ。ギリギリルールに触れない、グレーゾーンのやり方で。だから、あんまり探らないで欲しい」

まったくの嘘を並べる。嘘に嘘を重ね、いずれ俺はクラスメイトに断罪される——
——これはそんな物語（違う）

「分かった。これ以上聞くのはやめとくよ。でも危険なことはやめてね。それで服部君が退学とかしたら、元も子もないんだから」

そう言つて、一之瀬が俺の手を握ってくる。女子特有の柔らかさ。人肌の温もり。近づくと感じる花のような香り。やべえドキドキしてきた。

「すまん。気を付けるようにする。」
「まったくだよ」

そう言つて一之瀬は手を離した。もつと味わいたかった。

次の日の放課後の教室。

「姫野。話がある。少し付き合ってくれないか？」

「は……？なに」

ぶつきらぼうに姫野が返してくる。

「ここじゃ出来ない話だ。俺の部屋に行っていていいか？」

「だる……下らない話ならすぐ帰るから」

「ああ、それで構わない」

第一関門クリアだな。

俺の部屋にて

「は？なんでこの2人がいるのよ？」

「にははは、おじやましてまゝす」

俺の部屋には神崎と一之瀬がいた。俺が姫野を誘う間に速攻で部屋に行ってもらっていたのだ。また、合鍵を作り忘れていたので自分の鍵を貸すハメになってしまった。今度、合鍵を作って渡さないとな。

「ああ、お前の説得に俺1人じゃキツイかもと思ってな」

「は、説得？帰っていい？」

そう言っつて踵を返そうとする姫野を見て俺は慌てる。

「待て待て！少なくとも話は聞いていけつて！」

「はあ…、早くしてよね」

姫野つてき、ぶつきらぼうで男っぽいとかあるけど、実は語尾に「ね」とか「よ」がついてること多いよな。こういう所で女の子っぽい所出されると、ドキドキしてしまう。

「分かった。まずこの学校についてなんだが——」

この学校について一通り説明を終えた後。

「で？ポイントが増減することとか、Aクラスじゃないとこの学校の恩恵を受けられないのは分かったけど、そんなのクラスにまとめて言えば良くない？」

「実は明日学校と取引しようと思ってる。ポイントについての情報を一定期間黙つくかわりに、口止め料をもらえないかどうか」

「ならなんで私には言ったのよ？」

「口止めする人数が多い方が全体で多くポイントがもらえるだろう？」

「それも、別に私じゃなくていいじゃん。もっと仲良い子いるでしょ。なんだっけ、白波

さん……とか」

「あれはダメだ。一之瀬のイエスマンでしかない。駒としてなら兎も角、棋士としては使えない。」

「私の友達をそんな風に言うのやめてほしいんだけど」

「一之瀬がやや怒顔で言ってくる。かわいい。……ってふざけたらダメか。」

「誠にごめんなさい」

「イエスマンだとなんでダメなのよ？黙つといて、つてのも聞かせやすいんじゃないの？」

「そうか。説明してなかったな。お前に話したのは、これから俺たちと一緒にクラスを引っ張って欲しいからだ」

「は、はあ？めんどくさいし。私、Aクラスとか興味ないし。クラス争いとか勝手にやってよね。」

「安心しろ。お前の役割は、神崎と共に俺を支える事だけだ」

本当はもう一つ、一之瀬が暴走しないように抑えてもらう役割があるが、一之瀬の前で言うのはやめといた方がいいな。

「お前に俺たちの助けなんかがいるか分からないが、やるからには力の限りを尽くそう」
神崎が嬉しいことを言ってくれる。俺が女なら惚れてたかも、なんて。

「神崎君だけで良くない？私いる？」

「いる。俺や一之瀬に对等に意見を申せる奴は1人でも多い方がいい」

「でも神崎君はともかく、私があんたや一之瀬より良い意見とか言えると思えないんだけど」

「俺たちだつていつも正解を出せる訳じゃない。間違えることはある。でも姫野がいないとその間違いに気付くことすら出来ないかもしれない。そしてその間違いがクラスの生死を分けるかもしれないんだ」

それを聞いていた一之瀬が目を見開く。俺たちの選択がクラスの運命を握ることがあるかもしれないなんて考えた事が無かったのかもな。まあ、そんなこと意識するには早すぎるから仕方ないだろう。なんせまだ4月だ。

「私からもお願い、姫野さん。クラスの為に協力してくれないかな」

「知らないわよ。だから、私クラス争いとか興味ないんだつてば」

ハッ。クラス争いに興味無いのは本当かもしれないが、お前原作で足並み揃えるのは大事とか言つてただろ。つまり、クラスの雰囲気悪くしたり、クラスの足引つ張つたりはしたく無いんだろ。

「一つお前にメリットを与えてやる。」

そう言つて俺は姫野に耳打ちしようとする。あんまり一之瀬には聞かれたくないか

らだ。ところが、

「なっ、なに?!」

急に俺が近づいてきたことにビビったのか、そんな風に言っただけで慌てる。えっ、かわいすぎんか？

「ああ、悪い。メリット教えるから耳貸して」

そう言っただけで、俺はもう一度近づく。今度は姫野も応じてくれる。

「これから、さっき言ったみたいなのポイントが増減する行事があったらさ。うちのクラスって勝つても負けてもパーティーとかすると思わない？」

しかも長い時間。特に中身も無く「お疲れー」とかそれだけを何時間も言っただけ。うなづいたら、多分姫野も誘われるよね、そのパーティー。しつこく何度も何度も断りきれなくて、結局無理矢理参加させられてさ。特に楽しく無い事に何時間も無駄に時間を取られる。嫌だよな。俺の左腕になればそのパーティー、誘う事すらさせないよ、どうする？」

姫野が悩む様子を見せる。今の話ちよつと現実的すぎるからな。まあ、原作にあった事だから当然なんだが。悩んでいる姫野を見て追撃をかける。

「更に。仕事をこなす度に報酬はやる。クラス争いに興味無いって言っただけだが、金はあるだけあったほうがいいだろ？」

「……分かった。あんたに従うわ」

「従うというよりむしろ逆なんだが……まあ、末長くよろしく」

俺は右手を差し出す。4. 5巻で月城が握手の手に意味を持たせてたが、そんな事は考えてない。よく分からんし。

「はいはい」

しぶしぶだが、姫野が手を取ってくれた。………。さっきの反応といい、この手といい、ガサツに見えるけど姫野もやっぱ女の子なんだなあ。

誰かに思考を覗かれたらキモがられそうな事を思いながら、俺は新たな仲間を手に入れた。

初交渉

姫野を味方に付けた翌日の放課後。俺と姫野と神崎と一之瀬の4人は職員室に来ていた。

「失礼します。星乃宮先生はいらっしゃいますか？」

「はいはい。ん？4人も来てどうしたのかな？」

「話の内容的にできればどこか個室とか行きたいんですが、いいですか？」

「いいよ。じゃあ…進路相談室に行こっか。」

「はい、ありがとうございます」

「それで？話って何かな？」

そう言いながら手で座るように促す、星乃宮先生。右から一之瀬、神崎、俺、姫野。クソツ、両手に花にはならなかったか。

「今日はSシステムについて答え合わせに来ました。」

なんで答え合わせなんかしようとしているかというところ、交渉する前にどれだけSシステムについて熟知しているかを開示し、口止め料を多くさせる為だ。

ついでに、俺たちは入学して1週間。かなり早く動いたと思う。

原作でもそもそも口止めとかしてないので、よく分からないが、入学してからの期間が短ければ短いほど口止め期間が長くなり口止め料が増えるのでは、とも思っている。

「うーん、答えられないこともあるかもよ?」

「ぶっちゃけ大事なのはそこじゃ無いので問題ないです。」

喋る前に深呼吸をする。ちゃんとした交渉なんて生まれて初めてだからな。まあ、ちよつと前まで普通の高校生だったし、当たり前か。

「まず、この学校が月1日に生徒に配布するポイントは生徒1人に付き10万ポイントではありませんよね。額はクラスの授業の態度などによつて減らされていく。クラス毎のポイントがそのままクラスに連動しており、Aに近くなるほどポイントが高くDに近くなるほどポイントは少ない。また、この学校で得られる就職率、進学率100%の恩恵を受けられるのは卒業時にAクラスだった生徒だけ。……どうでしょうか?」

俺は顔を上げる。話している内に無意識に下向いてた。やつぱ緊張するわ。

星乃宮先生を見ると目を見張ってた。まあ、そうなるわな。ポイントの変動だけじゃなくてAクラスの恩恵まで気付くつて、本来だとヤバすぎる思考回路だ。

「…よく…気付いたね、そんなに…。えつと…ね、えつと…」

引くなよ。俺自身がそこまで見抜けた訳ではないんだから。

「先生、むしろ本題はこれからですよ。俺たち4人は来月までにSシステムについて口外しないので口止め料を下さい。」

そう。大事なものはこれからだ。

だって「えっ？口止め？しないよ。好きなだけクラスに喋れば？」

とか言われたら、もうクラスに喋るしなくなる。え、別によくない？って思うかも知れないけど、BクラスならSシステムのことに触れなくても一之瀬が「皆、授業しつかり受けよう！」とか言えば授業態度はある程度良くなる筈だ。つまり、この口止め料は完全にボーナス。あれ？そう考えるとそこまで緊張しなくなってきたかも。

てか、先生ずつと黙ってる。なんか喋ってよ。怖いだろ。

「この学校は自主性を重んじてますよね。個人が何でも気づいて皆に教えることになったら、その生徒以外成長しないのでは？それは学校として不味くないですか？」

そうかな。星乃宮先生を説得する為に適当に論を出しただけなんだけど、自分で言うていながら疑問を感じる。凄い簡単に言えばただの情報共有でしかない。社会でも大事なことだろ、俺高校生だから知らんけど。

「星乃宮先生、もし口止めする必要がないとしてもですよ？この学校は実力で生徒を測るんですよ。たった1週間足らずでSシステムの全容を知ったこの情報収集能力や観察力、考察力は評価するべきではないのですか。そういう意味では報酬としてポイン

トをくれても良くないですか？」

元々答えを知っていたのにこんなセリフ言うとか卑怯すぎるなあ。

「…分かったわ。4人にはポイントをあげる。…それにしても凄いね！こんなに早く気づいたの歴代でも現生徒会長堀北君ぐらいじゃないかな。それにあの子もここまで深く気づいては無かったと思うし。気づいたのはやっぱり服部君？それとも一之瀬さん？」

「服部君です」

一之瀬がそう答える。でもそれ、悪手じゃないか？ポイントをもらう理由が口止めじゃなくてSシステムにいち早く気付けたことに対する報酬になってしまったら、俺以外貰えない可能性があるぞ。

「ねえ、服部君。どうやってSシステムの仕組みに気づいたの？」

「普通に監視カメラとか無料コーナーとか見て気づきましたね。」

「それでもなかなか気づけるものじゃないよ。」

「早く契約の方をお願いします」

「も〜。せっかちな男はモテないよ」

うるせえ。俺がモテないのは、顔と運動神経が良くないせいだ。大学行って社会に出れば、持ち前の頭の良さで高学歴高収入になってモテる筈だから今は関係ないんだよ！

(必死)

そんな心の現実逃避を無視して、星乃宮先生が紙とペンを用意する。

「じゃあ、契約内容は

『服部春秋、一之瀬帆波、神崎隆二、姫野ユキ。以上の4名は5月1日までSシステムの仕組みについて一切の言及を禁じる』

『4名には50万ポイントを渡す』

でいいかな？」

「50万ポイント?!」

「そんなに貰っていいんですか?!」

安心しろ。一之瀬、神崎。50万なんか1年後とかには端金になるから。龍園なんか月に約80万も貰ってるぞ。葛城手に入れる為に契約破棄したからもう過去の話だけだ。あつ、まだ未来の話か。ややこしいな。

「まあ、ちよつと多いかもね。でもその50万は皆に対する期待も乗せてその額だから」
いいのからそんなことして〜?と思つたけど、担任はできる範囲でクラスの味方をするのが普通か。茶柱が異常なだけか。

「へえ〜ありますがどうぞいませ。あと、契約内容は問題ありません」

「オツケ。じゃあ、契約成立ね。50万送るからちよつと待ってね。」

先生はそう言つて学生証？を操作する。モノとしては多分学生証と同じなんだろうけど、果たして教師用の学生証を学生証と呼んでいいのか。

そんなくだらないことを考えてると、俺たち4人の学生証に通知が届く。見ると50万ポイント振り込まれていた。これで俺のポイントは865600。

「イエーイ！」

そう言つて隣にいる姫野とハイタッチしようと手を挙げる。チラツとこつちの方を見た姫野は、

「うっぎ」

と言いつつもハイタッチしてくれた。このツンデレめ。

「イエーイ！」

反対にいた神崎と、神崎越しに一之瀬ともハイタッチする。

「ああ、そうだ。一之瀬」

「にやにかな？」

「週明けからクラスメイト達の授業態度が悪くなつたら注意してくれ。ただし、Sシステムについては一切触れないようにな」

「え？でもそれって」

「問題無い。Sシステムには一切触れないのなら契約には反していいからな。一之瀬はあくまで皆の授業態度が悪くて授業に集中できない時に文句を言うんだ。一之瀬は他人に遠慮するような人間じゃ無いからな。」

作った設定をペラペラと喋っていく。こんな簡単に契約の穴がつけてしまうのは問題かもしれないけど星乃宮先生は悪くないだろう。当たり前だ。だっていくら契約でも行動の全てをコントロールする訳にはいかないからだ。

「で、でも……」

「やれ。契約の穴を上手く突くのも実力だ」

バレないように暴力を振るうのも実力。証拠がないのをいいことに事件を捏造するのも実力。他人の過去を暴いて追い詰めるのも実力。

まったく酷い学校だぜw w

「現に星乃宮先生も苦い顔をするだけで何も言っただけで何もないだろ？」

俺がそう言うのと、3人は一斉に星乃宮先生を見る。星乃宮先生は更に顔を顰めたのだった。

星乃宮先生からポイントを貰った翌週。

週明けの学校が憂鬱なのは前世もよう実世界も変わらない。早よ特別試験来い。登校すると、一之瀬が壇上に立って皆に向かつて授業を真面目に受けるように言った。

これで少しはクラスポイント増えたらいいな。

まあ、本番は特別試験始まってからだしあんまり現時点でのクラスポイントは気にしないでないけどな。

俺は自分の席に向かう。そこで俺はとあることに初めて気がついた。

「あれ？俺の隣の席って姫野だったんだ」

よう実って特別試験ばっかだし、授業とかどうでも良くね？みたいに考えてたせいで周りが誰か確認すらしてなかった。

「気付いてなかったの？」

「悪いな」

「……あんたってさ、なんか抜けてるとこあるのね」

隣の人把握してなかっただけでそこまで言う？

リーダーと参謀宣言

朝豪快な目覚ましに無理矢理起こされ、少し憂鬱な気分です。学生証を確認する。

今日は5月1日だ。

そう。クラスポイント発表日。今プライベートポイントを確認したら910870だった。昨日の夜は839870だったので、74000プライベートポイント増えたことになる。

つまりクラスポイントは740、原作に比べ100くらい増えたってことだ。ところで、星乃宮先生との契約が終わってから今まで何をしていたかという、特に何もしていない。テヘツ。

Bの皆とちよいちよい遊んだり、筋トレしたり、オンラインで将棋やりまくったり、授業中寝落ちしたら姫野に起こされたり、水泳で一之瀬の水着姿を堪能したり、小テストをやったり。普通の学生ライフをエンジョイした。

手に入れた連絡先もBクラス全員と榎田だけ。Bクラスの連絡先は一之瀬に全部貰った。榎田の方は入学していつくらいだったか忘れたが、なんか「こんにちは！Dクラスの榎田桔梗です！1年生の皆と仲良くなりたくて来ました！良かったら連絡先交

換してくれませんか！」とか言ってBクラスに凸ってきた。折角なので交換しておいた。

登校するとDクラスがザワザワしていた。

「やっぱり振り込まれてないよね…?」

「だよな?学校の不手際かな。」

やべえ。対岸の火事だと分かっているとメチャクチャおもしろい。やっぱりどう考えても1ヶ月で10000c1無くすとかアホすぎるわw

俺はBクラスの扉を開ける。

「あ、服部君。おはよ。今日何ポイント振り込まれてた?」

「あー、74000ポイント。10万じゃなかった。」

「服部君もかく。なんでだろうね。」

「なんでだろうな」

こつちから話しかけんでも向こうから話しかけてくれる。マジBクラス陽キャだわ。席に行くとき既に来ていた姫野と目が合う。

「おはよう、姫野。」

「おはよ」

姫野は向こうから話しかけてくる、つてことがあまりないのでこつちから話しかけ

る。でも今は話題がないんだよな。だってこいつ全部知ってるし。

まあ、無理に話題作るぐらいなら黙つといた方がどっちも楽だし、黙つとくか。と思つていたんだが…

「皆思つたより困惑してるね。4月の内は気づかなくても、この状況になつたら何人かくらいは気づくと思つてた」

向こうから話しかけてくれた。

「そうだな。まあ、仕方ないんじゃないか。その気づきそうな何人かが喋らないだし」
契約内容上、今日からはSシステムの仕組みを口外できる。だが、俺がこの時間は喋らないよう神崎や一之瀬に言つておいた。理由はホームルーム後に全てを伝え宣言するため。

俺が席について10分後くらいに星乃宮先生が来た。手には大きな紙を何枚か持っている。

「皆、おはよう。ホームルーム始めるから席についてね。それと、何か質問ある人いる」

「知恵ちゃん、振り込まれたポイントが10万ポイントじゃなかったんだけど」

「それについては今から説明するね」

そう言つて大きな紙を黒板に貼る

Aクラス 940c1

Bクラス 740c1

Cクラス 490c1

Dクラス 0c1

と書かれている。Bクラス以外は多分原作通りだな。

転生者は俺だけか？だとしたら無双し放題だな。ハーレム作るぞ。グツへへ。

「君たちに振り込まれたのはこの740クラスポイントに1000を掛けた74000ポイントで260クラスポイント減らしたことになるわ。減った理由は遅刻や授業中の私語など当たり前のことが出来ていなかった時があったからだね」

何人か心当たりがあるんだろう生徒が少し後ろめたそうな顔をする。俺？まあ、遅刻や私語なんかしてないし？授業中に眠りかけたらいつも姫野に起こしてもらつたし？…そう考えるとマジで姫野ありがたいな。俺は姫野の方を見る。目が合ったのでそのまま感謝を伝える。

「いつも起こしてくれてありがとな」

「別に。あんたが寝てたらc1が下がって私のprが減るから起こしただけ。」

「そっか。…これからもすぐ寝るだろうから起こしてくれ」

「……………はいはい」

なんだよ。そもそも寝るなって言いたいのか。出来たら苦労しないつつの。

「もう気づいた人がいるかもしれないけど、この学校は優秀な生徒はAクラス、ダメな生徒はDクラスに配属されることになってるわ。だから。君たちはそこそこ優秀な人たちってことよ。でも安心しちやだめよ。クラスポイントは毎月振り込まれるお金と連動しているだけじゃないからね。このポイントがそのままクラスに反映されるから。あと付け加えると、入学した生徒の大半がこの学校の高い進学率と就職率を求めてきたと思うんだけど、その恩恵を受けられるのは卒業時にAクラスだった生徒だけね。だから、皆Aクラス目指して頑張ってるね」

「は、はあ〜!!」

クラスから非難の声が上がる。

「それともう一つの紙。これは前やった小テストの結果ね。」

俺は自分の名前を探す。お、あった。90点。まあ、満足できる点数かな。一之瀬も同じ点数で俺達2人がトップタイみたいだ。なんだかんだ一之瀬は頭いいよな。細工とか絡め手とか妨害に弱いだけで、素の実力はかなり高い。

「今回は赤点の人はいないけど、もし中間テストや期末テストで赤点取った生徒がいた

らその人退学になるから気をつけてね。あ、赤点の基準は平均点÷2だから。まあ、私は皆がこのテストを乗り切れる方法があるって確信してるから」

星乃宮先生はそう言つて教室を出て行つた。

よし、今だな。星乃宮先生が教室を出た直後俺は席を立ち教壇へ向かう。

一之瀬と神崎も来る。これは予め俺たち4人で決めていたことだ。

一之瀬がリーダー、俺が参謀、神崎が補佐。

姫野は表に出ない。そっちの方が本人的にもいいだろうしな。

そもそも姫野は、綾小路が軽井沢を従える時と違つて、何か弱点を握っている訳じゃない。

出来るだけあいつの望む環境を用意してやらないと協力してくれなくなるわけだからな。

ここで俺と一之瀬と神崎がクラスの代表になる、と言う意思を表明するつもりだ。

「皆、聞いて。先生が言つていたように私たちはAクラスに上がらないといけない。これからクラス同士で競争したりする事もあると思う。その時のために、これから私がリーダーとして皆を引っ張つて行つてもいいかな?」

一之瀬がそう宣言する。

「もちろんだよ」

「むしろ一之瀬以外リーダーなんていないぜ」

賞賛が上がる。まあ、当然か。だが…

「一之瀬さんがリーダーになるのは大賛成ですけど、隣の2人はなんですか？」

一之瀬大好きマン…ではなく一之瀬大好きウーマンこと白波千夏が聞いてくる。メチャクチャ睨まれる。

「一之瀬がこのクラスの心臓なら、俺はこのクラスの頭脳だ。俺がこのクラスをAにしてやるよ」

「一之瀬さんは頭良いし…あなたなんか必要ないんじゃないですか？」

「…いつ…」。一之瀬の隣にいたいのが自分だけだろ。

「必要あるかないかを決めるのはお前じゃねえだろ」

「じゃあ、一体誰が決めるって言うんですか？」

「ストップストップ！」

少し邪険な雰囲気になったからだろう、一之瀬が割り込んでくる。

「2人共、落ち着いて。千尋ちゃん、安心して良いよ。服部君は頭もいいし、Aクラスに上がるのに必要な人だから」

「一之瀬さんは優しすぎますよ。この人絶対一之瀬さん目的で近づいてきますよ。この人いつも一之瀬さんの胸ばっか見てきますし」

なっ…クソツ。反論出来ねー……。

「はあ？そんな事ねえよ」

とりあえず言い返さねば。

「そんな事あります。一之瀬さん、こんな人いなくていいです。この人がいなくても私
があなたのこと支えますので」

ほら見ろ。自分が一之瀬の隣にいたいだけじゃねえか。

「いや、だから千尋ちゃん、ちよつと落ち着いて聞いて…」

やべえ。Dクラスみたいになってるんだが。まあ、その中心は俺なんだけどな、ガハ
ハ。

とか現実逃避してたら、救いの手は思わぬ所から差し伸べられた。

「あーうるさいうるさい。アンタらさ、ガキじゃないんだから。要は服部が参謀として
実績を出せば済むんじゃないの？」

姫野だ。マジナイス。天使！女神！よっツンデレ！

「ハッ、確かにその通りだな。じゃあ、白波。直ぐに実績を出してやるから待つとけ」

「私が簡単に認めると思わないで下さいね」

「はいはい」

俺は教室を出ようと足を廊下に向ける。

「あー、俺は一之瀬と服部の補佐としてクラスを支えるつもりだ。えっとよろしく頼む」
……ごめん神崎、忘れてた。

1時間目が始まる前に席に戻る。俺は隣に座っている姫野を見て感謝を伝える。

「姫野、さつきはありがとな。助かった」

「別に。あんたを助けるのが私の役目なんですよ。それにあんたならすぐに実績の一つや二つ作れるんでしょ？」

ツンデレかよ。

「すごい信頼してくれてるな。素直に嬉しいわ。ありがと」

「は、はあ？は、話変えないでよ。で、どうなのよ。実績は作れるの？作れないの？」

姫野が少し心配そうに俺を見つめる。やめてくれ、その瞳は俺に効く……！

「そんなに心配しなくても大丈夫だ。とりあえずこの中間テストで分かりやすい実績を作ってやる」

「べ、別に心配はしてないわよ。というか、何する気なのよ。全教科100点とか取る気？」

「いや、個人の實力を示すつもりはない。もつとクラスの皆が認めるようなクラスの為の実績を出すつもりだ」

「ふーん。まあ、頑張ってるね」

「おう」

なんか、女子からの応援ってそれだけで力が湧いてくるな。クラスに実績を示す云々なんて関係なく頑張る、そう思えた。

放課後。俺は1ヶ月ぶりに囲碁・将棋部の部室に訪れていた。

「こんにちは。今日も賭け将棋しに来ましたよーつと」

「来たな、服部君。悪いが私たちはこの1ヶ月囲碁よりも将棋に費やしてきた。簡単にPrを渡すつもりはないよ。」

「望むところです。」

「賭け金は5万Prでいいのかな?」

「はい、それをお願いします。」

まず、副部長の安森先輩と対局する。

なるほど。先月よりも強くなってる。元々囲碁に費やしてきただけで、将棋初心者って訳ではない。

序盤の駒組みは大して変わってないが、中盤の能力が大きく成長している。

安易に攻める事なくなったし、攻められたら攻め返さずにしっかり受けに回って俺の攻めを対処してくる。

だが、この1ヶ月成長したのは俺も同じだ。先月より鋭くなった攻めで先輩の陣に駒を成らせ、着実に囲いを崩していく。そして…

「負けました」

「対局ありがとうございました」

無事勝利した。5万Prゲットだぜ！（ポケモン風）

数時間後

「対局ありがとうございました」

俺は部員7名に全勝した。

「いやー、やっぱり1ヶ月鍛えたくらいじゃ勝てないかー」

先輩達がぼやく。そりやそうだろ。なめんな。

「まあ、俺もこの1ヶ月大分鍛えてきましたからね。そう簡単には負けませんよ」

「ズルいぞろ。それじゃ私たちがずっと君に勝てないじゃないか」

「そうですね。先輩達には卒業まで俺にPrを捧げてもらいます。」

「絶対勝って奪い返してやるからな」

今日儲かったPrは45万Pr。囲碁・将棋部の先輩の内7人中2人がAクラス。Aクラスの先輩とは賭け金は10万Prで、Aクラスじゃない先輩は5万Prで賭けている。

「ところで安森先輩。1年1学期の小テストと中間テストの問題ってまだ持ってますか？」

「持ってるよ。」

先輩がニヤツて笑う。

「なら小テストと中間テストの問題と解答を3万でくれませんか？」

「オツケー。寮にあるから帰ったら送るね」

「はい、ありがとうございます」

「2年の先輩にも誰か問題持ってませんか？」

「俺、持ってるぜ。俺も寮にあるから帰ったら送るわ」

「はい、お願いします。2人には問題が送られてきたのを確認したら、3万pr送りますね」

「うん」

「おけ」

夜、俺は学生証に小テストと中間テストが送られてきたのを確認し、先輩たちにそれぞれprを送った。現プライベートポイントは1,300,200。順調に軍資金が溜まってるな。

俺は深夜にほくそ笑んだ。グツへへ。いや、これほくそ笑むとは程遠いな。

スパイ契約

5月に入って数日。俺は新たに行動を開始する。時刻は放課後。

俺はカラオケルームにとある生徒を呼び出している。

『話がある。これから俺が指定するカラオケルームに1人で来い。さもなければ貴様の過去をばらす』

いや、原作知識ってやつばチートだなあ。これは絶対来るしかないだろう。ハハッ。お、来た来た。

カラオケボックスの扉が開き中に入ってくるのは、
————— Dクラスのアイドルだ。

「服部君、あれどういう意味？てか、誰に聞いた」

普段とは比べ物にならない低い声で聞いてくる。

最初から裏の顔だな。

「そのままの意味だ。情報提供者は…言えないな。ハハッ、とりあえず座れよ。榎田。」

そう、俺が呼び出した人物とは榎田だ。

「そんなことどうでもいい。何が目的？バラしたらレイプされたって言いふらすから」「ハッ、証拠がねえ上に冤罪だぞ、それ。」

俺がそう言うのと、櫛田は近づいてくる。そして：原作で綾小路にやっみたいに俺に胸を触らせてきた。俺は綾小路と違うのでしっかり揉んで堪能する。当たり前だよなあ?!

「大丈夫。これで嘘じゃなくなるから。というかあんた何」

胸を揉んでんのかつて？そりゃ揉むだろ？でも悪いな。そこまで言わせるつもりはない。

「わざと俺に胸を触らせて服に指紋を付けようってか」

俺が喋って櫛田が喋る隙をなくす。そして：俺はポケットからスマホを取り出し、録音を停止する。さっき言葉を遮ったのは触らされた後は自分から揉んでいたってことを録音されなくなかったからだ。

「残念、録音済みだ。」

『服部君、あれどういう』

—— わざと俺に胸を触らせて服に指紋を付けようってか』

「しつかり冤罪の証拠だ。ハハ、俺がお前の胸を堪能したのに、お前は損しかしてないな」

「この変態。チツ、最悪…なんなのよ、あんた」

「安心しろつて。秘密をばらす気はねえよ。とりあえず座れ。今回はお前と契約を結びに来たんだ。」

「契約？」

座りながら櫛田が聞いてくる。俺は予め用意していた紙を出す。

『服部晴秋（以下これを甲とする）、櫛田桔梗（以下これを乙とする）

・ 甲は乙に月3万prを支払う。

・ 乙は甲にDクラスの情報及び手に入れた他クラスの情報を提供する

・ 情報内容によっては甲は乙に月の3万prとは別にprを支払う

・ 卒業までに甲は乙に2000万pr譲渡する』

内容はこんなもんだ。要するにスパイ。原作知識がある俺が何でスパイを作ろうとしたかって？

理由は2つ。

まず、原作改変した場合に情報の齟齬を埋めるため。

次に、これは榊田だからこそなんだがこいつなら原作に載ってない情報も手に入る。例えば、こいつが固執している『他人の秘密』とか。

「金欠のDクラスのお前からしたら破格の条件だろ？ていうか、過去をバラされたくないならお前はこの契約を結ぶしかないぞ。早く書きな。」

「…分かった。でも2000万つて何？あと一つ頼みたいことがある。」

「なんだ、知らなかったのか？2000万Prでクラスを移籍出来るんだよ。つまり2000万Prがあれば確定でAクラスで卒業出来るって訳だ。で、頼みたいことつてのはなんだ？」

どうせ堀北の退学だろ？

「堀北鈴音を退学させてほしい」

「堀北か…いいぞ、やってやる。だから早く契約を結べ」

「絶対退学させてよ」

「分かったから、早よ書け」

やっと榊田が契約にサインし、俺に紙を渡す。契約も終わったし、そろそろ俺の設定をバラすか。

「契約ありがとな。ところで………榊田にお知らせがありま〜す！」

出来るだけ明るい声を心がけて喋る。

「まだなんかあるの」

「今度は榊田にとつていいお知らせだぜ。なんと…俺は榊田の過去なんて一切知りませ
〜ん」

「は？何言っんの？」

「ガチガチ。榊田ってDクラスじゃん。でもさ、榊田って勉強も運動も結構出来るんで
しょ？で、高円寺とか堀北と違って協調性もある。だから、何でDクラスに配属された
のかな〜って思ってたさ。で、思いついたのが過去になんかやらかしたってこと。」

「は？何が言いたいなの？」

「過去になんかやったってのは予想つくけどその内容までは分からない。まあ、かまか
けたんだよ」

「はあ？ふざけんなよ、お前！」

やっと俺の言葉を理解したのか榊田が激昂する。

「いや〜、上手く引つかかってくれてよかった〜。ついでに言えば、お前の過去なんて知
らないってことがバレる前に早く契約結びたかったんだよね〜。だから、何回も契約を
早く結ぶように急かしたのってそういうこと」

これでかなり説得力が出たはずだ。設定とそこからくる行動の解釈一致は重要だか

らな。

「クソツ、マジで何なのよ。あんた」

「ハハハ、でもな、榎田がDクラスに配属されたつてことは学校側はお前の過去を認知している。生徒のデータを閲覧する権利でも買えば、本当に秘密を知ることができる」

「チツ…」

「まあ、安心していいよ。俺が閲覧するより先に自分の過去を生徒が閲覧することを禁止する権利を買えばいい」

「そんなポイント持っていないわよ」

「俺が貸してやるよ。今はそんなにポイント持っていないから貯まってるからになるけど」

多分閲覧禁止の権利くらいなら今130万Prくらいあるし買えるだろうな。でも、それを今知らせるのは少しリスクだ。スパイ契約でもっとPrをせびられるかもしれない。既に契約は結んだものの、情報を渡すのはあっちだからな。

「今はDクラスって0c1だけどいずれ脅威になるかもしれない。そんな時に誰よりも警戒すべきなのは榎田だと、俺は思っている。榎田を敵に回したくないんだ。だからこそ、榎田をスパイに選んだし、俺はまだ榎田の過去を閲覧してないし、榎田に俺がこれからも過去を知らないでおける方法も示した。2000万譲渡するつてのもお前を敵にしたくないっていう意思の表れだ」

唐突に櫛田上げをする。ご機嫌取って承認欲求を満たしつつ、好感度も上がる。

「へえ、そんなに私のこと評価してくれてるんだ、嬉しいな。しかもBクラスの参謀があれ？ 闇櫛田じゃなくなった。

「もう知っていたのか？ やっぱ優秀だな。ますます味方に欲しいし、敵に回したくないな」

「フフ、そっか」

「まあ、ということとでちゃんと櫛田に信頼されるような行動をするから俺のことをちよつとずつでいいから信頼してくれると助かる。」

「…本当に私の過去を知らないんだよね？」

「知らない。俺はお前に嘘を付かない。約束する」

「さつき嘘ついたよね？」

「あー。…あれは契約前だからセーフな。」

「私から信頼されたいのに、契約前とか後とか関係ある？」

「契約前は敵なんだから信頼なんてされなくていいだろ」

「契約前だからこそ相手に信頼された方がいいんじゃない？ それに敵からも信頼されるって大事な武器だと思うけど」

微妙に論点が違う気がする。まあ、いいか。

「…確かに。俺にはそんな考え方ができなかったな。すごいな、櫛田は。素直に尊敬する」

もう一回櫛田上げしとこ。

「ありがと」

櫛田が微笑む。かわいいっ……!!

「あー、とりあえずこの5月のミッション伝えるな。」

「うん。てか、ミッションってw」

「そっちのがミッション上がるだろ？」

「そんなの男子だけでしょ。服部君もつと女の子のこと理解した方がいいよ」

「なら櫛田が教えてよ。女の子のこと」

「どうしよつかなあ〜？」

なんか普通にあざとい。闇櫛田とか光櫛田とか関係なく。好きになっちゃう。いや、もう好きだ。

「まあ、それは置いといてだな。5月にやって欲しいことの1つ目は他クラスの人間を一度でいいから言うこと聞かせられるくらいの秘密を握って欲しい。特にAクラスの坂柳派の男子。これは5月とか関係なく永続的にやってほしい。2つ目はDクラスの皆が持っているPrを把握してほしい」

「2つ目のやつはDクラスだけでいいの?」

「ああ、実は今回の中間テストでDクラスにアクションを起こす気だな。その為にどれくらいDにPrがあるのかは知っときたい」

「何する気?」

「それはまだ教えられない。そのアクションを起こした時に素の反応をして欲しいからな」

「分かった」

「後、アクションを起こすのは中間の後だから、Dが持つてるPrも出来るだけ中間に近い時の情報がいい。それ以外は普段通り過ごしてくれ、情報が手に入ったら連絡頼む」

俺はそこまで言うと言田に3万Prを送った。

「もうくれるの?」

「言ったら、信頼されたいって。とりあえず良い成果を期待してる。あ、それとだな。俺の合鍵渡しとくわ。直接話すときはカラオケルームか部屋のどつちかが良いからな」

「なら、私の合鍵も渡しといたほうがいい?」

「俺に合鍵を渡すのに抵抗はないのか?」

「信頼されたいから、どうせ何もする気はないんでしょ」

確かにそうだけだ。よくそんな簡単に俺のこと信用できるな。それともキャラ的に

合鍵を渡す行動を取らないといけないってことか？

：もしそれでも自分から言い出したのはなんでだ？櫛田のキャラ的に断らないってのは分かるけど、自分から言い出す必要は無いはずだが。

まあ、気にしても仕方ないか。

「そうだな。じゃあ、合鍵くれ」

「今は無いから今度渡すね」

「オツケー。後さ、」

「まだあるの？」

「これで最後だ。おまえの過去が関係してるのかは分からないが、櫛田って乱暴な面と人当たりがいい面で顔を使い分けてるよな。」

「だから何？それが悪いことだとしても言いたいなの？」

まあ、俺自身としてはあんまり好きじゃないな。でも、ここは櫛田に寄り添うムーブをする。

「いや、そんなつもりはない。むしろ、他人に好かれようと一生懸命な姿は尊敬する。たださ、ずっと続けているとストレス溜まるだろ。だから、ストレス溜まったら俺に相談しろよ。好きなだけ愚痴聞いてやるから。ついでに言えば、ストレス発散に適したもんが

俺の部屋に置いてあるんだよね」

「何が置いてあるのよ?」

「サンドバッグとグローブ。イラついた時に殴ればスッキリするんじゃない?」

「まあ、考えとく」

「おう」

こうして俺と榊田のスパイ契約が無事に終わった。

榊田とスパイ契約を結んで数日後。今日は週末。榊田に仲介役を頼み、俺と外村と榊田で電気屋に向かっている。

「今日は来てくれてありがとな、外村。後ごめんな榊田と2人つきりじゃなくて」「い、いや、気にしないでござるよ」

そう言うが、分かりやすく外村はがっかりしている。ついでに、外村というのは原作で博士と呼ばれているオタクのことだ。

今日はこいつに少し教えてほしいことがあって榊田にこの場のセッティングを頼んだ。俺たちが電気屋につき、早速外村に聞きたいことを聞く。

「外村。早速今日の本題に入りたいんだが、人に見つかりづらい超小型で長時間録画出来る電池式のカメラとか分かるか？そういう分野に詳しいって聞いたんだが、そこまでは流石に分からないか？」

「フッフッフ。舐めてもらっては困るぞ、服部殿。それがし、その分野も勿論分かるでござる。拙者に任せるでござる。」

「おお、マジか！助かった。」

数十分後

「いや〜いい買い物が出来たよ。外村。」

俺が今日買ったのは、さっき外村にリクエストした条件を全て満たした超小型カメラ2つとそのバッテリーで、約1万5000prくらいで済んだ。

「役に立てたのなら、何よりでござる」

「よかったね、服部君」

「ああ、榎田もありがとな。仲介役を頼んで」

「気にしないでいいよ。」

「外村。これ今日の感謝だと思って受け取ってくれ」

そうやって俺は外村に2万prを送る。

「こんなにいいのでござるか?!」

「こんなにつて…マジで金欠なんだな、Dクラス。」

「そうなんだよね。ホント、クラスポイント0とかもう来月とかどうやって暮らしていいか分からないよ」

「そうなたら榎田には俺がP R貸してやるよ。外村は男だし…山菜定食も耐えられるだろ」

「ひどいでござるか?!」

まあ、とりあえずこれで榎田がP Rをある程度持つていても変じやなくなつたか。それにしても榎田はこれを狙つて言つたんだらうか。だとしたら逸材だな。

俺は3人で寮に帰る時にそんなことを考えていた。

Pr稼ぎ

中間テストまで後1週間。学校全体が勉強ムードになってきた。スパイ契約やカメラの購入が終わり、今まで何をしていたかっていうと特に何もしていない。

強いて言うならずっと姫野と勉強していたくらいだな。姫野は原作でOAAで学力が60越えていてそこそこ高い数値だったけど、原作知識を持つ俺をサポートしてもらうってなったらそのレベルじゃ良い策は出ないかもなあと思って、一緒に勉強していた。

まあ、必ずしも学力と知力、思考力がイコールな訳じゃ無いけど思考力の高さには知識の幅が直結するからな。それに俺の仲間があんま凄くないってのはシンプルに嫌だし。来年でOAAが出た時に、学力80は出せるくらいの実力は付けてもらおうつもりだ。と言っても、俺が教えられる科目は数学、理科くらいだが。他の科目も点は低くないけど、全部暗記のおかげだからな。教えるのには向いてない。

おっと。今は姫野との勉強会の話は置いとかないとな。時刻はHRが終わった直後。まだ星乃宮先生以外教室を出てない。事前に伝えていた姫野と神崎と教室の扉の前に

立たせ、誰かが教室から出ることと他クラスのやつが入ってくるのを防がせる。俺は壇上に立ち皆に向かって話しかけた。

「皆、聞いてくれ。今回中間テストの必勝法を手に入れた。それを今から皆に配ろうと思う。教室を出る前に一度席についてくれ」

それを聞き、皆は俺の言う必勝法は何だ、とかそもそも必勝法なんであつたのか、とかザワザワしながらも席に着いてくれた。

「俺が今から渡すのは中間テストの過去問だ。毎年同じ問題が多く出るらしい」

「マジで!？」

「すげえ!」

「流石、参謀!」

めっちゃはしゃぐやん。

「ゴ、ゴホン。…とにかくそれを使って今回の中間は乗り切れ。具体的には90点以上を量産してくれ。」

こんな漫画みたいな咳払いとか初めてしたぞ。

テスト前日の昼休み。俺は櫛田を屋上へ呼び出していた。

「で？ずっと接触してこなかったのに今さら何の用？」

スパイ契約直後、俺は「今まで通りに過ごせ」という命令を送っていた。そして、超小型カメラ購入後のこいつとのやり取りは一度だけ。

少し前に向こうから携帯で過去問を手に入れた、という情報をもたらただけだ。

まあ、知ってたんだけど。それに対して俺は「そうか。Dクラスにばら撒くなら前日にしろ」と返しただけ。

ついでに、今まで接触しなかったのは特に用がなかったのと、原作乖離を出来るだけ無くす為だ。

てか、たった1ヶ月ちよい連絡しなかったただけだろ。今さらとか言う？

「何怒ってんだ？もしかして放置プレイは初めてだったか？」

「そもそもプレイなんかしたことないっての！」

「ハッ、嘘つけ。過去がバレたと思った瞬間胸触らせて誘惑してくるピツチじゃねえか」「うっさい！あれはもう忘れろ！」

「いや、忘れられないね、あの感触は。Dか？それともE？」

まあ、Dカップって知ってるんだけどな。グへへ。

「教えるわけないでしょ、この変態！」

変態？やめてくれよ。Mに目覚めそうになるじゃんか。

「まあ、落ち着けて。なんか今日怒りっぽくね？なんかストレス溜まることでもあったか？俺の胸で嫌なこと吐き出すか？ぎゅーっと抱きしめてやるよ」

さあ、来い。って感じで手を広げる。

「行かないわよ」

「クツ」

「クツ、じゃないわよ。このケダモノ。煩惱丸見えよ」

「ケダモノとはなんだケダモノとは。可愛い女の子を抱きしめたいって思うのは普通のことなんだぞ」

「知るか、そんなこと。マジきもい。それより何の用で呼んだのよ？」

「ただお前に会いたかったただだ、って言ったらどうする？」

「帰る」

即答しやがったぞこいつ。

「冗談だ、冗談。ちゃんとした用はある。まず聞きたいのはDクラスは今どれくらいのPrを持ってんのかってことだな。」

「私を入れて大体30万くらいかな。と言ってもみんな毎日ある程度消費してるし、もう少し少ないかもだけど」

「そうか。まあ初仕事としては上出来だ。よくやった」

そう言つて俺は櫛田の頭を撫でる。こいつの髪サラサラしてんな。しかもなんかいい匂いする。女子つてみんなこうなの？それともこいつが美少女（性格抜き）だから？

「気安く触んな」
バシツと俺の手が払われる。なんかアレだな。あんましヒロイン化は上手いかねえな。

「クツ」

「クツじゃないわよ。2回目なんだけど」

「悪い悪い。まあ、冗談抜きにナイス仕事だ。流石つて所か」

「ふん。まあ、私なら当然よ」

なんかいい気になつてんなこいつ。かわいいからいいけど。

「用事つてこれだけ？」

「まさか。もう一つある。今日、茶柱先生に

———」

翌日。今日はテスト当日だ。みんな少しソワソワしてるな。他の奴らは後はテスト

で全力を出し切るだけ。だが、俺はここでもう一つ仕事をする。って言っても先生に一個頼み事するだけなんだけどな。

「星乃宮先生。中間テスト、良い点取れた生徒にはご褒美をあげてみませんか？」

「ん？どういうことかな？」

「言葉通りの意味ですよ。初めての水泳の授業の話なんですけど、先生が俺たちに50m泳がせて一番速かった生徒に5000prを支給する、なんてことがあつたんですよ。そのことから察するに、教師と生徒の間でprでのやり取りは可能なんですよね？」

「なるほどね。おもしろいこと考えるね、服部君。その話、具体的には？」

さて、そこまでは考えてなかつたな。過去問あるし、今回は順位より点数の方がいいな。総合は念の為に順位にしとこう。

「そうですね。各教科につき9割以上取れた生徒は1万pr、満点は3万pr。総合点の方は順位ごとで。5位が1万pr、4位が2万pr、3位が3万pr、2位は5万prで1位は10万prでどうでしょうか？」

悩み顔をする星乃宮先生。ダメか？

「うーん。各教科ごとについてはそれでもいいけど…総合の方は報酬が高すぎるよ。欲張りすぎ。5位が1万pr、4位が2万pr、3位が3万pr、2位が4万pr、1位が5万pr。これならいいよ」

「じゃあ、それでお願ひします」

テストが始まったけど、まあ特に難しくもないな。過去問があるつてことを差し引いても簡単。そんなことを思いながらテストに答案を書いていく。まあ、俺からしたらこの中間テストで大事なイベントはテストそのものじゃないな。

テスト返却日。朝のHRで星乃宮先生が教室に入ってくる。

「星乃宮先生！テスト返却はいつでしようか？」

一之瀬がそう聞く。

「安心して。一之瀬さん。今からテスト返却よ」

星乃宮先生が黒板に大きな貼り紙を貼る。

「皆今回はよく頑張ったわ。赤点者は無し。平均は9割越えだったし、点数が9割以上は勿論、満点の生徒も沢山。服部君のおかげでprをいくらからもらえる子がいっぱいよ」

それを聞き皆が歓声を上げる。そこまで騒ぐことじゃねえだろ。過去問あったんだ

し。俺は自分の結果を見つける。全教科満点だ。まあ、今回は過去問あったし満点なんて大して凄くないか。過去問マジ偉大。

よし、自分の点も確認したし、Dクラスのところに行くか。と、その前に姫野に頼み事があるんだった。

「姫野。俺今から教室出るからさ。一之瀬が教室出ないよう見張つててよ。もし、出そうになつたら止めてくれ。あ、もし俺がいないことに気づいたらトイレつて言つてくれ」

「えっ、ちよつと何する気なのよ?」

「プライベートポイント稼ぎ」

そう言つてさっさと教室を出てDクラスに向かう。

Dクラスの教室につき、俺は勢いよく扉を開ける。Dクラスのほとんどが俺をみてくる。

「なんだ、お前は。今はHR中だぞ。」

「そうでしたか。それは失礼しました。そんなことよりこのクラスは退学者何人出ましたか?」

「1人だ」

「適当に聞いてみたらマジで退学者いんのかよw」

ここで既に退学者がいることを知ってたからおかしいからな。まるでカマをかけたかのように言う。

「てめえ…!!」

須藤だ。なんだかんだ初めて会った気がする。

「あー。もしかして須藤がその退学者ですか？」

「そうだ」

「ついでに赤点逃れるために何点足りなかったんですか？」

「1点だ」

「そうですか。それにしても運動以外はマジで何もできないんだな」

「何だと?! てめえ!」

「落ち着いて、須藤君。それで君は誰で何の用かな？」

平田。こいつも初見だな。実はまだ他クラスの奴とは全然接触していない。

「おっと、悪い。まだ名乗ってなかったな。俺は服部晴秋。Bクラスの参謀だ。よろしくな、平田」

「よろしくね、服部君。それで何の用なのかな？」

「須藤の退学を取り消しに出来る方法があるんだけど教えて欲しい？つて聞きに来た」
「マジかよ?! 教えてくれ!」

「よかつたな須藤!」

「これからもよろしくな須藤!」

3 バカ共が大はしやぎしてる。おいおい。頭の中お花畑か? 喜ぶのはまだ早いだろう。

「何言つてんだ? お前ら。もしかして対価もなく教えてもらえんと思つてんのか?」

「何だよ! 対価つて!」

「そんなもん p r しかねえだろ」

「持つてる訳ねえだろ、俺たち O c ーだぞ!」

だからなんだ。限界まで搾取させてもらうぞ。

「そこまで大金寄せつて訳じゃねえよ。そうだな、平田。このクラスで50万プライベートポイント集めて俺に差し出せば須藤の退学を取り消す方法を教えてやるぜ」

.....50万は十分大金だな。

「皆! 須藤君を助ける為にポイントを貸してくれないかな?」

そういつて、平田は慌ててみんなから p r を集め出ようとすする。

「私出すよ。まだ須藤君とはまだ一緒にいたいもん。」

真つ先に天使な櫛田が声をあげる。キャラ的にはそうするしかない。まあ、あいつには後で返すつもりだけだな。その後も櫛田と平田のおかげで十数人からポイントが集まる。だが……

「すまない。俺は須藤を助けるためにポイントを出せない」

幸村だ。この時期じゃ、周りのこと見下しまくってるだろうし退学なんて逆にラツキーって感じなんだろうな。

「何だど？てめえ！クラスメイトが困ってるのになんでそんなことが言えるんだ！」
「当たり前だろ。お前がこの先クラスに貢献するとは思えない。」

幸村の話を聞き、ポイントを出そうとしてやめるやつがチラホラ出てくる。

「平田君、ごめんね。私も須藤君がこのクラスの為になるとは思えなくて」

「私もー。ごめんね、平田君。」

「ツ！お前ら……！」

俺が何もしなくても須藤は綾小路に助けられる。つまり俺は須藤の生存よりプライベートポイントが手に入るかどうかを考えなければならぬ。ここは助け舟をだすか。「そうだ、Dクラス。先の見えてないお前らに良いこと教えてやるよ。この学校は実力で生徒を測る。勿論実力つてのは学力だけじゃねえ。身体能力もだ。具体的に言ったら2学期には体育祭があるらしい。そいつを助けて損はないぞ」

「待て。何で敵にそんな重要な情報を与えるんだ」

嫌か？ 俺が須藤に助け舟を出すのが嫌か？ 幸村？

「俺はプライベートポイントを稼ぎたいだけだからな。須藤が退学するかどうかなんかどうでもいい。俺はp rを稼げる。お前たちは須藤を助けられる。win-winだろ？」

それを聞き、不満げだが納得そうにする幸村。まあ、嘘は付いてないからな。納得するのも当然だ。そして……………

「私たちも出すわ、平田君。綾小路君も出してくれるみたいよ」

おいおい堀北（笑）。隣の綾小路はえつ、みたいな顔してるぞ。いいのかホントに（笑）。本人には悪いが、こつちとしてはあの綾小路が振り回されてるのを見るのはマジで面白いな（笑）。

「ありがとう。堀北さん、綾小路君」

数分後。

「ごめん、服部君。クラスから集められるだけp rを集めてみたんだけど、どうしても20万p r以上足りなくて」

そうだろうな。Dクラスの大体のp rは櫛田を通して把握してある。こいつらが持

つprは30万程度。ならなぜ俺はその額を圧倒的に超えるprを要求したのか。それは…

「そうだ！茶柱先生。成績上位者に貰えるprっていつ支給されますか？」

「そうだ、それだよ！櫛田さん！」

平田が光明が差したとばかりに勢いづく。しかし…

「成績上位者に対するプライベートポイント支給は次の1日だ」

「そんな…」

「へえ。お前らもそんなことしてたんだ」

あえて俺はとぼける。他クラスの俺が知っておくのはおかしいからな。だが実は、これも俺が仕込んだものだ。

事態はテスト前日。

「用事はこれだけ？」

「まさか。もう一つある。今日茶柱先生に頼んで成績上位者にpr支給をするように頼め。ちゃんと皆の前で言えよ」

「どういふこと？」

「体育の水泳の時間で1番取ったやつにプライベートポイントが支給されなかったか？」

「…されたけど。それが何なの？」

「分らないか？ 先生に頼めばテストでも同じことできるだろ」

「！そういうこと！でもそれだと赤点候補たちに恨まれるかもだから私的にはやりたくないんだけど」

「安心しろ。実際に赤点取らなかつたら何も言つてこないだろうし、赤点取つたら俺からしたらむしろその方が都合がいい」

「アンタが都合良くても私は良くないのよ」

「それも安心しろ。お前が恨まれない、いやむしろ感謝されるように立ち回つてやる」
「どういうこと？」

「俺に任せとけつてことだ」

「…信じていいんだよね」

「ああ。俺はお前のボスだぞ。部下が不利になるようにはしねえよ」
「部下になつたつもりはないんだけど」

つれないな。ボスとか社長つて呼んでくれてもいいのに。

「照れるなよ。後、具体的な報酬は各教科ごとに90点以上は1万、満点は3万。総合点は順位で決める。5位が1万pr、4位が2万pr、3位が3万pr、2位は5万prで1位は10万prだ。各教科の方は問題ないと思うが、総合点の方は適用されるか微

妙だからもし断られたら報酬のポイントを下げて頼め」

「分かった」

なんてことがあった訳だ。

「平田。ならこうしてやる。今あるポイントは全部俺に渡せ。そして、次のポイントが振り込まれた日の内に俺に今から渡すポイントと合計で50万prになるように俺にポイントを渡せ。」

「分かった。」

「じゃあ、正式に契約な。茶柱先生、契約の立ち会い人になってくれますか?」

「いいだろう」

『平田は今からあるだけのprを俺に払う。そして7月1日までに今から振り込む額を含めて合計50万pr俺に払う。そして俺は平田に須藤が退学しないための方法を教える。もし俺が平田に須藤が退学しないための方法を教えたにもかかわらず、約束の日までに合計50万pr支払わなかったらペナルティとして平田は自主退学する』これでいいか?」

「問題ないよ」

「ちよつと待つてよ！平田君が退学するつてどういふこと？」

「言葉通りの意味だ。もしお前らが須藤を助けた後に『須藤を助けたんだし、俺との契約無視しちやおう』とか考え出さないようにするためだよ」

「そんなことする訳ないじゃん！」

「なら契約破つた時のペナルティ付けても問題ないだろ」

平田の取り巻きのモブ共が黙る。まあ、黙るしかないよな。完璧な正論だし。

「じゃあ、プライベートポイントを振り込んでくれ。俺のIDこれな」

そういつて学生証を見せる。十数秒後に30万近い額が俺に送金される。

「なら、須藤を助ける方法を教える。その方法つてのは須藤の点数をかうんだよ。pr
で」

「点数を…買う？」

「そうだ。この学校にあるものでprで買えないものはない。そうですね、茶柱先生」

「そうだな。ついでテストの点は1点につき10万プライベートポイントだ」

「…そんな……」

Dクラスの皆が絶望した様な表情をする。俺が今こいつらから残りわずかなのpr
を取ったばっかだからな。

「フッフ」

つい、笑い声が漏れてしまった。Dクラスのの何人かが俺を睨む。安心しろって。ちやんとポイント渡すから。須藤に退学されると困るのは俺も同じだからな。

「あー。10万かー。そういえばさつき10万以上のポイントが手に入ったんだよなー」

すつげえ棒読みになってしまった。

必死な形相で平田が俺を見つめてくる。

「頼む、服部君。僕たちにPrを貸してくれ」

平田は頭を下げて俺に頼む。なんか気分がいいな。ダビダンスでも踊りたくなるぜ。ハハッ。

「いいぜ、平田。そうだな……こっちの方は返すの2ヶ月以内でいいぜ」

「ありがとう…服部君！」

「じゃあ、また新しく契約な」

2つ目の契約も終わり、平田は須藤の点を買って無事須藤は退学せずに済んだ。

「じゃあな、Dクラスの不良品共。ちやんとポイント払えよ」

そう言って俺はDクラスを後にした。

テスト返却日の放課後。

「ねえ、服部君。テストも無事終わったし、皆で打ち上げ行くんだけど、服部君もどう？」
一之瀬の取り巻きたちに誘われた。

「いや、いい。俺は遠慮しとく。」

「そんなこと言わないでさ。今回のテストで皆が良い点取れたの服部君のおかげだよ？」

「そうか。でもこれから姫野と用事があるんだ、悪いな。また今度誘ってくれ」

隣にいた姫野が驚く。

「えっ?!もしかして2人ってそういう関係?」

「違う」

なんでそれだけのことで恋愛に繋がたがるんだよ。このピンク脳が。

「そっか。なら、姫野さんも無理なんだね。じゃあ、2人ともまた今度誘うよ」
「おう」

そういつてその女子生徒がどっかに行く。

「ねえ、ちよつとさつきさんのどういう意味よ?」

「俺が誘いを断った後に、矛先がお前に行くのを未然に防いだんだよ」

「じゃ、じゃあ私のためってこと?」

「おう。言ったら、面倒なイベントは避けさせてやるって」

「……アンタはさ、私のことが関係なくても行かなかったの？」

「んー。そうだな。…行ってたかも」

「私のためだけに断ったってこと？」

「…そうなるかもね」

「バツカじゃないの」

「お前は今日いい仕事してくれたしな。お前のおかげで一之瀬の邪魔が入らなかった。その見返りだよ」

あいつが来たら絶対見返り求めずにポイント貸すからな。未然に防げたのは姫野のおかげだ

「いや、私特に何もしなかったわよ。確かに一之瀬はアンタがいなくなつたのに気づいたけど、私がトイレだつて言ったら、納得してそのまま友達と喋ってたわよ」

「そうか。まあ、それでもお前のおかげなことには変わりない」

「てか、ポイント稼ぎって何したのよ？後どれくらい稼げたの？」

「そうだな。教えてやるからカラオケでも行くか」

「なんでよ。ここじゃ話せない話？」

「いや、そういう訳じゃないけど、俺たち打ち上げ行けないからさ。せめて2人だけで楽

しもうぜ」

「は、はあ？それじゃ本末転倒じゃない。」

「いや、それは違うね。姫野はあんまし仲良くない人と多人数で長い時間騒ぐのが苦手ってタイプだろ？なら、別に俺となら大丈夫じゃん。俺たち仲良いんだし」

「いや、別に仲良い訳じゃないし……」

……悲しいこと言うなよ。泣くぞ。

「でもBクラスで1番仲良い奴ってなったら俺だろ？」

「そ、それはそうかもだけど」

「安心しろって、絶対楽しいから。俺が保証する」

俺は姫野の手を引っ張り、無理矢理連れて行こうとする。

「ちよ、ちよつとやめてよ。恥ずかしいから！

分かった、カラオケ行くから！」

カラオケにて

「じゃあ、何歌う？」

「私が歌うの？」

「そりやね。大声で叫んでみなよ。気持ちいいよ」

「じゃあ、アンタがまず歌ってよ」

というこゝで、まず俺が一曲歌い、次に姫野が歌うことになった。

「どう？ スツキリした？」

「まあ、ちよつとだけね」

そう言いながらも結構満足そうだし、なんならウキウキしながら俺より先に次の曲を入れようとしている。

「かわいすぎんだろ」

「か、かわ…。だ、誰が?!」

その反応すら可愛い。

「勿論、姫野だけど？」

「そ、そんなことないでしょ。ほ、ほら。私なんかより一之瀬の方が全然かわいいでしょ」

「そんなことないと思うけど。姫野は可愛いよ？ 多分Bクラスで1番可愛いと思う」

「な、何言ってるのよ?! そ、それよりほら。どうやってPr稼いだのか教えてよ」

「…もしかして照れてる？」

「照れてない!」

「そっか。…えつと、ポイントをどうやって稼いだか、だっけ?」

「そ、そうよ!」

話題が逸れて助かったって顔してる。一挙一投足がかわいい。

「あーどこから話すか。そうだな。——」

俺は姫野に今日の平田と結んだ契約のことを話した。

「そんなことあったんだ。というか相変わらず凄すぎでしょ。50万って」

「別にこれくらい凄くねえって。…そんなことよりもつと歌おうぜ」

「もしかして照れてる?」

露骨に話題を変えて俺が照れていると思ったのか、意趣返しとばかりにニヤニヤしながら姫野が聞いてくる。

「別に照れてねえよ」

そう返したのにニヤニヤしたままの姫野。かわいすぎるな。

そんなこんなで3時間ぐらい歌って俺たちはカラオケを後にした。

「楽しかったろ?」

「…まあ、そうかも。また誘ってよ」

「おう。姫野もまた来たくなったら俺のこと誘っていいぞ。ひとカラってキツいだろうし。」

「アンタつてもしかして…暇？」

「…そんなことない」

「絶対暇でしょ。アンタさ、私以外にまともな友達いるの？」

「は？友達とか沢山いますけど？神崎とか一之瀬とか…あとは柴田とか。」

「3人は沢山つて言わないでしょ。」

「そういう姫野はどうなんだよ？俺以外に友達いんの？」

「…そこそこいるわよ、そこそこ」

「絶対いないじゃん」

そんなことを言い合いながら、夕暮れの中俺たちは寮に帰った。

中間テストが終わって

テスト返却日の翌日の放課後。特に用事もないので、家でオンライン将棋とか筋トレをしていた頃。俺の部屋に櫛田が来た。言つとくけど、俺は誘ってない。つまり…女の子が向こうの方から俺の部屋に来た…！

「一体何の用だよ？」

いや、待て。早まるな俺。テスト前日に会った時はヒロイン化が上手くいってなかったじゃないか。だが。だが！もしもということも……………

「金返せ。後、昨日のことを聞きに来た。どこからどこまでがあなたの計算通りだったの？」

はい、ありませんでしたー。うん。いやね、うん。分かってたよ、うん。

「なんだ。そんなことか…」

「何でそんな残念そうにしてるのよ？」

素で不思議そうに首を傾げる櫛田。可愛い。あざとい。

「……別に。気のせいだろ。ポイントの方は今返してお前がポイント持つてることバレ

たらどうすんだよ？お前のキャラ的に須藤救出でポイント残しとくのはキャラ的に不自然なんじゃないの？」

「それは大丈夫。他クラスの友達から借りたってことにするから」

流石、人気者ですな。

「便利な言い訳だな。ていうか、実際どれくらい須藤救出にポイント出したんだ？」

「4万ポイントくらいかな」

「おー。そこら辺はしつかりしてんだな」

「こいつは8万Prは確実に持っている筈だ。だが、全額送れば平田にだけだが、榎田が不自然にポイントを持っていることがバレる。それを上手く避けたいらしい。」

「当たり前でしょ」

確かに。榎田は何だかんだ優秀だしな。そこら辺は言われるまでもないか。

俺は榎田に4万Pr送る。

「送っておいたぞ」

「ありがと。で、もう一個の用件に移りたいんだけど、アンタの中ではどこからどこまで計算通りだったのよ？」

「どこから、か…」

俺は頭を切り替え、中間テスト、言い換えるなら1巻の出来事を振り返ってみる。

「まず、俺の策が始まったのは櫛田が過去問を手に入れるところだ」

「えっ、そこから？でも私、過去問を手に入れたのはアンタからの指示じゃないよ？」

「そういうえげそうだった。カッコつけて、最初から最後まで全部計算通り、みたいなことするんじゃないか？」

「…まあ、それはあれだ。ほらアレ。お前が過去問を手に入れてなかったら、俺から前日に渡していた。過去問の価値にはテストの告知の時に既に気付いていたからな」

「凄すぎない？」

「フツ。上手くカッコつけることには成功したみたいだ。というか、将棋部の人たちに過去問貰わなくてもこいつから貰えば良かったな。たかが数万ポイントとはいえ損したな。」

あと綾小路が過去問に気づいたことは伝える気ないのか？櫛田から見てもまだ綾小路はノーマークってこと？

「それで、次の手はテスト前日にDクラスが過去問入手したことで成績上位者がポイントを手に入るようにさせたことだな。この一手には2つの意味があるんだが、分かるか？」

「えーつと…。1つ目は契約の時にアンタが得られるポイントを増やすためでしょ？」

「……………2つ目は……………何だろ、うーん。分かんないや。何なの？」

「2つ目は中間層の成績を上げることだ。赤点候補者は過去問を前日に手に入れれば必死に勉強するだろ？でも中間層は？」

既にある程度はテストに余裕があったのに過去問なんて手に入れたらちよつと過去問見直すだけで確実に赤点取らないだけの点を取れるだろ。

でも点数が9割以上に報酬が与えられることになったら中間層も必死に勉強するだろ？

「そしたら、改めて赤点候補者は赤点の可能性が高くなる」

「あー。確かに。じゃあ、2つ目は誰かが赤点を取る確率を上げるためってこと？」

「そういうことだ」

まあ、須藤が退学になることは既に知ってたんだけどな。

余談だが、こつちの世界のDクラスの英語の平均点は80.7。赤点ラインこそ変わらないが、平均は伸びていた。まあ、どうでもいいことだけどね。貸すポイントが10万増えたって返って来さえすれば俺のポイントは変わらないし。

「そして最後はお前も知つての通り赤点を取り消す方法を教える代わりに大量のprをゲット、だ」

「私にDクラスのポイント総量を調べさせたのもそのためよね？」

「そうだな。というか、それが一番はじめだな。櫛田が過去問手に入れる前に調べ始め

させたんだし」

「そういえばそうだね。じゃあ、結局アンタは私とスパイ契約を結んだ時からあの状況を想定してたってことでいいの？」

「その認識で問題ないぞ」

「ヤバすぎでしょ」

原作知識があつたからこそまで上手く立ち回れただけだ。まあ、こんなことを櫛田に言える筈もないが。

「そういえば、50万Pr払うことができたのは櫛田のおかげだってのはDの奴らに遠回しに伝えたのか？」

「うん。アンタが一昨日言ってたむしろ感謝されるってそういうことでしょ？

私が『須藤君が助かったのって成績いい人たちがPr貰えるようになったおかげだよね』

って言ったら、あいつら簡単に騙されて

『じゃあ、先生に成績が良い人達がポイント貰えるように頼んだ桔梗ちゃんのおかげじゃん』

『確かに』『ナイス櫛田ちゃん』

とか言つてさ。笑つちやうよね。全部こつちの思い通りなのに」

やめたれ。入学1ヶ月で1000cc1溶かすような不良品だぞ。ヤンキーなCクラスよりよっぽどアタオカなやつらだ。

「そういえばさ。もし須藤君が赤点取らなかつたら、今回アンタが考えてたことは全部無意味だったの?」

「もし今回赤点者がいなくなつたら、期末テストで3バカを赤点にさせてたつもりだ」
「どうやって?」

「期末は恐らくだが過去問に価値はない。つまり純粋な学力で赤点を乗り切らなければならぬといけないんだ。だが、そこで過去問を3バカだけに渡す。櫛田が『確実に3人が退学しないように3人にだけ過去問を渡して他の人にはワザと渡してないの。だから他の人には言っちゃダメだよ?』とか言つて口止めさせてな。試験週間よりずっと前に渡せばアイツら勉強サボるだろ?もし、過去問を使つても意味なし。まあ、過去問があると油断してるのが、他の奴らにバレないようにする必要があるわけだけど。それについては櫛田が3人と勉強会と称して意味ない過去問を暗記させとけば良い。アイツらがうっかり口を滑らせなければ、櫛田が勉強を見てるから余裕がある、つて風に勝手に勘違いしてくれるだろ。…まあ終わった話してもしようがないか」

即興で考えたけど、そんなことしたら櫛田の株が落ちまくるな。使えねえ作戦だわ。

「そうだね。でも、やっぱりアンタ凄いわ。簡単に誰かを退学に追い込む策を思い付くんだもん」

凄くねえぞ。お前の信頼が地に落ちるような作戦だ。

「褒め言葉として受け取っとく。でもまあ、実際成功するか分かんないし。所詮妄想の域を出ねえよ」

「この感じなら、簡単に堀北も退学にできそうだね」

かわいい声して怖いこと聞いてきやがる。

「それなんだけどき。ホントにやる気なの。堀北を退学させたい理由って何なの？」

「それ言わないとダメ？」

こてんと首を傾げる。かわいい。クソツ。そうじゃなくて。

「…大事なところはボカしていいから、簡単に教えてくれ」

既に知ってるけどな。知ってたらおかしいことはちゃんと聞いて整合性を取るようにする。

「あんま言いたくないんだけど。…まあ、いいよ。特別に教えてあげる。特別だよ？」

そんなに『特別』を強調するな。ドキドキするだろ。こいつたまに闇の時もそういうムーブかましてくるんだよな。ワザとだと分かかっていても胸が高鳴ってしまう。

「アイツは私の同中で私の過去を知ってる。だから誰かに喋られる前に退学にしたい」

「あー。そういうこと。でもさ、堀北だろ？ ホントに櫛田の過去を知ってるの？ アイツ絶対他人に無関心で知らないってこともあり得るんじゃないの？」

俺がわざわざ既に知っている堀北を退学にさせたい理由を聞いた訳。こうやって説得するためだ。

「確かに。アイツが私の過去を知ってる保証はない」

「お？ 割と簡単に行けそう？」

「なら……」

「でもアイツが過去を知らない保証もない」

「チツ。そう簡単じゃねえか。」

「いや、絶対知らないと思うよ。俺が断言する」

とりま、ここでなんとか説得して、堀北退学を諦めさせたい。堀北退学とか面倒くさすぎるんだよ。何が面倒かって綾小路がバックにいるのがマジでだるい。もし、綾小路がいなければ堀北退学は余裕なんだが。

「何を根拠に？」

「……………」

根拠は原作に書いてありました、なんて言える訳がない。

チクシヨウツ。反論が出てこねえ。

「だよな？確かに私もアイツは私の過去を知らない可能性の方が高いと思う。でも1%でもアイツが知ってる可能性がある限り、アイツを退学させないと私の平穏な学校生活は戻ってこない」

「さいですか。これは説得無理そうだな。これなら綾小路に邪魔されないようにあつちを説得する方が楽だな。」

「…分かった。一応だが、アイツを退学にさせる策は1つ思いついてる」
「ホント?!」

「そう言つて榎田が俺にガバつて抱きついてきた。パイが！俺の胸のあたりにパイが当たつてる！」

「すごい。やばい。超ヤバい。…ダメだ。語彙が飛んでいく。」

「ありがとう。ふふつ。これで私の平穏が戻ってくるんだ。アハハ。サイコーの気分」

「榎田が抱きしめる力を強めてくる。生きてるか、俺の理性。耐えろ。耐えてくれ。」

「あつごめん」

「我に戻つたのか榎田が俺を解放した。いや、解放せんでも良かったのに。いや、それだと俺の理性が死んでたかもな。」

「…何露骨に残念がつてんのよ」

「いや、暖かかったなく。と思いました」

柔らかかったとか言ったら確実に引かれる。それだけは避けねば。あつたかいつてのはほらアレ。体温の話だから。セーフ。

「ふうくん。なら、もう一回抱きしめてあげよつか?」

「えっ!?!」

は?えっ?どういうつもりだ?もう我に返った後だよな??

まさか、素で俺のことを……………

「どう?暖かい?」

なんて考えている暇はなかった。さつき咄嗟に柔らかいじゃなくて暖かいと言ったがそれは嘘ってわけじゃない。気持ちのいい温もりを全力で俺は堪能する。ついでにパイが当たつてる辺りには神経を全集中させる。

「ねえ、どうなのよ?」

少し心配そうに上目遣いで聞いてくる。やめて。なんかあげたくなる。でもなんだろう?なんかちよつと素っぽいんだよな。ナチュラルあざとい所もあるってこと?それって最強じゃね?

「う、うん。あつたかい」

やばい。それしか言葉が出てこないけど超ヤバイ。見てるか、池、山内。お前たちの

榊田は俺が貰った。悔しかったら山内は明日までに退学しといてください。

「そっか。えへへ。」

てかホントどうしたんだろう、こいつ。こんなキャラじゃないよね。いや、原作でも船の時に綾小路に抱きついたことはあったけど、あれは龍園との密会がバレないようにするためのだろ？今はなんでこんななんだ？

数十秒くらいしたところで、流石に恥ずかしくなってきたので解放してもらった。

「えつと…何の話だったけ？」

「堀北を退学させる方法について」

こいつ、なんでそんなに何事もなかったかのように対応できるんだ？やはりビッチか？

「ああ。そうだったそうだった。肝心の退学方法は…自主退学させることだな」

我ながら最低の策を思いついたと思う。だが、堀北を潰せば榊田を通してDクラス全体が手に入る可能性がある。

榊田の好感度稼ぎ以外に堀北退学には価値がある。

ん？まず好感度稼ぐ目的で気軽に人を退学させるなつて？

「どうやって？あいつが自分から退学なんてすると思えないんだけど」

「まあ、いきなり全部話してもしょうがない。とりあえず、堀北退学に必要な条件が2つある。」

「何それ？」

「堀北にだけ堀田がDクラスにとつての敵である、と認識させることと、実際にDクラスが堀田のせいで負けることだ。」

「2つ目はともかく、1つ目は難しそうな条件だね。堀北にだけつてのが」

「2つ目を難しくないとか言うつもりか？Dクラスには養殖天才の綾小路様がいらつしやるんだぞ。」

「それに関してはまず実際にDクラスが負けたところで堀北と2人つきりになって堀北を退学させるって宣言すればいいと思う。Dクラスを追い込むタイミングは俺が指示するから安心しろ」

「なるほどね。上手く退学に出来るんだよね？」

上目遣いで聞いてくる。あざとかかわいい。内容は酷いけど。

てかこいつ、やつぱナチュラルあざとい成分もあるよな？

「そこは任せとけ。ただ、退学させるまでの期間だけど、半年近く掛かると思う」

堀北を退学させるために俺はあの特別試験を利用するつもりだ。あの特別試験があるのは大体半年後くらいのはず。それまでに大量のポイントを集めとかないとな。

「そんなに掛かるの?」

「人1人退学させようってんだぞ。しかもコミユ力がゴミなだけで他のスペックは高い生徒を。それくらいの間は必要に決まってるんだろ。まあでも、逆に言えば半年以上かかることはないと思ってるいいぞ」

「そ、出来るだけ早くしてね」

それって特別試験の日程早めろってことやぞ。無茶言うな。まあ、知らないからしょうがないんだけども。

櫛田 side

あれからアイツの部屋で少し談笑した後、私は自分の部屋に戻って布団にくるまっていた。まさか私がこんなことやるなんて思ってもみなかった。

「なんであんな恥ずかしいことしちゃったんだろ……」

そう呟いて私はさっきアイツを抱きしめたことを思い出していた。

あの時の私はテンションがおかしかった。ついにあの憎き堀北を退学に出来る事知って、ついテンションが上がってしまったのだ。

「何が『もう一回抱きしめてあげよつか?』『暖かい?』『よ』」

自分のさっきの言動を思い出して恥ずかしくなる。十数分前の自分を殴りたい。てか、アイツも断れよ。いや：私からのハグなんて断れる筈もないか。

アイツは頭が良くて凄く冷静に見えるけど、実はむつつりだ。出来るだけ意識しないようにしているんだろうけど、たまにチラツと見てくる。まあ、池君や山内君みたいに遠慮せずにガン見してくる訳じゃないのでまだ許せるけど。

あいつらはマジでキモい。女子の気持ちを考えてことはないんだろうか？よくあれで彼女が欲しいとかいえたものだ。

まあ、あんな奴らはどうでもいい。

今は服部君の方……。ていうか服部君、結構ガツチリしてたな。スポーツできないインテリかと思ってた。部屋見た時に、ダンベルとかサンドバッグとか見えたし結構鍛えてるんだろうな。

今度頼んだら腹筋とか触らせてくれるかな？

後、なんか凄く良い匂いもした。石鹸みたいな香り。香水でも付けてるんだろうか。ポイントもあるだろうし、結構良質な生活してるんだろうな。カーペットとか、ベッドとかなんか高そうなやつだったもん。そういえば、部屋全体もなんかいい香りがしたな。今度理由付けて遊びに行こ。

ぶっっちゃけ、一回目に抱きしめた後、ハイテンションは半分くらい収まった。2回目に抱きしめたのはもう一回あのガツチリした身体を触って、あの匂いを堪能したかったってのもちよつとある。

……………いや、これじゃ私に変態みたいじゃん!!

違う! 違う!

私は別に筋肉フェチでも匂いフェチでもない!

私が2回目に抱きしめたのも全部ハイテンションのせいだ。そうだ、そういうことにしよう。

「はあ……」

なんか疲れた。これは恋なんだろうか。いや、それはない。断じてそれはない。絶対にそれはない。天地がひっくり返ってもそれはない。

というか、そもそも私はこの学校の3年間では誰とも付き合う気はない。誰かと付き合えばそれだけで周りの男子からの人気が落ちるから。

「でも……」

この先、この学校を卒業して大学生になって、大人になってもそれを貫くのか? いや、それもないな。独身なんて人生の負け組に落ちるつもりはない。

その時の相手は誰がいいんだろうか。

その場で見つけるってのも私なら可能だろうが、せっかくなら人生で会った中で1番良い男がいい。

そう考えて真つ先に思い付くのはやっぱり服部君だ。

私の弱点に気づきスパイ契約を結んだことや、契約を結ぶ際に私の過去を具体的に知らなかったのにあそこまで事を運んだ手腕。

今回の中間テストで50万ポイントを稼いだ件もそうだが、あの頭のキレは私の今までの人生で知る中で服部君以外ないだろう。

…変人の高円寺君は分らないけど。でも、あいつはそもそも前提として変人すぎるから無しだ。私の手に負えない。

やっぱり服部君が1番いいかな。1番大事な、私の裏の顔を知っても否定しないのも好ポイントだ。

なら今の内に墮としとくのもありかも♪

そうだ。今回私が服部君に抱きついたのも全部、服部君を墮とすための作戦だ。うん、さすが私♪

………言い訳とかじゃないから。

須藤暴力事件編

王に詐欺

6月下旬の平日の放課後。場所は特別棟

俺が今、息を潜めていた。

石崎と残りの2人（名前忘れた）が須藤のことを煽りまくった後、石崎が一度須藤を殴った。

そこから現在、須藤から石崎たち3人に一方的な暴力が行われていた。

そう原作第二巻のメイン。須藤事件だ。いえーい。ガツポガツポ稼ぐぞ。

最初は超小型カメラを仕掛けてようと思っていた。だが、今は念の為に離れた場所にその超小型カメラを仕掛けているものの、クソ暑い中我慢して俺自身が直接現場に赴いている。

理由はまた後で説明しよう。

須藤は石崎達を（スッキリしたのか？）殴り終え、この場から去っていく。一応、終わってしまったみたいだな。2、3分後に石崎達も去っていく。

奴らはまさかここに誰かいるとは思わなかったのだろう

「成功したな」

「ああ。とりあえず龍園さんに報告だ」

とか言っていた。馬鹿な奴らめ。

「はあ……」

俺は一息ついた。俺が直接来ることであるメリットが生まれるとはいえ、バレた時のリスクは高かったからな。

「だが……」

上手くいった。肝心の交渉はこれからとはいえ、とりあえず上手くはいった。

やっばい。楽しみすぎる。一体どれほどのポイントが手に入るんだ？ 数十万？ いや、数百万？

考えるのは数日後に行うであろう龍園との交渉のことだった。

朝、登校すると教室が少しざわついていた。

俺は席に着き既に来ていた隣の友人に話しかける。

「おはよ、姫野。」

「おはよう。なんでニヤついてるの？」

「ん？ニヤついてたか？切り替えたつもりだったんだが」

「気持ち悪いくらいニヤついてたわよ。何考えてたの？」

「クツクツク。なんでもねえよ」

「何その笑い方？」

姫野がめつちや白けた目で見てくる。やめてあげて。常にこの笑い方してる龍園が可哀想じゃん。

そのまま数分姫野と雑談していると、HRの時間になり、星乃宮先生が教室に入ってきた。

「皆、おはよう。あと、ごめんね。少しトラブルがあつて、1年生全体のクラスポイントによるポイント支給が遅れているの。ただ、今回の中間テストの報酬はきちんと支給されているはずよ。」

「トラブルって何ですか。学校側の不備ならなんか詫び石、あ、間違えた。詫びポイントとかないんですか。」

Bクラスの誰かがそう聞く。だが…

「ごめんね。学校側の判断で、そういうのは無理なの」

「ちえー」

ということらしい。まあ、悪いのは生徒側だしな。

「あ。忘れてたけど今月のクラスポイントを発表するよー」

A1004

B773

C492

D89

まあ、Bクラス以外は原作とほぼ変わらないかな。まあ、多少は変わったっぽいけど。それより今は須藤事件についての方が大事だな。

というか、須藤事件について説明するのは今日じゃないんだ。説明されてないせいで、今はまだ何も知らない生徒でなければならない。説明されてないせい

ということ、整合性を取るためにも今日は特にCクラスやDクラスに接触することなく1日を終える。……つもりだったんだが、昼休みに平田が訪ねてきた。

中間テストの時の契約で、50万プライベートポイントに足りなかった分の約20万プライベートポイントと、実際に須藤の点数を上げる為に使った10万プライベートポイントを渡された。後者は後1ヶ月の猶予があったんだが、ポイントは揃っていたらし

く、その分も一緒に返してくれた。

翌朝のホームルーム。

「今日は皆に報告があるの。学校でちよつとしたトラブルが起きたの。先週の放課後、特別棟でDクラスとCクラスが暴力事件を起こしたらしいわ。ポイントはもうすぐ支給されるから皆は大人しくしているように。それとその事件の目撃者がいたら名乗り出るようにね」

いつもより少しだけだが、真剣な表情の星乃宮先生から伝えられた正史イベント。

今回は事件を目撃していても、簡単に嘘を付くことができる。正確には嘘をついている、と、黒幕側は言い張ることができる。本当に欲しいのはその事件に善悪がはっきりする明確な証拠だろう。当然だが、そんな証拠を持っている都合のいい人間など存在しない。

そう、俺を除いて（ニチャア）

「きんも」

「グフツ！」

隣の友人からの容赦ない言葉に俺のメンタルに大ダメージが入った。

ホームルームが終わって、姫野に頼み事をしようとする。

「姫野。一之瀬がこの事件に首を突っ込む気かもしれない。でき、姫野に頼みがあるんだけど」

「……何」

あれ？なんか姫野が不機嫌な気がする。俺、なんかしたつけ？いや、俺が全く関係ない可能性の方が高いか。とりあえず、スルーで。

「一之瀬と一緒にいて、一之瀬がなんかする時にプライベートポイントを使うのだけは止めて欲しい。まあ、つまり一之瀬の監視と監督を頼みたい」

「あんたは？」

「ん？」

俺は？どう言う意味だ？

「あんたはその間一緒にいるの？」

「ああ、そういうこと。いや、俺は別で動くことがある。だから姫野に頼もうとしたんだけど」

「いや、やりたくない」

「えっ」

マジか。思ったより機嫌が悪いみたいだぞ。誰のせいかわらんけどふざけんよ。こつちに二次被害起きたじゃねえか。

「神崎にでも頼めばいいでしょ。」

「んー。まあ、そうか？」

「そうでしょ。なんであんたがいる訳でもないのに一之瀬と一緒に居ないといけないの」

「あれ？もしかして一之瀬のこと嫌いなん？」

まあ、姫野が一之瀬のこと嫌いかはともかく、苦手つてのは解釈一致するか。

「……別にそういうわけじゃない。ただ、服部が一之瀬の為に私を使おうとしたことが気に入らなかつただけ」

「……………」

どういふことだつてばよ。一之瀬の為に？

むしろBクラス全体のプライベートポイントを減らしたくないつていう、俺の為なんだが。

まあ、もちろん俺の為なら動いてくれるつて訳じゃないんだが。無理に頼んで関係を

壊したくないし、今回は姫野が提案してくれたみたいだに神崎を頼るか。

須藤事件が表面化した放課後。

龍園と交渉するのは、今日の深夜だ。それまでに全ての準備を万全にせねば。

俺は数日前に買った、まだ使ってもない真新しい録音レコーダーがポケットにあるのを確認して、職員室を訪れる。

「すみません。星乃宮先生いらっしやいますかー?」

「服部君?何か用かな?もしかして……恋の相談とか?」

あ?何言ってるんだ、こいつ。

「それならあんたみたいだ三十路のババアの所には来ねえよ」

「は?」

普段からは考えられないような低いドスの効いた声を出す星乃宮先生。

ひい。やべえ。やつちまった。ブチ切れてやがる。クソツ最悪だ。今日は龍園の対策以外に無駄なリソースは割きたくなかったのに。

「ねえ?どういう意味かな?服部君から見たら先生は30歳過ぎたおばさんに見えるっ

てこと?。」

「じよ、冗談つすよ」

表面上は冷静に返したが、心の中では結構ビビってた。

「そつかく。よかつた。てつきり服部君の目が節穴になっちゃったのかと思つた〜」

一氣に雰囲気元に戻つた。良かつた良かつた。

だが、ここで止まつとけばいいものを、学習しない愚か者がいた。というか、さつきビビつたくせになぜまた調子に乗るのか。

「そうつすよね〜。先生はギリギリ肩書きだけは20代ですもんね〜。もう30代の足音がやってきていても、30代じゃない!おばさんじゃない!って虚勢を張れる体裁だけは整つてますもんね?。」

「服部君。ちよつと進路相談室で、密室で2人つきりでお話しよつか」

生徒に何する気なんだこの先生は。しかも、さつきよりも数段声が怖いんだけど。多分龍園よりも怖いよ。

「そろそろ本題に入りたいんですけど」

秘技・話題逸らして逃げることにした。

「私からしたらこれが本題といつてもいいんだけど」

しかし回り込まれてしまった!

「結構大事な話なんすよ。しかもクラスを左右するくらい重要な。先生の提案通り進路相談室に行きましよう」

連続・話題逸らし！＋誇張表現！

「そんなに大事な話なの？はあ…なら、なんでその前に冗談なんかいつて茶化したの…」
うるせい。あんたが先にアホなこと言ってくるからだろ。

そう思ったが、何も言わないことにした。

龍園 side

須藤との暴力事件が学年全体に伝えられたその日の夜12時。

俺はクソうぜえメールのせいで、こんな蒸し暑い中、寮の裏手に呼び出されていた。

『差出人：真実を知る者』

今回の事件のこととある取引がしたい。今夜12時に1人で寮の裏手に来い』

内容が内容だけに、そして差出人の名前から来ざるえなかった訳だ。

クソツ。あいつら…まさか誰か第三者に見られたのか？へましやがって。これはアルベルトを使ってお仕置が必要だな。

相手をバカにする意味も含めてあえて12時を2、3分過ぎた時間に行く。既に相手

は到着して、俺を待っていた。

相手の格好をよく見ると、暗いせいでわかりづらいが、服は制服で身長は172、3cmほどの標準体型？いや、少しだけガッチリした生徒に見える。鍛えてるのか？

「よく来たな、龍園。早速だが、この動画を見てもらおうか」

「なんで俺がそんなことしなくちゃならねえ」

「どうせ何か言ったら、『見ないとは言ってない』とか言うつもりだろ」

「クツクツク。よく分かってんじゃないやねえか」

挑発も通じず、か。しかも、俺の返しまで予測できていやがった。俺は少しだけこいつに対して警戒を上げることにした。

「そういえば、まだ名乗ってなかったな。1年Bクラスの服部だ」

「てめえの名前なんざ興味ねえよ」

そう言いながらも俺はこの服部という男について知っている情報を脳の片隅から引っ張り出していた。

服部。確か…Bクラスの参謀…だったか？

俺たちCクラスがBクラスに対して仲間割れを起こすように仕掛けた時も対応したのは一之瀬と…確か神崎とかいう雑魚だけだった。

その時点で服部という人間は口だけの雑魚だと判断していた。だが、もし本当に……いや、そうだと断定するのはまだ早いのか。クク。せいぜい俺を楽しませてくれよ。

流された動画には石崎達と須藤のやり取りがしつかり記録されたものだった。

チツ。やっぱりか。どうせ、黙っというてやるから、口止め料を寄越せつてとこだろ？ 「龍園、この動画のことを黙っていて欲しければ、この契約を結べ」

ほら見ろ。とは言っても、どうせ10万、20万ポイントくらいだろう。それくらいなら大した痛手にはならねえ。まあ、目撃者がいた、という事実にはイラつくがな。

『2015年 7月3日

1. 龍園翔はこの契約の締結後、24時間以内に服部晴秋に300万プライベートポイントを譲渡する

2. 服部晴秋は今回のD、Cクラス間のいざこざの一部始終が収められた動画を削除し、その動画を他人に一切公開しない

3. 服部晴秋はCクラス側を擁護する証人として審議の場に立つ

4. 服部晴秋はCクラスを勝訴にさせる

5. 内容2と内容3と内容4が満たされなかった場合、服部晴秋は龍園翔に350万ポイントを譲渡する

6. Cクラス側が訴えを取り下げる、罪を認める、Cクラス側が嘘を付いていると分かる証拠を他人に提出する、などのCクラスの勝訴が出来ない状況をCクラス側が作った場合、内容5は適用されない』

は？

なんだこの契約は

クク、おもしれえ！

普通、証拠を手に入れて黙認せずにこちら側に味方する、とか考えるか？ 頭ぶっ飛んでやる。

さつきはそうだと判断し切れなかったが、今ならそうだと断言できる。

こいつは間違いなくBクラスの参謀だ。

……となると、だ。もしかしたら、こいつがあの場合にいたのも偶然じゃねえかもしれないな。

Cクラスに裏切り者がいる可能性も視野に入れておく必要があるな。

「おい。黙ってないで契約を結ぶのか結ばないのか決めろ」

「俺のこと舐めてんのか、てめえ。たかだか裁判に勝つ為にこんな大金を払うつもりはねえ」

「なら、逆に金額が納得のものだったら契約を結ぶのか？」

「…契約3と4のことも詳しく話せ」

「……………ああ。まだ説明してなかったな。とりあえずこれを見てくれ」

そういつてこいつが見せてきた動画はさっきの動画のちょうど須藤が殴り始める所からだった。なるほどな。

「さっきの動画を編集したものだ。これでCクラス側は一方的に殴られた、と主張してやる」

俺が今回の事件を起こさせたのは、監視カメラがない所で学校側がどれだけ介入してくるのかわかるためだ。

つまり、こうやって偽の証拠を作ると本来の目的を果たせないことになる。

だが、こいつを使って喧嘩両成敗にならず、Dクラスに一方的にダメージを与えられるのなら、それはそれで悪くない。

編集が見破られるかどうかが多少心配だが、編集といっても一部切り取っただけ。始まりも不自然な形にはなっていない。おそらく大丈夫だろう。

だが……

「なるほどな。それでも俺がお前に払う金額には納得してねえぞ」

そう。値段の方が問題だ。なんでこんな額をふっかけてきやがった？この裁判に300万の価値なんかない筈だ。

いくら、あの動画を提出しても石崎たちが退学まで行くとは思えねえ。

それくらいこいつも分かってはいるはず。………となるとこいつの目的は恐らくだが、ドア・インザ・フェイスあたりか？ 最初に無理な要求をして断られた後、ハードルを下げた次の要求を通しやすくするっていう心理テクニク。

俺はこいつに対して更に警戒を上げることにした。

「まず、停学によるクラスポイントの削減は事件の規模や行動の悪質さ、停学日数や人数によって決まるってのは知ってるか？」

「ああ」

そこらへんは坂上からも確認が取れてある。ただ、それ以上のことは教えてくれなかったがな。

「なら、一つの事件による停学によって減らされるクラスポイントの最高値は分かるか？」

「あ？何が言いてえ」

そんなこと具体的なことをこの学校が教えてくれるわけではない。そんな分かりきったことを聞いて何がしたいのか。

「分からないんなら素直にそう言えよ」

「ああ？てめえ殺されたいのか？」

「怖えよ。冗談だ。それとさつき言った停学による減らされるクラスポイントの最大は

80〜90クラスポイントだ」

「くだらねえ嘘をつくんじゃねえよ」

「嘘じゃねえよ」

服部はニヤツと自信を持った笑みを浮かべる。とても演技には見えないが…………

「あと、裁判で勝訴できたら敗訴になったクラスから勝訴になったクラスに50以上のクラスポイントが譲渡される」

「おい。まだ続けるつもりか？」

さすがにイライラしてきた。まさか俺が知らない情報かつそれっぽい話だからって俺が納得すると思ってるのかよ

「……………やっぱり情報ソースを言わないとダメか？」

「当たり前だろ。他にそれを裏付けるものもセットで必要だな」

「はあ。マジか。あんまり人に、というよりお前に教えたくないんだよな」

「早くしろ」

「じゃあ、まず『ウミガメのスープ』って知ってる?」

「知らねえな。というかそんなことどうでもいい。さっさとめえの情報源について教えてろ」

「先にこつちの話をした方が分かりやすいんだよ。『ウミガメのスープ』ってのは出題者が出す謎のシチュエーションに対して回答者は「はい」か「いいえ」で答えられる質問をし、謎のシチュエーションの意味を答える、って感じだ。

俺はこれを学校に対して行つた」

「……そういうことか」

「そう。俺は学校側に対し、「はい」か「いいえ」で答えられる質問をし、その質問に嘘偽りなく答えてもらう権利を10万ポイントで買ったんだ」

クック。やはりこいつはおもしろいことを考えやがる。

「クッククック。Bクラスにいるのが惜しいな。なぜお前はCクラスにいねえ」

「そんなもん俺が知るかよ。てか、話戻すぞ。俺はその権利を使いさつき言った通りの情報を得た。停学の際に減らされるクラスポイントの上限が80〜90クラスポイントであること、勝訴を勝ち取ればそのクラスに敗訴になったクラスからクラスポイントが50以上譲渡されることを知つた。」

「お前は肝心なことを忘れてやがる。確かにお前が言った方法ならそれだけの情報を入力出来るかもな。だが、それを証明する方法がねえ。」

「分かりきったこと聞くんじゃないよ。その時の会話は録音済みだ」

そう言つて服部は俺に録音レコーダーを渡す。俺は再生ボタンを押した。

『では、今から質問を始めます』

「はいはい」

「じゃあ、まず一つ目は……さつき教えてくれた停学によつて減らされるクラスポイントとは停学理由となる事件の規模、行動の悪質さ、停学日数と人数によつて決まるつて言いましたよね。その停学によつて減らされるクラスポイントの上限は70c1以上90c1以下の範囲にありますか？」

「はい」

「ありがとうございます。……停学によつて減らされるクラスポイントの上限は70c1以上80c1未満の範囲にありますか？」

「いいえ」

「ありがとうございます」

「ねえー。もしかしてそうやって絞り込んでいく気ー？」

「少し黙つてもらつていいか？」

「ええー。別に雑談くらいいいじゃん。」

「……………次の質問です。クラス間の揉め事で裁判が起こつた時、勝訴した側は敗訴した側からクラスポイントを譲渡される、ということはありませんか?」

「はい。やるねー、服部君。先生との雑談をスルーすることもその可能性に気づくことも。特に私との雑談を避けるなんて現役男子高校生なら考えられないよ?」

「これで最後の質問です。その勝訴した時に敗訴した側から譲渡されるクラスポイントは50c1以上ですか?」

「はい。本当スルー性能高いねー」

「まあ、これくらいでいいか。じゃあ星乃宮先生、ありがとうございました」

「ばいばーい!」

なんだこの教師は。うるせえ女だな。

「これでいいだろ?なら次だ。俺がDクラス側に付けば石崎たちは停学になり少なくともクラスポイントがー80c1以上される。更にCクラスは敗訴となりクラスポイントが最低でも50c1がDクラスに譲渡される。合計130c1の損失だ。」

服部の説明はまだ続く。

「逆にCクラス側に付けば石崎は完全無罪。クラスポイントは減らない。そしてDクラスに対して勝訴となり、最低でも50c1以上増える。相対的に見て、俺がCクラスに

付くことに180c1分以上の価値がある。180c1×1000×40=72万pr

これの4ヶ月分が288万pr。4ヶ月つてのはお前らCクラスが払う気になれるギリギリのラインのつもりだ」

クク。まさかドア・インザ・フェイスを使うんじゃないやなくて、ガチで300万を狙いにくるとはな。おもしれえ。Bクラス、坂柳を喰らう前の前菜……いや、もしかしたらこいつがこの学校のメインディッシュなのかもしれない。

「180c1は最低基準な」と、この事件でCクラスが敗訴になれば、龍園の独裁政権に多少のヒビが入ることとかの理由で少しポイントを足して300万プライベートポイント。契約を結ぶ気になったか？」

やつと終わったぜ。ここからは俺のターンだ。

「クク。お前は少し勘違いしてやがる。俺たちが払うポイントは50c1相当のプライベートポイントだけだ。もし、お前がDクラス側に付くなら、俺たちは訴えを取り下げればいいのさ」

「はあ？何言つてんだ。それならDクラス側から訴え返させる。学校を巻き込んで悪質な嘘をつかれた、その嘘のせいでクラス内で肩身の狭い思いをして、精神に酷いダメージを受けたーってな」

「……………」

チツ。そう簡単にはいかねえか。

「なら次だ。石崎たちと停学によるクラスポイントの削減が上限に達するとは限らねえ」

「うーん。それはまあ証拠はないんだけどさ。あんなクソみたいな嘘だぞ。もし、俺がDクラス側に立ったとしても今回はたまたま運が良かっただけで何度も同じ行為を繰り返されたらたまたまもんじやない。ぶっちゃけ見せしめとして退学もあり得るレベル。それでもほんとに石崎たちの停学が上限いかないと思う？」

「……………」
クク。確かにな。だが、まだ終わりじゃねえ。

「ならこつちが訴えを取り下げ、Dクラスに訴え返された時。石崎たちは停学でクラスポイントが80も減らされると思うか？反省したっていう形は取れてるぞ」

「……………」
ついに服部が黙る。さあ、どうでる？

「……………俺はそうは思わない。反省したんならしっかり刑罰を受けてこそ償いになる、と思う。むしろ退学にこそならないが最大限クラスポイントは引かれると思う。どっちにしろ机上の空論でしかない以上、これ以上は水掛け論にしかないだろ」

確かに机上の空論だ。それに俺と服部、どちらの意見も十分あり得る話で、どちらに

転ぶかなんて裁く人間次第だろうな。

「クク。俺にはただの言い逃れにしか聞こえねえがな。だがな、大事なのは停学でどれだけポイントが減らされるか、だけじゃねえ。お前は俺と組まなかった時、Dクラスと組む前提で話しているが、Dクラスと組んで一体どれだけのポイントが手に入るんだ？
なあ？あいつらと組んで300万も手に入るのか？

そんなわけないよなあ。Dクラスと組んだところで100万も手に入らねえだろ。ここは少しでも妥協しておれと組むべきじゃないのか？

クク。俺と組むなら100万までなら払ってやつてもいいぜ」

「論点すり替えんなよ。俺と組むことはお前にとつて300万の価値があるんだ」

なるほどな。だが、それならこっちも同じように返すだけだ。

「クク。論点すり替えてんのはそつちだろ。てめえにとつて俺と組むことが100万の価値があるんだよ」

互いが互いの視点から見てのこの取引の価値を喋る。そしてどっちも譲らねえ。これこそ水掛け論にしかならねえな。少しアクションを起こすか。

「仕方ねえ。残念だが、お前が100万で手を打たねえ以上この取引は終わりだな。じゃあな」

さあ、どうする？もう、100万で手を打つしかなかったぞ。まあ、150万くら

いならこつちも妥協してやってもいいがな。クク。ドア・インザ・フェイス返しだ。

「はあ。仕方ないな」

クツクツク。やっと手を組む気になったか。俺の勝ちだ……………

「櫛田まだ起きてるかな？」

は？

俺が振り返ると、服部はDクラスの櫛田に対して電話を掛けようとしていた。いや、どうせハツタリだろ？

だが…………俺の予想に反し、服部は躊躇なくコールボタンを押した。

「おい、服部！」

「なんだ？もしかして300万で取引する気になったのか？」

「そんなわけねえだろ。ただ、お前は質問する権利で40万くらい使ったよな？元が取れるのか気になってな」

そう。こいつは俺との取引を有利にする為に多大なポイントを使ってまで情報を手に入れた。少なくとも40万以上は稼がないと損することになる。

「ああ。それなら大丈夫。毎月支払ってもらうから。一気に大金が手に入る訳じゃないけど、卒業までを考えたら最終的に300万超えるし、問題無いだろ」

チツ！この野郎、毎月少しずつ払わせるってやり方に気づいてやがったのか。

それにこいつ……ガチの目だ。ガチでもうDクラスと組むつもりで切り替えてやがる。

正直まずい。今回の裁判で負けてクラス内で反発が起ころのもうざいし、これでDクラスがつけ上がるのも気に食わねえ。ただ、こいつにも大量のポイントを払いたくねえ。

チツ。仕方ねえ。

幸い、榎田はもう寝たのかまだコールには出ねえ。だが、時間の問題だ。何度もかければ起きるだろうし、もし起きなかつたら直接部屋に行くかもしれないねえ。

「服部。非常に気に食わねえが条件を変えてやる。をそれでお前が飲めるなら契約を結んでやるよ。」

「条件を変える?」

「ああ、150万……いや200万で組んでやる」

「200万?」

「ああ。さっきのお前の計算。お前が組むことによつて俺たちが手に入れる利益の4ヶ月ぶんだっただろ?それを3ヶ月分にして、端数を揃えた分だ」

「端数揃えるんだつたら……いや、いや、いいや。それで組むことにする。じゃあ、契約書書き換えるからそれにサインして」

「ああ」

だが、運が良いのか悪いのか。服部が新たな契約書を書いたタイミングで櫛田が電話に出た。

「おい…」

「分かってる。なんとか誤魔化せば良いんだろ」

俺が契約書にサインしている間、服部が櫛田と電話をしていた。

「もしもし」

「あー、いや。別に何か用があつたつて訳じゃないんだ。ただ声がちよつと聞きたくなっただけ」

「いや、うん。もう声が聞けたし満足かな。じゃあな」

本当にそれで良いのか？なんか誤解が生まれそうな言い訳だったぞ。

「どうした？」

「…なんでもねえよ。それより、書き終わったぞ。」

「オツケー。じゃあ、コンビニでコピーしてくる」

こうして、俺は服部との取引を終えた。

服部 side

龍園に言い負かされそうになったり、300万での交渉は失敗したものの、200万という大金で俺は龍園と取引できた。

ハハ…200万…ハハハ…

ハハハハ、龍園を騙してやったぞ…!

俺は自然と今日の星乃宮先生との進路相談室でのやり取りを思い出していた。

「で？服部君。クラスを左右するほどの重大な話って何かな？」

「そこまでの話じゃないですよ」

「じゃあ、クラスが有利になるかもしれない相談、とか？例えば今回の須藤君と石崎君たちの事件のこととか」

この人鋭すぎるだろ。

「そ、そんな感じっすね。じゃあ、まず答えられる範囲で聞きたいんですけど。停学ってどれくらいクラスポイントが減らされますか？」

「それは停学の理由となった事件の規模や悪質さ、停学人数や日数で決まるかな」

「なるほど。ありがとうございます。具体的な数字つてのは……」

「ごめんね。それは無理かな」

「オツケーです。じゃあ、次は、今回みたい裁判が起こった時、勝訴したら、敗訴した側からクラスポイントが譲渡される、みたいなことありますか？」

「うーん。それも答えられないかな」

思ったより厳しいな。無料の質問はやめて次のステップに移るか。

「先生。なら、俺がする質問に『はい』か『いいえ』で嘘偽りなく答えてもらおう権利、つて何ポイントで買えますか？」

「……やっぱり君はおもしろいことを考えるね。今までこの学校でそんなこと考える人いなかったよ」

絶対嘘だろ。

「お世辞はいいです。何ポイントで買えるんですか？」

「お世辞じゃなんだけどなく。そうだなー。前例がないのよねー。何ポイントがいい？」

そう俺に聞いてくる。えっ。マジで考えた人いなかったの？歴代最高の生徒会長と名高い学のアニキ辺りは使ってたかと思つた。あー、でもあれか。優秀すぎるとそん

なものの使う必要がないのか。

そう結論付け、星乃宮先生の質問に答えることにした。

「そうですね…。一回の質問につき10万ポイント辺りでどうでしょうか？」

テストの1点分や携帯のSIMロック解除が10万くらいなので妥当じゃないだろうか。

「うん。10万ポイントでいいよ。何が聞きたいの？」

そんな簡単に決めていいのか。でも、10万ポイントで1つの質問ってことのできるなら、この部分は嘘つかなくてもいいかもな。

「別に、その権利をかうつもりはないです」

「えっ?じゃあ、なんで聞いたの?」

「一定のポイントでその権利が買えるってことが分かれば良かっただけですから」

悪いな、星乃宮先生。本当は質問の権利に何ポイントかかるか聞いて額を聞いて尻込んだ、つてことにするつもりだったんだけど。まさか、前例がないなんてな。

「すみませんね。あの、次のやつはよっぽど高額じゃなければ買うんで」

「うん?何かな?」

「5分間、星乃宮先生の発言内容を決める権利を俺にください」

「!?」

空気が凍りついた。なんでだ？

「服部君……まさか……私にとんでもなく卑猥なことを言わせるつもり?!」
「そんな訳ねえだろ」

ついタメで返してしまつたが、俺は悪くないだろう。

「ち、違うの……?」

「違うわ。で?何ポイントで買えるんですか?」

「うーん。これまた前例がないんだよねー」

「マジかよ高育生。もつと色んなこと試せよ」

「あはは。ほんと耳が痛いよ」

ああ、この人……出身だもんな。

「ポイントの方は30万ポイント辺りでどうでしょうか?」

「うーん。……まあ、いいかなあ。よし、30万ポイントでいいよ!」

それを聞いて先生の気が変わる前にスマホを操作し、すぐに30万ポイントを送る。

「30万ポイント支払いましたよ」

「ん。オツケー。支払い確認したよー」

「とりあえず、普通に喋って構いませんよ。俺が注文するのは3つだけ。

『俺が人差し指を立てたら「はい」と言う』

『俺が人差し指と中指を立てたら「いいえ」と言う』

『俺が質問する権利を買ったと仮定して会話を成り立たせる』

これだけです」

3つ目は少し曖昧だが、星乃宮先生がちよつと鼻肩してくれろと願おう。

確認が終わったところで、録音レコーダーを取り出し、録音を開始させる。

「では、今から質問を始めます」

ハハハ。やったぜ。ざまあみろ、龍園。

それにしても龍園のやつマジ怖かったな。最初は強い口調で喋ってたけど、途中から素で喋ってたもん。

そういうえば、コンビニに行く途中で櫛田から電話がかかってきたな。疲れたのと、あの電話の言い訳をするのがめんどくさかったので無視させてもらったけど。

弁解は明日するし、問題ねえだろ。

櫛田 side

ほわああああああああああああああああ

私は深夜に服部君からの電話で起こされ、話をする前は少し憂鬱になっていた。でも服部君からの電話が終わった後、かつてないくらい取り乱していた。

確かに言ったよね？

『私の声が聞きたかった』って。言ったよね？！

えへへ。やばい。顔がにやける。

「夢……じゃないよね？」

私は自分の頬をつねる、という古典的なことをやって夢じゃないことを確かめた。

「……痛い。夢じゃないんだ……」

嬉しいのは嬉しい。嬉しすぎる。でも……どうしよう？

厳密には告白された訳ではない。声が聞きたかった、と言われただけ。うくん。もしかして……服部君、恋愛慣れしてる？

告白した訳じゃないから脈なしでもダメメジが少ないし、相手に自分を意識させることもできる。元々相手が好意を持ってくれてたなら告白される、まであるかもしれない。

どうしよう。とりあえず………ハッ！

待って！待って！！

私は服部君のこと好きでもなんでもないんだってば！

私はこの学校で八方美人を貫く。

そのために彼はいたらダメだ！

と、とりあえず電話を掛けよう。別に私が話したい訳じゃない。脈なしじゃないですよ、つて相手をキープするためだ。うん。そうだ。あんなこと言われたせいでつられて私の方も服部君の声が聞きたくなつたとかはありえない。

「よ、よしー」

震える手を沈めようとしながら、服部君に電話をかける。が……2コールほどで通話を拒否された。

は？は？！

ちよつとどうということ？！

なんで電話したら拒否されんの？

寝たのなら、通話拒否じゃなくて何十コールもした後に「今、お掛けになったー」つてなるはず。

まさか、私が電話をしてワザと通話拒否をして反応を楽しんでる？弄ばれた？

どこかで私のことを嘲笑ってる、とか？

バーカ！バーカ！もう、服部君のことなんかもう知らない！
もし電話かけてきても絶対無視してやるんだから！
もう、寝よつーと。

その後ベットの近くに置いたスマホを寝落ちするまでずっと見ていたけど、スマホは震えることも音を鳴らすこともなかった。

翌朝、私の枕が湿っているような気がしたけどきつと気のせいだろう。

運命の会合

須藤の暴力事件の審議まであと残り1日となった。

オレ達は審議までの猶予の時間でBクラスの一之瀬と神崎の協力でCクラスの情報を集めたり、目撃者である佐倉に証言することを頼むことに成功した

だが、このままいつても須藤が無実になることはない。相手から先に暴力を振られたとしても須藤も暴力を使ったという事実は消えないからだ。

この事件、訴えを取り下げさせる以外にオレ達が勝つ道はない。残念ながら、堀北達はまだそのことに気が付いてないみたいだが……

なんとか堀北が自力で気付くように仕向けて、堀北の成長に繋がりたいものだ。

それにしても審議まで残り1日となった今何をするんだろうか？

オレはDクラスの末端（笑）だから、何をするのか全く知らない。また地道に情報集めか？

もしそうなら、多少強引にでも堀北に特別棟に行かせるか？

そんな事を考えていると櫛田がオレに話しかけてきた。

「綾小路君。実は君と友達になりたいって人がいるんだけど……会ってくれるかな？」

榎田が上目遣いでそう聞いてくる。そんな風に頼まれたら、どんな頼みだろうと火の中、水の中、榎田の胸の中、喜んで飛び込んでみせる。

いや、待て。それより今、榎田はなんて：

「オ、オレと友達に……？」

「うん。親友になりたいって！良かったね、綾小路君！」

オレに友達か。今行こうっ！　すぐ行こうっ！

「やめなさい、憐れよ。綾小路君。絶対に罠に決まっているでしょう」

「待て、堀北。それは酷すぎる。純粋にオレと友達になりたいって奴かもしれないだろう？」

「常識的に考えてあり得ないわ。あなたのような人と友達になりたいなんて」

「そ、そんなことないよ?! だってほら、現にさ。私たちは友達だよね？ 綾小路君。それに、大丈夫だよ！ 優しい人だから。綾小路君でもきつとすぐに仲良くなれるって！」

辛辣な堀北に対し、天使な榎田の励ましが心に染みる。

「ならその人の名前くらい教えてくれてもいいんじゃないかしら？ もしあなたがグルじゃないなら言えるはずでしょう？」

堀北は完全に罠だと決めつけてくる。酷すぎる。

「えつと……なんか綾小路君と同じ中学校の人らしくて、びつくりさせたいから言うなっ

「よう、綾小路。初めまして、か？これから俺達ベストフレンド！よろしくなく!!」

アホらしい。素直にそう思う綾小路。

中間テストの一件など、現時点で分かっている少ない情報でも服部がこんな風に友人を作る人間ではないと推測がつく。

ホワイトルームの関係者がどうかはまだ分からないが、少なくとも罠であることが確定した。堀北の忠告が正しかったのはなんかこう、癪だな。

「そうか。そんなことよりも何が目的なんだ？」

本来ならば、オレはここで何も分からないフリをし、とぼけていただろう。

しかし、榎田の件も合わせ、多少なりとも自分の実力がバレている可能性が高いと踏んだ。

「随分と急いているな。らしくない。さては、榎田から同中だつて教えられたな？」

ホワイトルームの最高傑作さんよ」

ホワイトルーム。その単語を聞き、綾小路は最大限の殺気をあらわにする。最悪の場

合は……

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて!!」

「はあ。」

「い、いや、冗談。冗談だから。ちよつと演じてみただけで俺はホワイトルームとは一切

関係ない一般ピーポーだから。な？だから許して」

恐ろしく早い土下座。オレじやなきや見逃しちゃうな。

「一般人？そんなことをオレが信じるとでも？」

「いやマジなんすよ。あの俺親が金持ちで。だから、昔マジックミラー越しに綾小路を見たことがあって。だから別にホワイトルーム生でもなんでもないわけです」

低姿勢でそう答える服部を見て、綾小路は自身の観察眼から嘘の可能性は限りなく低いと考えたくなるが、あまりに情けなさすぎてブラフの可能性を切り捨てられなかった。

「そうか。暫定的にその話を信じるとしよう。で？結局、何が目的だ？」

殺気を収め、カラオケボックスのソファに座りながらそう聞く。

「ふうー。楽になった。……目的ね。端的に言えば、俺と綾小路の個人的な同盟ってところかな？」

「同盟か。だが悪いな。オレは平穩に暮らしたいんだ」

言外にクラス争いに関わらない、味方にはならないが敵にもならない、と言っていることを察した服部。だが、彼は原作知識を持っている。故にそれだけは足りないことも理解している。

「まあ待つてくれよ。綾小路。お前の考えてることは分かっている。その上での話だか

らさ。せめて同盟話の内容くらい聞いてくれ。」

「……………それもそうだな」

ホワイトルームの話が出てきて少し視野狭窄になっていたのかもしれない。さつきはああ言ったが、見たところほぼ確定で一般人。少なくとも武力という点においては間違いなく取るに足らない存在だ。

「まあ、同盟つてより不戦条約つて感じが正しいかもしれない。つつても具体的な取り決めは考えてないし、するつもりもない。お互いの邪魔をしない、場合によっては協力する。協力すれば貸し一つと出来る、とか。ガチガチに縛るつもりはない」

胡散臭いな。「邪魔をしない？場合によっては協力？」普通ならクラス争いのことだ。だが、余りにも言い方に隙がありすぎる。おそらくクラス争い以外の何か具体的な目的がある。それをオレに邪魔されたら困るってところか。

少し鎌をかけるか。更にこの場でこちらが有利だと教えてやる。

「お互いの邪魔をしない、か。お前がされたくない邪魔つてのは榊田のことか？」

「……………はあ？」

ダウト。榊田の名前を出した瞬間、一瞬だったが顔が強張った。更にこの長い間。その間の思案顔。まるで言っている意味が分からず困惑した、という風を装ったんだろう。しかし「はあ？」という声が少しだがうわずっていた。

本当は何故オレが櫛田という答えに辿り着けたのかを考えたつてところか。

「櫛田？なんでここで櫛田が出てくるんだ？」

「最初は鎌かけだったか、お前の反応で確信した。無意味に取り繕うのはやめろ」

「はあ……。なんで分かったんだ？俺と櫛田の関係性。お前のことだ。鎌をかけたつて言つてもギャンブルに出た訳じゃないんだろ？」

確信はなくともある程度疑惑を覚えていた、ということを察したことをオレは察した。

そして相手もおそらく、ある程度察していたことを察したことを察したことを察しただろう。

つまりオレは s…

全て話しているものか。少しだけ考える。まあ、これくらいなら全部話してもいいか。服部と櫛田の関係性が確定した今、服部と組む方が色々楽になる可能性がある。

「中間テスト。前日に櫛田が過去問を渡すと同時に、茶柱先生に成績優秀者へ褒賞を出すよう頼んだ。喜んで茶柱先生はそれを承知。成績下位の生徒からは自分達が貰えないから、出来るやつが頑張ると自分が赤点になるかもしれない、などの様々な理由で

ブーイングが起こったが、櫛田が『過去問があるから頑張れば皆貰える』と言って無理矢理雰囲気を纏めた」

一息付いて更に言葉が続ける。

「おかしいと思わないか？」

「……………」

「お前も櫛田の裏の顔は知っているだろう？」

オレも一度だけだが、あいつの裏の顔を見たことがある」

「……………チツなるほど」

「分かったみたいだな」

「ブーイングが起こってまで、報償を欲するのは櫛田のキャラクター性に合っていない……」
「そういうことだ。周りからの評価を気にし、取り繕う櫛田がそんな事をする筈がない。」

「そういうことだ。その時は普通に疑問に思った程度だが、結果発表の時にお前が来た。」

「普通には分からなくても、一度疑問を持った綾小路にはあの流れが茶番に見えるたつて訳か」

「まあ、そんなところだな」

「クソツ。目先の利益だけ追っちまったな。……他に気付いてそんな人いるのか？」
「おそらく誰も気付いてない。強いて言うなら高円寺くらいだ。あいつは未知数すぎる」

「ああ、うん。まあ、高円寺ならいいか」

「まあ、あまり落ち込む必要は無いと思うぞ。榊田のおかげでポイントが手に入り、そしてたまたま榊田のおかげで須藤が退学を免れた。過去問の事も合わせ、結果だけ見たら榊田はクラスメイトから更に大きく信頼される様になった。スパイとして使われる人間のムーブとしては満点とはいかなくても及第点を大きく超えている」

「それで？ 結局、同盟を組んでくれるのか？」

「具体的な目的を教えてくれるなら組んでやってもいい」

「具体的な目的？」

「ハツタリも大事だが、ここまできて惚けるのは悪手だ。邪魔をしない。場合によっては協力。一見臨機応変に対応出来るような内容に聞こえるが、それならそもそもオレにホワイトルームの事を知っている事を教えるリスクを取る必要はない。何か確信的な行為にオレが邪魔になる、もしくはオレの協力が必要じゃないとこんな行動には踏み切

れない」

一瞬考え込む様な仕草をした後、服部が話し始めた。

「そうだな。お前が言う通りだ。具体的な目的は………堀北の退学だ」

服部と堀北の間に何かあったと考えるよりは、堀田絡みと考えた方が自然か。

「なるほど。それが堀田を使う代償ってところか」

「少し違うけど、まあそんなところ」

「堀北退学の具体的な目処は立っているのか？」

「一応な。だから、綾小路には邪魔をしないで欲しい、って訳」

「協力は保険か」

「ま、そんなところだ。それより他に話しときたいことがある」

まだあるのか。

「須藤事件。あれ明日にでもさっさと解決してくんない？」

明日にでも、か。明日は審議の日だ。本来なら明日に全てが決まる。だが服部の言い

方はまるでいつでも事件を解決できた、と言っている様だ。

「どういうことだ？」

服部がどれくらい分かっているのか確かめることにした。

「とぼけるなよ。お前が偽の監視カメラを使うって策に気付いてない訳ないだろ」

「買い被りだな」

「まあ、別に綾小路が気付いてようが気付いてなからうがどっちでもいい。それよりこれを見てくれ」

そう言つて服部は一枚の紙を取り出した。

「これは……Cクラスとの契約書か」

「そうだ。あの日俺はたまたま特別棟にいてな。完全に証拠バツチり録画したから、龍園を脅したのさ」

「龍園つてのがこの件の首謀者か？」

「ああ、Cクラスに独裁政治を敷く男だ」

「……………ポイントだけ貰つてトンスラしようど？」

「おうー」

うわあ……

「何で引くんだよ!?!お前だつて俺の立場なら同じことするだろ?!」

「時と場合によるな」

実際に生徒会に提出したり、これで訴えを取り下げさせるのもありだ。

「それにしても、もしかして全クラスにスパイを忍ばせてるのか?」

「は?……………あ」

?もしかして本当に偶然居合わせたのか?

「やべえ。龍園ならそれくらいすぐ気づくよな。こんなに早くスパイを示唆するのはま
ずくね?」

なんかブツブツ呟いている。本当に偶然なのか?

「終わったことは仕方ないか。切り替えよう。とりあえずCに勝たせたくないから、訴
えを取り下げさせてくれ。そのためのポイントは俺が出すから。ていうかもう買って
ある」

そう言つて服部はオレにカメラを渡した。

「後、この作戦を思いついたのは堀北つてことにしといてくれ」

「? 榎田じゃなくてか?」

「ああ、堀北だ」

こいつなりに何か考えがあるんだろう。聞き出す必要はないか。

「これで話したいことは全部終わりで。折角カラオケにいるんだし歌おうぜ、親友」

いつから親友になったんだ。

そう思いながらも、初めてのカラオケを楽しむことにした。

翌日の放課後。堀北と共にCクラスに訴えを取り下げさせることに成功した。

寮に向かうまでの間に龍園から電話が掛かってきた。

「もしもし」

『ククク、やってくれたなあ……服部』

「やってくれたってのは訴えを取り下げた件のことか？ 言っとくけど、あれ俺じゃないからな」

『嘘つけ。』

「嘘じゃねえよ。確か表向きは堀北つてやつが解決したつて一之瀬に聞いたぞ」

『クク、てめえ自身で、表向きは、つて言ってるじゃねえか。あの契約、結果を見てみれば随分とお前に都合がいいもんじゃねえか』

「知るか。とにかく今回お前がやられた相手は俺じゃない。堀北でもねえけど。見誤んじゃねえよ」

『フン、勝手に言ってる。とにかく、服部。お前は俺が直々に潰してやる。』

そう言って一方的に龍園は電話を切った。

んー。完全にロックオンされたなあ…

今の会話で俺は黒幕本人ではなく、黒幕を理解している人間、みたいに喋ったつもりだ。

俺でもなく、堀北でもない。見誤るな↓綾小路に辿り着け。ってことだ。

まあ、契約のせいで完全に俺だと思ってるみたいだが。

これが効力を発揮するのはX探しの時。その時まではこの会話を覚えおいてくれるといいんだけどな。

寮に着いて約10分後。とある2人が俺を訪ねて来た。勿論俺が招待したものだ。

「よく来た。一之瀬。それに神崎も」

「邪魔しまーす!」

「邪魔をする」

麦茶でいいか2人に聞き、承諾が返ってきたので、人数分のコップを出し、お茶を入れる。

「早速だが、本題に入ろうと思う」

「今回呼んだのにはやはり龍園に関してか？」

「うーん、半分正解ってところかな」

俺が2人を呼んだのは須藤事件の振り返りのためだ。実質龍園の事と言って差し支えないだろう。

「まず2人は今回起きた須藤と石崎たちの事件の顛末を知ってるか？」

「んー。一応堀北さんから偽の監視カメラを使って訴えを取り下げさせたって聞いているけど……」

言い方的に事後報告されたのか。原作と違って堀北が石崎たちを説き伏せた、と見るべきだろうな。

「というか服部はあの事件を気にしていたのか？不干渉を貫いている様に見えるが」

「実際には、かなりあの事件に関わっていたぞ。偽の監視カメラの策を考えたのは俺だし」

「ええー!?!」

「それは本当か、服部？」

いや、嘘です。思い付いたのは清隆です。

「ガチ。だからこそ、表面上は不干渉を貫いたってわけ」

「なるほど……流石だな」

「まあ、俺が何をしたかはどうでもいいよ。今回呼んだ理由に比べたら大して重要なことじゃないから」

「そうか……俺たちからしたらそれが最重要と言ってもいい気がするんだが……」

「気にしたらダメだよ、神崎君。これが服部君なんだから」

は？なんか原作知識を使っただけでヤバイやつ扱いされてない？

よう実はまだまだこれからなんだけど、こいつら大丈夫か？

「ゴッホーン！本題に入るぞ。お前らを呼んだ理由は『考えようの会』を開くためだ！」

「『考えようの会？』」

「ああ。…そうだな。口で説明するよりいきなりやらせた方が分かりやすい気がする。

てことで、まずは俺がテーマを出そう！」

「始めのテーマは『もし俺たちのクラスで暴力事件が起こっていたらどうするか？』だ。

考えてくれ。勿論、偽の監視カメラを使うって方法はなし。難しかったら具合的な方法

じゃなくて方針だけでもいいよ」

「なるほどねえ。言いたいことは分かったよ！でもさ、偽の監視カメラ以上の最適解つ

てあるの？」

「『考えようの会』だぞ？それを今から考えるんだ。」

「確かにそうだね！むむ」

唸りながら、考え出す一之瀬。超可愛い。

「神崎は何かある?」

「そうだな……。予めボイスレコーダーを持っておく、というのはやはり無しか?」

「うーん。今回に関しては無しかな。そういう風に反省から学ぶ、つてのも大事だけだね」

「そうか。となると……」

そう言つて神崎も考え込む。少し考える時間をやるか。そう考えながら、俺ももう一度何か上策がないか考える。勿論、発案者として何通りかこの事件に有用な策を考えた。だが、まだ俺が思いつかないだけで何かあるかも知れない。

数分経つたが、中々有効な考えは出なかった。

そもそも、だ。2人はDクラスの為に何度も色んな方法を探っていただろう。たった数分で上手い策が浮かぶ筈もないか。

「よし! あんまり進んでないみたいだし、俺が一つ浮かんである策を発表する!」

「お願いします! 服部先生!」

俺に可愛く頼んでくる一之瀬。可愛いはまさよし。間違えた。可愛いはせいぎ。

「俺がまず考えたのは、偽の目撃者を作ることだ」

「それは……バレた時のリスクが高すぎるんじゃないか?」

「フフン。甘いなー、神崎。目撃者は学校に報告するもの。そんな先入観に囚われるのは悪手だぜ?」

「?どういふことだ?」

「まず、そうだな。目撃者は男で気が弱そうな奴がいい。うちのクラスだと浜口とかが最適だな」

浜口哲也。うちのクラスの中では学力は普通だけど、そこそこ頭がよくて機転が効く奴だ。

男で眼鏡掛けててひ弱そうに見える、という絶対条件を満たしている上に+aで会話の対応力も高い。ベストマッチだ。

「偽の目撃者には石崎達を呼び出してもらうんだ。場所は人目につきづらく、人が隠れたりしていても、バレにくい場所がいいかな。そこで石崎達を脅すんだ。『僕はあるの場にいきました。見ましたよ。あの時くくくって言ってましたよね』という風にな。」

会話の内容は当事者(今回でいう須藤)から聞けばいい。勿論、須藤が正確に覚えているとは思えないが、ある程度合っていればそれでいい。審議前日ぐらいに実行すれば石崎達も正確な会話内容は覚えてないだろうしな。

「なるほどねえ。つまり、服部君は偽の監視カメラ作戦と同じで、相手に訴えを取り下げさせる、つてこと?」

「そんなに上手くいくか？いくら石崎達でも途中で気付くだろう」

偽の監視カメラと偽の目撃者の違いは説得力の有無だ。『監視カメラは物証として学校側が持つてる。だから学校側も数日の余地を与えた』『たまたまその場にいた目撃者と本人たちが見逃した監視カメラ』e t c . . .

「神崎の言う通り。脅す目的は訴えを取り下げさせることじゃない。目的は石崎たちに殴られることかな。目撃者は気の弱そうな奴にするって言っただろ？オドオドしてる奴から急に脅されてイキつたり煽つてくる。調子乗んな！つて殴る可能性は高いと思う」

偽の目撃者が男なのも同じ理由。石崎も女より男の方が殴るのに抵抗感ないだろうし。呼び出す場所が人目に付きづらい場所なのも殴るのに抵抗を無くす為。

そして隠れられる場所があるのは証拠を撮るためだ。

「そうして石崎が殴った場面を撮影して石崎を改めて脅すもよし、学校に提出して石崎達の心証を落とし、石崎達を加害者に仕立てあげるのもよし、つて感じだ」

「……………」

「?どうした?有効な策だと思えなかつたか?」

石崎の頭の悪さを考えればそこそこ上手くいきそうだと思つたんだが。やっぱり希望的観測か?

「いや、上手く行く可能性は低くないと思う。ただ……」

「ただ？」

「ちよつと、ね？ 邪道だなあ……と思ひまして。えつと……にやはは〜」

「う〜ん。まあ、気持ちにはわかるけど。少なくとも神崎にはこれくらいの思考は軽く出来るようになってもらわないと困るよ」

ぶつちやけ俺一人だと原作乖離にどこまで対応できるか分からんからね。

「てことで、神崎に頼みがあるんだけどさ、邪道な思考をいつも考えておくようにしてくれない？」

「邪道、か。それは龍園みたいな考え方をして、龍園みたいな戦い方をしろ、ということか？」

見た感じ神崎の今の質問は純粹な疑問っぽい。思ったよりそういうのに抵抗なさそうだね。いいね！

「うーん。龍園みたいな考え方ってのは合ってるんだけどさ。別に邪道な思考を身につけて出来るのは龍園みたいな戦い方だけじゃなくて、龍園の戦い方を予想して対策する、みたいなことも出来るよね」

「なるほど。自分自身が邪道を使うんじゃないかと、相手に使わせないように立ち回る、とい

うことか」

「そういうこと」

要するに龍園キラードだな。嵌ったら最高に面白いだろう。

「そう。だから早速邪道を考えてみてほしい。また、何かテーマを出すから。……よし、逆に龍園視点に立ってみてくれ。『暴力事件でDクラスへの被害を大きくさせるにはどうしたらいい?』」

それを聞いて、また神崎が考え始めた。

「あ、一之瀬はDクラス視点の方で何かいい策がないか引き続き考えて」

「分かった! 任せて! 服部君より凄いこと考えてみせるから!」

そう言っつてバーンと胸を張って答える。もう既に凄いことになってる(ナニがと言わない)

数分経つて2人共何か考えたみたいだ。

「服部君の案を利用したんだけどね。偽の目撃者との会話でボイスレコーダーを使うつてのはどうかな?」

「んー? 相手がボロ出すのを期待するつてこと?」

「フフン。甘いねー、服部君。偽の目撃者に脅されたら石崎君達はまずなんて言うと思う？」

「うーん。『嘘つけ』とか『調子乗んな』とか『龍園さんに電話しよう』とか？」

「どれも可能性は高そうだね。……でもさ、そのセリフのどれもが『被害者側のセリフ』ではないよね？」

「ツ！なるほどな…。そうやって被害者側として見たら明らかにおかしいセリフを録音し、審議の時にまとめて責め立てるって訳か」

「そーゆーことー！」

ピースピースしながら一之瀬が肯定する。可愛い。

被害者側らしくないセリフって言ったたら『まずい』とか『須藤に聞いたんだろ！』とかか。充分言いそうだな。

まあ、それでも穴はいくつかあるけど、本番じゃないしそこまで考え出したらキリがないしな。

「とりあえず、現時点では合格ってことで」

「やったー！」

一之瀬が嬉しそうにはしゃいで、飛び跳ねる。それに応じてたわわがプルンプルン揺れる。素晴らしい。

「盛り上がっている所悪いが、俺も考えてみたぞ」

「おっ！いいぞ、聞かせてくれ」

「と言っても具体的に思い浮かんだわけじゃない。方針が立ったって所だ。審議までの数日で小さいことでいいから須藤が100%悪いような別の事件を作り上げるってのはどうだ？」

ほお……。なかなか面白いこと考えたな。

「なるほど。具体的な方法は思い付いてないんだな？」

「ああ。とりあえず思い付いてみたことを言った感じだ。すまん」

「別に全然いいよ。面白いじゃん。……そうだな。須藤にわざとぶつかって言葉では謝ってるくせに須藤のことを睨めつける、とかどうだ？録音すれば、音声的には理不尽にイチャモンつける須藤の出来上がりだ」

「うわあ……」

「なんで、引くんだよ!？」

神崎 side

今日は服部と一之瀬と『考えようの会』というものを行った。内容は、これからのクラス争いに向けて思考力を鍛えようというモノ。

中間テスト後の打ち上げの時と違って真剣にクラスのことを考えて議論するのは楽

しかった。

勿論、クラスの皆で仲良く楽しくやるのも嫌いという訳ではないが。

そしてこの会で、服部に邪道な思考を常にして、相手が使ってくる正攻法とは言えないような戦いに対応出来るようにする、という提案をされた。

一之瀬みたいにクラスをまとめ上げることも得意じゃなく、服部みたいにクラスポイントの仕組みに気がついたり、過去問を思いつくなどの裏技でクラスに貢献したりもできない俺に何か出来ることはないか、と考えていたため、この提案を拒否する道はなかった。

俺はまだまだ実力が足りないかもしれない。

それでもこの学校を通して成長していき、いずれ服部の隣に立てるほどの実力を身につけ、あいつのことを支えたいと思う。

戦の前の準備

期末テストが終わって数日が経ちました！

どうも榊田桔梗です！

テストが終わって平穩をしみじみ感じていると、なにやら服部君に呼び出された。最近よくラインはしてたけど、会うのは久しぶりだ。

目的の部屋までついたのでインターホンを鳴らす。一応、合鍵はあるけど流石に急に入るような失礼な真似はしない。

「おつすく榊田。入って入って〜」

「おじゃましま〜す♪」

ドアの前で挨拶を交わし、部屋の中に入れてもらう。

一体何の話だろう。デートの約束かな？それとも告白？とうとう私に惚れちゃった？最近のラインでずっと私に惚れるようにアピールしてきたからね。どれが来てもおかしくないかな。

「そうだ、榊田。学園一の美少女のために用意したちよっとお高いお茶があるんだけどさ。飲む？」

……は?! えっ、ちよ、ちよつと!?! 学園一の美少女?! 私のこと!?

は? は? は? いや、いくらなんでもそれは褒めすぎじゃない?

いや、ね。うん。そりゃ私も自分がかわいいところは自覚してるよ。でもさ、流石に一番かわいいと思ってるのではない。同じクラスでも長谷部さんや堀北。違うクラスなら、一之瀬さんとか坂柳さんとか。悔しいけど自分より顔がいい人は存在する。

「おーい? ちよつと? なんで無視するん? 一応言うけどさ、学園一の美少女って、その……… 榎田のことだからな?」

~~~~~!!

やつぱり私のことなんだ……

ああ、ヤバイ。今絶対、変な顔してる。恥ずかしい。

はあ……… 幸せ。服部君めちやくちや私のこと好きじゃん。学園一の美少女。褒めすぎだよ、バカ。

「あの一、榎田? 榎田さん? なんか言ってる?」

ああ、そうだ答えなきゃ。お茶、私のために用意してくれたんだよね? あーダメだ。考えただけで恥ずかしくなってくる。

「じゃあ、よろしくお願ひします………」

「オ、オツケー………」

というか、服部君も言うの照れてたんだ。顔真っ赤じゃん。かわいい♡  
後、今日呼び出された内容が分かった。告白に間違いないよね！

彼からお茶を貰うまでの間、私は服部君のベッドの中に潜って堪能していた。

はあくあく……そこら中から服部君の匂いがする！

もうこれは服部に抱きしめられていると言ってもいいよね！

……どうしよう。服部君に抱きしめられてる所想像したらクラクラしてきた……

「お茶どうぞ。……なんでベッドに潜ってるの？」

「ありがとうーん？入ったらダメだった？」

「いいよね？だつてこれから一緒に寝るかもしれないんだよ？なら、私のベッドと言つても過言じゃないよね！」

「いや、別にいいんだけどさ……なんか俺のベッドの匂い嗅いでない？」

「？なんか言つたみたいだけど、声が小さくて聞こえなかった。多分、告白前だから緊張してるんだろう」

高級なお茶つてのはやはりお金が掛かる分美味しいみたいで、すぐに全部飲んでし







「だるいつてマジで。マジでダルイ。……………寝る」

うーん。余り褒めすぎると逆効果ってことか……………？照れ隠しの可能性もあるか。

まあ、一旦櫛田は放置しとくか。

俺はベッドから目を離し、葛城派（葛城と戸塚を除く）15人にフリーアドレスでメールを送る。

『宛先：優秀なAクラスの貴方へ』

おめでとうございます。貴方は私から優秀な人間として選ばれました。

この事は他言無用でお願いしますね。次の夏休み、無人島でポイントに関する何かが行われます。今回貴方にメールしたのはその内容について、です。

結論から申しますと、5万Prで試験の情報を買いませんか？

私の聞いたところによるとAクラスで派閥争いをしているとか。しかも派閥内でナンバー2の地位は貴方ではなく戸塚という男にあるだとか。本当の実力だけ見れば貴方以外にナンバー2など務まらないというのに。

ここは私から情報を買い、試験で活躍して葛城さんへ貢献し葛城派を盛り上げ、さらに名実ともにナンバー2の地位と名誉を手に入れるべき。そうでしょう？

本来なら葛城さんを慕うだけの男ではなく、貴方のような優秀な方が彼の隣で支

えるべき。少なくとも私はそう考えております。

そもそも、優れた人間は常に情報のアンテナを張っているもの。あなたもその例に漏れないでしょうか？

情報の重要さを分かってないはずがありません。

勿論、情報に間違いがあればポイントは返金します。

また、情報に不満があれば返金を要求することも可能です。ただ、返金を要求された場合は次から情報を渡すつもりはありません。

他言無用でお願いします。この事がバレると貴方と私双方がダメージを負いかねませんので。まあ、貴方はAクラス。この取引を結ぶかどうかの判断くらい一人で出来るでしょうから心配してませんけどね。

では、良いお返事を期待しております』

まあ、内容はこんなもんでいいか。疲れた。それよりさつきからすごい櫛田と目が合う。





「ええ、よろしく願います。初対面のはずですが、一体どのような用件でしょうか？」

そう、俺が会っているのはなんと表ラスボス（裏ボスは綾小路）の坂柳有栖ちゅわん。生粋のロリ、という紹介が適切だろう。

後ろには神室、橋本、鬼頭を連れている。鬼頭の睨みが強烈すぎてちよつとこわい。

「用件、ね。端的に言おうと、葛城派潰してあげようか、て相談かな？」

「へえ……。それは面白い相談ですね。ふふ、話くらいは聞いてみましょうか」

そう言っつて、俺の向かいの席に座る坂柳。従者たちは立ったまままだ。可哀想に。座らせてあげればいいのに。

「まあ、話つていうほどのものじゃないけど。坂柳もさ、来週のバカンスでポイントの増減が発生するイベントがある、くらいのことは予想してるだろ？でも坂柳はその足のせいでイベントに行けない。そこで、そっちの駒を数人貸してくれたら、葛城派を潰してあげるよ、つてだけ」

「ふむ。簡単に頷ける話ではありませんね。あなたが葛城派が倒せる保証はありませんし、何より私は私がない間にAクラスが負けることを望んでいません」

『私が居ない間に負けることを望んでない』?!ハッ。茶番かよ。まあ、意図は分かるけど。録音対策だろうな。実際録音してる訳だから、最適解だしな。

「はっ。よく言うぜ。葛城派を蹴落とたくて仕方ないくせによ」

「……………鬼頭君。彼のボディチェックをお願いします」

そう言われて鬼頭が無言で近づいてくる。仕方ない。最終手段を使うか。あまり使いたくなかつたんだがな。

鬼頭がポケットに手をつ突っ込んだ瞬間、俺は鬼頭にしか聞こえないポリウムで話しかける。

「な？10万やるから黙ってくれない？」

鬼頭は無言でポケットから録画中の端末を叩きつける。静かな図書館にバン！という音が響き渡る。どうやら買収に失敗したみたいだ。まあ、あんまり期待してなかったけど。

というか、スマホ叩きつける力強すぎ！冗談が通じないのかこいつう!?

「やめろ!?!おま、正気か?!スマホ壊れたらどうすんだよ!?!」

「ふふ。ふざけていますね。鬼頭君、他にボイスレコーダーなどないか念入りに調べてください」

数十秒かけ、俺が端末以外に何も仕掛けてないことを確認する。尚、この間に坂柳は机の裏や周辺の椅子にボイスレコーダーが取り付けられてないことを確認していた。警戒心高すぎ。

後、この間に俺はスマホがちゃんと動くことを確認していた。

「フン。十分気がすんだか？で、取引の方はどうすんだ？」

「先程も言った通り、あなたが葛城派を潰せるほどの実力があるのか分からない以上、安易に手を結ばません」

「ふうん。じゃあ、実力を示せばいいわけだ？」

「ええ。実力を示すつもりならチェスでもしますか？」

チェスでも、ってなんだよ笑

実力が示せそうなものの中から適当に選びました、みたいな言い方すんじゃねえ笑  
「悪いが、坂柳。俺はお前の土俵でやるつもりはない。というよりチェスは出来ねえ」  
「ならばこの取引は無しということにしますか？」

坂柳は探るような目で問いかける。俺がこの取引にどれくらい重きを置いているか、他に策はあるのか、ここで見極めようとしている。

「将棋なら出来るが、それでいいならどうだ？」

「あら、私にあなたの土俵で戦えと？」

「別にチェス以外の頭脳戦が出来ない、ってなら諦めるけど」

「ふふ、安い挑発ですね。ですが、いいでしょう。ここはあなたに乗ってあげます。あなたの得意なゲームで屈辱的なまでに敗北を味わわせてあげましょう」

安い挑発とか言いながらめつちやキレてんじゃねえか。後ろの3人が少し震えてんぞ。

「ハッ。負けても泣くなよ?」

約2時間後

負けた。結果から言うと、負けた。めちやくちや悔しい。後、一步の所で俺の攻めが遅かった。あそこで手を変えてれば勝ったのか? いや、でも……。

てかなんなの、あれ。中盤終盤の隙のない攻撃。一手ミスれば即自陣が突破されて、自陣が崩壊、詰み。天才怖すぎんだろ。

「ふう。なかなかの接戦。後少し私の攻めが遅ければ私が負けていたかもしれないね。いい勝負でした」

坂柳がなんか言ってるけど俺は負けたショックで聞こえなかった。接戦に持ち込むまでは良かったのに、最後の最後でやられた。

「ハッ。何を感慨深かったのでしょうか。」

「……………あれ？服部君。私を泣かすんじゃないですか？悔しいですか？自分が勝つと思っていた勝負で負けた気持ちはどんな気持ちですか？ねえ？聞いてますか？教えて下さい。どんな気持ちですかあ？」

「うるせえ!!接戦だったろ！あそこでミスってなかったら俺が勝ってた!」

「何を言ってるんですか？負けは負けですよ？言い訳なんて見苦しいですね」

「ぐぬぬ……………」

負けは負け。その通りすぎてぐうの音も出ない。いや、悔しいのでぐうの音くらいは出してやる!

「ぐう」

「……………なんででしょう。まさか、負けて悔しいからぐうの音くらい出す、とか思ったわけじゃないですよね?」

怖っ。考えてること読まれたんだけど。

「さて、どうしましょうか。もう一局くらいしますか？」

「そうだな。次は俺が勝つ……………」

「お姫様」

あ？なんだ橋本。俺らの邪魔すんのか？

「そんな睨むなよ、お2人さん。なあ、服部。お前自分がお姫様を呼び出した理由を忘れてるんじゃないか？」

「あ」

「アホでしょ。あんたら」

「ゴツホン！じゃあ、気を取り直して。坂柳。俺は合格か？」

「ええ。そうですね。あなたなら葛城君程度なら潰せるでしょう。私には負けましたが」

うるせえ……………ここはスルーだ。言い返したら負けだ。もう負けただろ、とか言うツッコミは受け付けないぞ。

「お前が貸してくれるのはどの兵だ？」

「神室さんと橋本君ですね。その2人がいれば十分でしょう？」

「まあ、そうだな。なら契約内容はこんな感じでいいか？」

『1. 夏休みに行われる無人島での試験で神室真澄、橋本正義の2名は服部晴秋の命令の下で動く』

2. 服部晴秋は無人島での試験で葛城派を失墜、もしくはそれに近いレベルの衰退をさせる

3. 2が成立した場合、坂柳有栖は服部晴秋に報酬として50万ポイント支払う』

「ふざけているのですか。契約を口外しないことと、失墜や衰退の定義が書かれていますし、葛城派を潰せなかった時のペナルティも書かれています」

「ハハ。悪い、悪い」

まあ、当然気付くか。坂柳なんだし。だか、坂柳の攻撃はここで終わらなかった。

「そして、私は契約3の内容を受け入れるつもりはありません」

「は？どういう意味だ、坂柳。俺にタダ働きしろと？」

「タダではありませんよ。契約2が成功する、というのつまりAクラスが試験に負けるということ。それだけで他のクラスにとってはプラスでしょう？それに契約1を使えば葛城派を貶める以外にもあなたの利益のために2人を動かせます。十分でしょう？」

「はっ。じゃあやっぱ契約はやめるか？」

「構いませんよ。何もあなたを使わずとも葛城派を失墜させることは出来ます。例えば、龍園君、とか」

「チツ……」

「さあ？どうしますか？」

話し合いの結果、この契約に立ち会った5名が卒業まで口外しないこと（文字で誰かに伝えることも禁止）

失墜や衰退の定義に関しては

・ 無人島試験終了後に葛城派の人数が7人以下（葛城含まず）になること

・ 無人島試験が終了した時に葛城が無人島試験の結果についてAクラスの30人以上に批判されること

の2つの内どちらか1つでも満たせばいいことになった。

報酬やペナルティはどちらも30万ポイントになった。完璧とは言わなすがかなり上手くいったと言えるだろう。まあそもそも契約が結べた時点でほぼ俺の勝ちだしな。

夕暮れ。坂柳と神室が寮の自宅に向かって歩いていった。勿論、神室が全ての荷物を持っている。

「で？どうだったの？」

「そうですね。将棋はチェスの合間やチェスの理解を深める為にするくらいでしたが、これからはもつとやってみても良いかもしれません」

「違うわよ！将棋から一旦離れろ！あんたいつも言ってるじゃない。天才がどうの、つて。服部は天才だった？」

「さあ。流石にあの対局だけでは判断は付きません。まあ、言いかえれば一回の対局では見限れないくらいには凡人ではありません」

「ふうん。じゃあ、あんたが求めている本当の天才の可能性があるってこと？」

「いえ、それはないと思います。逆に言えば、一回の対局のみで示せるほどの大きな才能は持っていない、と言うことですから。ただ……」

「ただ？」

「対局中、彼が私が思い描いた最善手を越える手を打つことが数回ありました」

「は？」





## 無人島試験編

## 無人島試験はつじまるよー

どうも、海が綺麗で大興奮している服部晴秋です。海の壮大な広さが俺の闘争心を掻き消しそうになるね。もう無人島試験なんてやらなくていいんじゃないかなあ……

当たり前だけど、原作と変わらず綾小路は今回本気を出すつもりらしい。だから『Dには手を出すな』って言われた。俺はそれだと困るから、なんとか『Dが不利益を被らなければ許してくれ』って言って納得してもらった。

そんなことを考えていたら星乃宮先生からメールが来た。どうも船内にあるスパに來い、とのこと。スパの代金は星乃宮先生が全部出してくれるらしい。なんて太っ腹なんだ！

え？この船内の施設って全部無料なん？

俺は今、星乃宮先生に呼ばれて高級スパに來ている。カーテン越しには星乃宮先生と一之瀬がいるはず。そう！裸でなあ！！

一之瀬の瑞々しく、エロい裸体を見るために俺はカーテンの方を強く見つめるが

……クソッ！なんで俺に透視能力がないんだ！！

「あつんん……」

「あの、星乃宮先生……」

「なあに？一之瀬さん？」

「結局、なぜ私たちを呼び出したんですか？後そういう声を出すのやめて下さい。隣には服部君もいますので」

「んん……仕方ないでしよ。ここすつごい気持ちいいんだからあゝ」

キツシヨいな、このゆるゆる教師（何がゆるゆるとは言つてない）。カーテン越しに一之瀬の呆れを感じる。と思つていたら急に星乃宮先生が真面目な話を始めた。

「2人はさ、ンッ！Dクラスで警戒すべき人物つて誰だと思う？」

「Dクラス、ですか？うくん……榎田さんとか平田君とか、後堀北さんとか……ですかね？」

「なるほどねえ。アンツ！……服部君は？」

喘ぐな。そして俺に振るな。面倒くさ。適当に答えとこ。

「まあ、一之瀬に同意つすね」

「そつかあゝ。アアン！でもさあ、他にいるんじゃない？警戒すべき人が」

「えつと……高円寺君とかですか？」

一之瀬がそう答える。高円寺六助。『俺が仲良くなりたい人間ランキング』ぶつちぎりの1位の男だ。2位の坂柳も捨てがたいが、難易度以外の全ての条件において圧倒的だ。まあ、まだ話したことないんだけどな！

接触するのは船上試験の時でいいだろう。高円寺さんに気に入られるならワンチャンAクラス特権を捨ててもいい。

そんなことを考えていると、一之瀬と星乃宮先生が会話を続けていた。

「まあ、確かに彼の身体能力も凄いいけどお。ンッ！他にいるんじゃない？」

「もしかして……綾小路君のことですか？」

「そう！綾小路君こそDクラスで最も警戒すべき人物だと先生は思うの。服部君はどう思う？」

知らんがな。てか、綾小路レベルだとあんた程度が警戒しても大して意味ねえだろ。

「綾小路っすか。あんまよく知らないっすね」

「ふふふ。そっかあ。まあでも！アン！服部君なら綾小路君が相手でもなんとかしちゃうかもね！アンツ！私、服部君のことを信じることにするね！アアン！イクツツ！！」

お前絶対ワザとだろ笑、何がしたいんだ笑

それにしてもどうやら星乃宮先生の俺に対する期待はかなり大きいようだ。たとえ星乃宮先生でも認めてくれてるのなら少し嬉しい。俺はそんなことしか考えてなかった。

ここでの対応を後悔することになるなんてこの時の俺は思いもしてなかったんだ。

星乃宮先生と一之瀬とのお話が終わった後、デツキからプールではしゃぐ女子の水着姿を見ていたがどうやらその時間も終わりのようだ。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デツキにお集まりください。間もなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

俺はすぐさま複数人にメールを送る。

『t o 神崎

今すぐ俺の所に来て。場所は端末の位置情報から』

『t o 神室

今日の夜の12時に俺たちが降ろされる浜辺に来て。

もし、夜の12時まででに端末が使える状況になったりしたら、集会所変える連絡するかも。

もし降ろされた場所がAクラスとBクラスで違ったらBクラスが降りた浜辺に集合。俺たちが降りた場所の把握よろしく。

橋本にも連絡よろしく』

『t.o綾小路

今日の夜の10時に俺たちが降ろされる浜辺に来て。

もし、夜の10時まででに端末が使える状況になったりしたら、集会所変える連絡するかも。

もし降ろされた場所がBクラスとDクラスで違ったらBクラスが降りた浜辺に集合。俺たちが降りた場所の把握よろしく。もしAやCクラスのやつが近くにいたら諦める。

後、榎田も連れてきて』

全員分のメールを送り終えた所で、最初に送った相手、神崎がやってきた。隣には一之瀬もいる。

「なあ、服部。あの変なアナウンスはどういう意味だか分かるか？」

「一回自分で考えてみて。逆に聞くけど、どういう意味だと思った？」

「これから無人島でポイントを賭けた何かが始まる、と思つたな。アナウンスの言葉を信じればこれからそのポイントを賭けた『何か』に有利な情報が手に入るつてどこか？」

「俺と同じだよ。よくやつた神崎。その調子で頼むぞ」

「ああっ！任せてくれ！」

「ふふつ。ホント頼もしいね、2人とも」

「何言つてるんだ、一之瀬。頼もしいのはお前も同じだよ」

「3人で、ううん。クラスの皆でこれからどんな壁も乗り越えていこうね！」

「おう」「ああ」

最終回かな？何でこの学校でこんな爽やかな青春やつてんの？

と思つていたらようやく島が見えてきた。高速で島の周りを巡回していく。

その速さに耐えきれなかったのか一之瀬がよろける。

「キャッ！」

「おっと。大丈夫か、一之瀬？」

「う、うん。ありがとう…」

転びそうになつていた一之瀬を隣にいた俺が支えたんだけど……一之瀬近っ!!こいつこんな目大きかつたっけ？それになんか目がキラキラしてる。こんなに可愛かつ

た?!

「服部君? その……出来れば離してくれない?」

「あつ! 悪い!」

「ううん。謝ることじゃないよ。支えてくれてありがとうね」

そう俺にお礼を言つて微笑みかけてくる一之瀬。天使かよ!

「島が半周くらいしたな。2人ともあの森を切り開いた道が見える?」

「……あつ! ホントだ。よく気がついたね! 服部君!」

「他にも高台や、崖も見えるな」

「だな」

おそらく原作Aクラスが構えていた洞窟周辺のスポットがあるんだろう。

「あつ! あそこに大きな倒木がある!」

「ん? 本当だな。えつと……」

「? どうかしたの?」

「いや、なんでもない」

倒木。そんなの原作にあつたか? いや、原作で描写されてないだけかもな。まあ、折

角一之瀬が見つけてくれたん……ツ!

一之瀬が見つけた? ……原作Bクラスが取ったスポットか! そういや、原作神崎が綾小

路に言つてたな。まあ、今回は無視するけどね。

そうして巡回が終わった頃、またアナウンスが流れた。

『これより、当学校が所有する孤島に上陸いたします。生徒たちは30分後、全員ジャージに着替え……………』

そうしてアナウンスの指示通りに生徒たちが行動した。もうすぐ上陸だ。

「ではこれより、Aクラスの生徒から順番に降りてもらう。それから島への携帯の持ち込みは禁止だ。担任の先生に各自提出し、下船するように」

降りるまでの間に俺は近くにいた姫野に話かけた。

「久しぶりだな、姫野」

「うん」

俺たちは終業式以降会ってなかった。メタ的にも久しぶりの登場だ。相変わらず素気ない。もう少し愛想良くすればいいのに。

「ハハッ、相変わらずだな！あつ！でも姫野もこの旅行楽しみにしてたんだな。髪巻いてるじゃん！アイロン使ったのか？」

仕方ないので、俺が愛想マシマシでコミュニケーションをとる。それにしても、今日の姫野は可愛い。いや、いつも可愛いんだけど、今日はいつても可愛い。多分オシャレしてるからだと思う。今日は髪を巻いてゆったりツインテールって感じだ。よ

く見ると薄く化粧もしてる。ピンク色の唇からは色気を感じさせる。

「あれ？化粧もしてるんだ。似合ってると思う！ちよー可愛いよ！」

「あ、ありがと……」

思ったことを素直に言ったら照れたみたいだ。巻いた髪を自分の指でくるくるして  
る。可愛いかよ！

「ホント綺麗な髪してるね。触ってもいい？」

「いや。セットが崩れるでしょ」

「それもそつか。姫野つてさ髪のセットとかも得意だったんだね。今度、俺の髪もセツ  
トしてくれない？」

「別にこれくらい女子なら普通だから。後、男の髪のごとはよく分かんないし、他人の髪  
のセットとか面倒なことしたくない」

やっぱりそう簡単に攻略出来ねえな。まあ、気楽に行くか。そう思いながら、俺は残  
橋を降りていった。

点呼と整列をし、程なくした所でAクラスの真嶋先生が壇上上がる。

「今日、この場所に無事つけたことを、まずは嬉しく思う。しかしその一方で1名ではあ  
るが、病欠で参加できなかった者がいることが残念でならない」

うん。ホント真嶋先生にとっては残念だと思うよ。坂柳がいなこと。

「ではこれより……………本年度最初の特別試験を行いたいと思う」

## 洞窟取ります

遂にこの時が来た。気持ちが昂っていくのを感じる。だが、闘志まじまじな俺とは逆に大半が困惑していた。

「期間は今から1週間。8月7日の正午に終了となる。君たちはこれからの1週間、この無人島で集団生活を行い過ぎることが試験となる。なお、この特別試験は実在する企業研修を参考にして作られた実践的、かつ現実的なものであることを最初に言っておく」

「無人島で生活って…船じゃなくて、この島で寝泊まりするってことですか？」  
Cクラスにいる生徒が質問をする。

「そうだよ。でも君たちはすぐに船に戻れるから安心して。……羨ましいっ!!」

「そうだ。試験中の乗船は正当な理由無く認められていない。この島での生活は眠る場所から食事の用意まで、その全てを君たち自身で考える必要がある。スタート時点で、クラス毎にテントを2つ。懐中電灯を2つ。マッチを1箱支給する。それから日焼け止めは制限なく、歯ブラシに関しては各自1つずつ配布することとする。特例として女

子の場合に限り生理用品は無制限で許可している。各自担任の先生に願ひ出るように  
以上だ」

この後、池が喚き散らかし、真嶋先生と茶柱先生が2人掛かりで大人気なく池を追い  
詰めたり、他のモブが試験を批判して、また真嶋先生が反論したり、試験の詳細の説明  
をされたり、等々があつた。

ルールを要約するとこんな感じだ。

- ・試験用のポイントが300ポイント与えられる
- ・そのポイントを使って生活に必要な物質を購入
- ・残ったポイントがクラスポイントとしてそのまま加算される

真嶋先生が解散を宣言すると、クラスメイトの殆どが一之瀬の元に集まる。

「どうしよう？ 帆波ちゃん……」

「とりあえず我慢しまくればいいんだよな！ 一之瀬！ 一之瀬！」

「帆波ちゃん、好きです」

「み、みんな落ち着いて……!!」

「「帆波ちゃん、一之瀬！ 一之瀬さん！」」

おいおい、一之瀬は聖徳太子じゃねえんだぞ。取り敢えず喚くだけじゃなくて多少は  
自分で考えてから人に聞け。

だが、次の瞬間、一之瀬が手をパンツ！、と叩く。

「皆、落ち着いて!!なんだか大変なことになっちゃったけど、私たちBクラスなら絶対に乗り越えられるよ!!皆で力を合わせて頑張ろうー!!」

聴衆は黙って一之瀬の言葉聞き、一之瀬が言葉を終わると……

「オオー……」

最高潮のテンションでモブどもは叫ぶ。流石一之瀬。イヨツ!善のヒトラー!

一之瀬がクラスをまとめたこのタイミングで話を切り出す人がいた。星乃宮先生だ。

「いやー。皆張り切ってくれて何より!そして盛り上がってるって、悪いけど追加ルールとペナルティと皆の体調管理、それからトイレについて説明するね」

そう言って星乃宮先生は腕時計をクラス全員に配布した。これで体温やら脈拍やら位置情報やらを学校側は把握するらしい。取り外し出来ないようにされてるから、安易に悪いことは出来ない。トイレは簡易トイレで無制限支給なこと以外、特に大事なことはないの割愛。

追加ルールについては正当な読者は原作を読んでもらうから問題ないだろうけど、一応簡単に説明しておく。

・必ずクラスに1人リーダーを用意しなければならない

・そのリーダーはリーダーの名前が刻まれたキーカードを使って無人島内にあるス

ポットを占有できる（キーカードの使用が出来るのはリーダーのみ）

- ・ スポットを占有すればその場の権利を独占できる

- ・ スポットの占有権は8時間

- ・ スポットを一回占有するにつき1ポイントボーナスを得る

- ・ 8月7日の午前8時の点呼のタイミングで他クラスのリーダーを指名出来る

↓指名が成功すれば相手のリーダーを当てたクラスが+50ポイント

当てられたクラスが—50ポイントかつスポット占有により手に入れたボーナスポイント没収

インント没収

↓指名が失敗すればリーダー当てを失敗したクラスが—50ポイント

- ・ 正当な理由なくリーダーを変更出来ない

つて感じた。全然簡単じゃなかった。長い。

ペナルティについては

- ・ 体調を崩したり大怪我を負って試験の続行が難しいと判断されたら—30ポイント

かつ強制リタイア

- ・ 環境汚染が見つかった場合—20ポイント

- ・ 毎日午前8時、午後8時に行われる点呼に不在の場合—5ポイント

- ・ 他クラスが占有したスポットを許可なく使用した場合—50ポイント

・他クラスへの暴力行為、略奪行為、器物破損などを行った場合、その生徒が所属するクラスは即失格かつ対象者のプライベートルポイント全没収

俺たちへの説明が終わった所で星乃宮先生がどっかに行った。多分茶柱先生の所だ。

誰もそのことに気付かず、Bクラスの面々は試験について話し合っていた。

「リーダー誰にする?」

「そりゃあ、一之瀬さんでしょ」

アホなこと言うな。もう少し考えてから発言しろ。

「でも、私だったら他クラスから狙われちゃうリスクがあるかも」

「そっか!でもだとしたら他に誰か任せられる人は……」

「まずはリーダーが誰かよりスポットを見つけた方がいいんじゃないかなあ?」

そう言ったのは浜口。俺も賛成。というか暑いし日陰行こうぜ。なんでこのまま浜辺で話てるのよ。

「私も同意見かな!服部君はこの試験どう思う?」

皆の目が一斉にこつちを向く。過去問の件でクラスメイトからは割と信頼されてる。一部(白波)を除いて。その白波さんという俺をめっちゃ睨んでくる。こつわ笑

それにしてもこの試験、か。随分スケールがでかいことを聞くな。多分わざとだろう。まあ、信頼されてる証拠なんだろうけど。

「まずは日陰にでも行こう。それと日陰に着いたら何人が指名するからその人たちは俺についてきて」

俺の発言でまずは日陰に向かう。その途中で神崎が俺に話しかけてきた。

「スポットをとるつもりだな？」

「ああ。一直線で取りに行く」

「一直線、となると」

「おう、お前の思う通りだ。洞窟を取りに行く」

行くぜ！原作崩壊！

日陰に移動した後、俺は直ぐに指示を出した。

「じゃあ、俺が言うメンバーはついて来て。メンバーは神崎、柴田、南方、安藤の4人」「ああ」「分かったぜ！服部！」「えっ？私？」「オツケー♪」

分かってたとばかりの神崎や急に指名されて慌てる南方、快く引き受けてくれた柴田と安藤。

「オツケーだよ服部君。皆、足が速い人たちだね？」

一之瀬が聞いてくる。ナイス相槌。話がスムーズになる。

「ああ、そうだ。目星がついたスポットを取りに行くつもりだからな」

どよめきが起こる。まあ、仕方ないか。時間がないから説明出来ないけど、許してね。「適当なこと言わないで下さい！今の時点でスポットの場所なんで分かるわけないじゃないですか！」

白波。時間がないんだ。邪魔すんな。

「一之瀬」

白波を無視して、ちよいちよい、と一之瀬を手招きする。

「は?!無視s…」

網倉が隣にいたアホの白波を抑えた。ナイス。

近くに寄ってきてくれた一之瀬に誠実アピと用件を伝える。

「ごめん、一之瀬。俺のせいで」

「いや、服部君が悪いわけじゃないから気にしないで。私からも後で白波さんには言っておくから！それよりいいの？急いでたんじやないの？」

ホント人のことよく見てるなこいつ。

「うん。だからもう行くつもりなんだけどさ、洞窟に行くから一之瀬もペースゆっくりでいいから皆と来てね。一之瀬も船の上から見てある程度の方向は分かるでしょ？」

「オツケーだよ。他クラスに取られないように気をつけて！」  
「おう」

一之瀬をメンバーに加えなかったのは皆を引き連れて洞窟に着いてもらうためだ。  
わざわざ先行組が戻って案内するのも手間だしな。

「んじゃ、行ってくる」

「うん！行ってらっしゃい！」

そう言つて元気に手を振ってくれる一之瀬。嫁になつてくれないかな。

森を全速力で走り抜けながら、俺たちは洞窟へと向かう途中。おっぱいをぶるんぶるん揺らしながら安藤が話しかけて来た。全くけしからんな女だ。

「ねえねえ。服部君つてさあ、姫野さんと付き合つてるの？」

「あ！それ俺も気になつてた〜！」

「だよねだよね！てかさ、同じことが気になるつてやっぱ私と柴田、その……気が合うよね……！」

「お、おう？」

よく分かつてなさそうな柴田の反応を見て安藤がショックを受ける。

「分かったた。分かったたよ。柴田がそういう奴だったのは……」

「ドンマイ！紗代ちゃん！」

「ああくん！こずえくく!!」

「お前らペース落とすなよ」

走ってる南方に抱きつこうとした安藤とそれを受け入れようとしていた南方に釘を刺す。その間に、神崎に尻を叩かれた柴田と、神崎はどんどん先に進んできた。

「分かってるって。それよりさ、どうなの？付き合ってるの？」

「別に付き合ってるねえよ」

「ええ。ほんとにく？休み時間とかいつも一緒に話してるしさ。それに中間テストのテスト週間も2人つきりで勉強してたじゃん？」

「休み時間に話してるのはシンプルに席が隣だからだ。中間テストの時は過去問があったからな、お前らの勉強会に行かなかっただけだ。実際、期末の時はお前らに教えてやっただろ？」

「ん。確かにそうだけど……」

「俺のことなんか気にせず、柴田の方行けよ」

「え?!な、な、なんでそこで柴田が出てくんの!？」

「?バレてないと思ってたのか？」

「ええー!?知ってたの?!」

「紗代ちゃん……。多分クラスの皆知ってるよ。……柴田君以外」

「え?!ほんと?!」

「ほんと」

「はあ……。私そんなに分かりやすいかなー?」

「うん」

「まあ、あれだけアプローチしてたら、誰でも気づくよ。それより紗代ちゃんがあそこまで頑張ってるのに気づかない柴田君はさあ……」

「だよね!酷いよね!でもそういう鈍感な所もちよつと可愛いんだよねあゝ」

「……………紗代ちゃんが幸せならそれでいいか」

「だな」

うつとりと女の顔をして自分の世界に入っている安藤を見て俺と南方は頷き合った。

10分くらい走った所でなんとか洞窟に辿り着けた。俺が何度か道を間違えそうになったけど、その度に神崎が正しい道に導いてくれた。

マジ神崎グツジョブ。

そして肝心の既に人がいるかどうか、については勿論、1番乗り。予想通りとはいえちよつと安心した。

急いで小屋と塔と洞窟本体のスポットを監視させ、俺は洞窟の入り口で一之瀬達が来るのを待った。

そんな時、ガサゴソ、と音を立て2人の男が草むらから現れた。

「やりましたよ、葛城さん！洞窟です！……て、あれ？なんだ！お前は！ここで何をしている！」

「は？なんだこいつ。別にここで何してようが俺の勝手だろ。ルール違反してる訳でもないし。」

「よせ、弥彦。……すまない。こいつも悪気があったわけじゃないんだ。許してくれ」「はっ。気にすんなよ、葛城。大したことじゃねえ」

「感謝する。それにしても、俺の名前を知っているんだな」

「Aクラスの派閥争いは聞いているからな。葛城派のリーダーさん？」

「そうか。初めてまして、だな。知っているみたいだが、一応。葛城公平、Aクラスだ。君の名前は？」

「服部晴秋。Bクラスだ」

「そうか、君がああの服部か。なるほど噂通りやる男だ。今回に関しては俺の方が少し遅かったみたいだな」

「まあ、まだスポットは取ってねえよ。ただスポット装置の目の前に人を配置してるだけだ。」

「スポットが欲しけりや、取っても構わねえよ」

「ふっ。みすみす自クラスのリーダーを教えるは折角スポットをとつても意味ないだろう。弥彦。ここは引くぞ」

「はいっす！葛城さん！」

そう言つて、葛城たちは去つていった。

1時間くらいして一之瀬たちが来た。スポットの見張りを適当な志願者に交代してもらつて神崎たちを洞窟内に呼び戻した。

念のため洞窟の外に見張りをつけて更に念を入れて洞窟の奥の方に行き、これからの

こと話し合う。

「じゃあ、まずは誰がリーダーになるか、だね！移動中、私なりに考えたんだけど、他クラスにあまり知られてなくて、かつ責任感がある子がリーダーに相応しいかな、って思ってるんだよね」

「うーん。なら一之瀬は無し、として……」

「神崎君は？」

「いいと思うよ！」

「俺としては服部にやってももらいたいぜ」

「俺も服部がリーダーに賛成だな」

「うーん。そもそも他クラスから服部君と神崎君ってどれくらいマークされてるんだろ？」

話的には俺か神崎かのどっちかがリーダーになることだろう。だが、ここで動き出すとして、いる人物がいた。俺はずっとその少女を注視していた。だからこそ、このタイミングで俺も動ける。

「あ、あの………私」

「お前ら!!」

白波の声をかき消すように。全体に俺の発言を響かせる。

「お前たちの意見はよく分かった。その上で言わせてくれ。リーダーは俺がやる」

俺の宣言にクラスが少しシーンとなる。一瞬後、沈黙を破ったのは姫野だった。勿論、俺の指示通りだ。

「まあ、いいんじゃない？服部なら責任感もあるだろうし、簡単に敵にバレるようなへまはしないでしょ」

「ああ、勿論だ。バレるへまなんでしねえよ。」

それどころかむしろ他クラスが誤指摘するよう誘導くらいしてやるよ」

そして誰かが喋る隙も与えず、俺は叫ぶ。

「てことで、リーダーは俺に任せろ。お前ら!!この試験絶対勝つぞー!!!」

「おおー!!!」

「え……あ……ま、待って……」

クラスの雄叫びによって1人の少女のか細く切ない声は掻き消された。

## 食料と水の工夫された入手法

リーダーも決まったため、俺たちは早速スポットの占有をすることにした。

「はい、服部君。これがキーカード」

星乃宮先生からキーカードを受け取る。キーカードにはしっかりと『ハットリハルト』と刻まれていた。

「うくん。でも、意外だな。まさか、服部君が自らリーダーをやる、って言い出すなんて」

「そんな意外ですか？」

「そうだよ！だって服部君。面倒ごとは全て一之瀬さんに押し付けてるでしょ！」

「……………いつ俺がそんなことしましたっけ？」

「なぐに、白ばつくてんのよ。中間テストの時は勉強会に参加しない、5、6月のCクラスとのいざごさも一之瀬さん任せだったじゃない！」

「いや、それは…………」

思ったより俺は一之瀬任せだったのかもしれない。まあ、今回は本気でクラスポイントもプライベートポイントも稼ぎに行くから許してくれ。

「でもよかつた。服部君のポイント履歴を見ると、てつきり2000万ポイントでAクラス目指してるのかと思っちゃったのよ」

「いやいや、そんな事無いですよ。俺はちゃんとこのクラスと一緒にAクラスへの成り上がりを目指してます」

「バーロー。2000万なんて大金、なんでAクラスに上がるのに使わなくちゃ行けないんだ。」

「それに先生。歴代に2000万ポイントなんて集められた人いないんですよ？」

「そうだけども。服部君ならなんとかしちゃうんだよね。だって実際、今400万ポイントくらい持つてるでしょ？」

「ポイントの半分が臨時収入ですよ。それより先生、試験について聞きたいんですが、リーダーは精神的な理由でリタイア出来ませんか？」

「二次創作あるのリーダーは仮病でリタイア出来るのか問題を聞いていく。」

「……………リーダーには責任が伴うわ。普通の生徒ならともかくリーダーは肉体的な理由でのリタイアには、一見して判断出来るような状態じゃなければ、メデイカルチェックを受けてもらう事になる」

「俺が聞いているのは精神的な理由です。慣れない生活で鬱になる、他クラスからの妨害でノイローゼになる、責任感に押し潰されて鬱になる、などの可能性があると思いま

すが」

「現代の科学では心理的に傷を負ってるかどうか分からないと思うわよ」

「……答えになってない気がしますが」

「私からはこれ以上答えられませーん」

ふむ。先生が言える範囲で俺にヒントをくれて、精神的な理由でリタイア出来ると暗に答えてくれた。そう考えていいだろう。これでも味方だしな。

それから俺たちはスポットを3つの占有した。洞窟、小屋、塔の3つだ。占有する時はまずスポットを周りで囲む↓誰かがスポットを占有するふりをする↓囲む人と占有したふりの人が入れ替わるのを繰り返し、俺の時だけ、本当にスポットを占有する。って感じだ。占有する時にいるメンバーは固定で俺、神崎、姫野、安藤、南方の5人だ。

「よーし、これで終わりだね〜」

「わざわざ悪いな、面倒事に付き合わせてしまつて」

「ホントよ。なんで私まで……」

めんどくさいそうに愚痴を言う姫野。それをニヤニヤしながら見る安藤と南方。何があつた？

「ふふふ、やつぱり信頼されてるからじゃなくい?」

「そうだよそうだよ!やつぱり本当は付き合ってるんでしょ?!」

「はあ!?!な、何言ってるのよ!?!つき合ってるから!!」

姫野が安藤と南方に押揃われる。すまん我慢してくれ、姫野。ちよつとだけ優秀な敵としてそこそこ歯応えがある凡人アピールにお前が必要なんだよ。

「お前ら、早く森で探索に行くぞ」

「はい」「おう」「はいはい」

神崎の指示に続き、俺たちは森の中へ入る。

森の中での仕事はスポット探し、食糧と水探しだな。他にも探索班は3く5人で7班くらい作ったから、上手く行けば他のスポットや大量の食糧が見つかるかも。

マニュアルからの生活必需品購入は一之瀬に任せてある。節約方針で無駄な物は買わないように言ったし、面白い工夫を見せてポイントを上手く使うことを期待してる。

「思ったよりあんまり見つからないねー」

「しょうがないよ、まだ探し始めて30分くらいだし」

食糧を探しているが中々見つからない。今のところマトと木の実、メロンくらい

だ。だが、ここで諦めるわけにはいかない。周りをもう一度よく見渡してみる。生い茂った草むらに、てっぺんが見えないほど高い木。スポットらしきものも見つけられない。食べ物も草むらの中に巧妙に隠されていることがあるからわざわざ草むらの中に食べ物があるか探さないといけない。クソ面倒だ。

空を飛べたら、簡単に食べ物なんか見つけれられるのに。そんな下らないことを考えてしまう。

………やばいな。変なこと考えてないで少しでも多く食べ物を探そうとした方が有意義だな。そう思つて俺はもう一度、木に実が成つてないか確認しようとして………

「あっ!!!」

「うっさ。………どうしたの?」

俺が大声を上げて、隣にいた姫野が迷惑そうにしている。

他の3人も俺の方に意識を向けてくれるしこれは言うしかないな!俺の発明を。

「神崎!あと、南方!お前らさ、木に登つて上から食べ物あるか確認出来る?怪我する可能性があるなら無理にしなくていいから」

「!なるほどな………!任せろ、それくらいならこなしてみせるさ!」

「またもや運動神経抜群の私の出番つてわけね!勿論任せよ!」

2人は意気揚々と木に登ってくれる。……南方登るの早くね？猿かよ。まあ、女の方が柔軟性とか高いらしいし、こういうのは得意なのか？

それからはすいすいと食べ物が集まって5人が抱えきれないほどの食糧が集まった。そこで神崎がジャージを結んでバックがわりにすることを提案し、集めた食糧を全て回収出来るようになった。俺たちは満足できる成果を持ってベースキャンプに帰った。

午後4時頃。洞窟に戻ったが、違和感を覚えて一之瀬へ話しかけに行った。

「なあ、一之瀬。なんでまだ物資が届いてないんだ？」

「ええつと……その。まだ明るいし、一応服部君に最終確認取ろうかなって……」  
それくらい別に俺に確認取らなくても勝手にやってくれていいのに……。少し申し訳なさを感じながら、マニュアルを見る。ん？

「なあ、これ。仮設シャワーじゃなくてウォーターシャワーの方がいいんじゃない？」

「あ、服部君もウォーターシャワーの事知ってるんだ。私も浜口君からウォーターシャワーの詳細を聞いたんだけどさ、水が簡単に確保出来ないから難しいんじゃないかなあ……と思つて」

「ここでベースキャンプを井戸にしなかつた弊害が出てきたか。」

「服部、一之瀬。話の途中悪いが、報告がある」

「ん？どうした？」

「なんだろう。良い報告であることを望む。」

「周辺にスポットと飲み水を確保出来そうな場所がなかったそう。このままだと一週間水を買わないといけなくなる」

「あちゃー。そつか。まあ、洞窟があるからテントは買わなくていいし、スポットも3つ取れるからそこはしようがないんじゃない？」

「そうだな。これくらいは妥協すべきか。一応、少し離れた場所に川は見つけたそうなんだが、既にDクラスが占有していたそう」

「ッ!!」

神崎の何気ない発言で俺はこの状況の打開策を思いつく。

「安心しろ。水はどうにかなりそう。とりあえず仮設シャワーはウォーターシャワーに変えて選んだ物資を購入しとけ。俺は今からDクラスに交渉しに行く」

俺は不敵に微笑み、そう言った。

川の上流に案内してもらった後、俺は星乃宮先生と2人で川に沿って下流に向かって

いた。数分歩くと喧騒が聞こえて来て、Dクラスの姿が見えてきた。星乃宮先生をDクラスから見えない所で待機させ、1人でDクラスの方へ向かう。

「ここは堂々と龍園エミュで行こう。」

「よう、不良品ども。久しぶりだなあ」

Dクラスの奴らが一斉にこつちを向く。

「へえ。良いスポット押さえてんじゃねえか」

「何の用かな。服部君」

平田がクラスを代表して聞いてくる。俺はDクラス全員を見渡すようにして、榎田と綾小路の様子を見た。綾小路は相変わらずの無表情。榎田は不安な様子のDクラスの女子に寄り添っている。うーん、流石天使。

「お前らにとつて美味しい話を持ってきた。要するに交渉だ。つても聞かせるのは代表者だけだな。平田、榎田。話を聞く気があるならこつちへ来い」

俺の言葉を聞いてDクラスがザワザワし始める。

「美味しい話ってなんだ………？」

「そもそも信用出来るの？」

「良い話なら聞いていいんじゃないの？」

「はあ？ 飲み水の事といい適当な事言わないでよね」

「適当ってなんだよ！それに今そのことは関係ないだろ!!」

「関係あるわよ！」

「2人とも落ち着いて！」

ガキかよ！つてツツコミたい。

「平田君の言う通りだよ。中間テストの時を思い出して。服部君の話にはきちんと私たちにも利益がある筈だよ！」

いいぞ榊田。いい感じに皆を誘導してくれている。

「待ってくれ。中間テストの時の様な感じなら、あいつから聞かなくても俺たちだけで『美味い情報』とやらに辿り着けるんじゃないか？」

「幸村君。『美味い話』だから情報とは限らないよ。一旦私と平田君でその話を聞いてみて、私たちに利益が無いと思ったら交渉を断る、つて感じでどうかな？」

「……………そうだな。分かった俺は榊田の案に賛成する」

こうして榊田による巧みな誘導が成功しようとした時……………

「待ってくれないかしら」

「……………どうしたのかな？堀北さん」

「あなた、私たちを誘導しようとしてないかしら？」

おっと？ さつきとは違う意味でまたザワザワとした空気になる。

「ごめん堀北さん。何を言ってるのか全く分かんないや」

「そうだけ、堀北ちゃん。桔梗ちゃんがそんな悪巧みみたいなことするわけじゃないじゃん？」

「……………それもそうね、何でもないわ。気にしないでちょうだい」

なんか榊田に違和感を覚えたのか？

てかそれなら警戒されないように黙ってて、決定的な証拠を掴みに行った方が良かった気じゃないか？ いやワザと言う事で圧をかけようとした？

今気にしても仕方ないか。

特にこのまま榊田に反対意見も出ず、平田と榊田の2人が俺の方に来た。

「ハッ。話を聞くかどうかでこんなにも時間がかかるとはな。まあいい。具体的な話をするぞ。ついてこい」

そう言っただけ歩いて星乃宮先生の所へ行く。

「ヤッホー」

一瞬だけ「げ」って顔をするが、すぐに取り繕う榊田。確かに星乃宮先生って榊田と似てるし、同族嫌悪とかで苦手そうなタイプだ。

「……こんにちは！星乃宮先生」

「うんうん！ 櫛田さんは今日もかわいいね〜」

「そんなことないですよ！ それより先生の方が綺麗で大人って感じがしますよ！」

「ええ〜。そう〜？」

なんか怖い。よく分からんけど怖い。

「それで服部君。話って何なのかな？」

平田も同じ事を思ったのか俺に話を振り、女のバチバチとした会話を中断させる。

「簡単な取引だ。俺がお前らにBクラスのリーダーを教える。その見返りとして、お前らはBクラスに川のスポットを使用する許可を出す。それだけだ」

「リーダーって……………本気かい？」

「当たり前だろ。言つとくが今俺のポケットにはキーカードが入ってる。嘘はつけねえよ」

「服部君……………本気なの？」

「ああ。ただし、もう一つ条件がある。この契約を試験終了まで誰にも漏らさないこと。勿論、クラスメイトにもだ」

「で、でもそれだと皆が納得出来ないかもしれない……………」

「それでも無理矢理納得させる。俺たちがお前らのスポットで急に釣りとかしだしても何も言わせるな」

「服部君から教えられたリーダーの名前を皆に言わないでくれ、と言うならまだわかる。でもどうして契約内容も言ったらダメなんだい？」

「理由はシンプルだ。俺がクラスを売ったつてのを他クラスに少なくとも試験終了まで知られたくない。ついでにこれはお前たちのためでもある」

「どういうことかな？」

「龍園たちCクラスに俺がDクラスにリーダーを教えたって知られてみる。あいつなら平気で暴力を振るつてでもお前からBクラスのリーダーを知ろうとするぞ。……実際にDクラスの奴らがリーダーを知っていてもいなくてもが関係ない」

「いくらCクラスでもルールを破つてまでペナルティのリスクを負つてまでそんなことしないんじや……」

「ここは無入島。監視カメラは全然ない。証拠なんて滅多に出ないぞ。……まあ、詳しい奴に聞けば早いだろ。榎田。お前Cクラスとも仲がいいやつ多いよな。実際の所どう思う？Cクラスの連中はペナルティを恐れて暴力を振らないと思うか？」

「平田君。正直、服部君の言う通りだと追う。Cクラスの子たちが私たちに暴力を振る可能性は全然あると思う。だから、この契約は皆に教えない方がいいかな」

「分かった。榎田さんがそう言うなら……」

「まあ、俺たちも川の上流の方を使わせるし、なんなら何かしらの契約をしたつて事実と

その結果俺たちが川を使っていいことになったつてのは言ってもいいぞ。俺がバレたらまずいのはクラスを売ったつてことだけだからな」

この後、星乃宮先生の下で以下の契約が行われた。

『1. 服部晴秋は平田洋介、櫛田桔梗にBクラスのリーダーカードに刻まれたリーダーの名前を見せる

2. 1の見返りとしてDクラスは川のスポットを占有中、Bクラスに川のスポットを使用する許可を与える

3. 1の内容を試験終了まで平田洋介、櫛田桔梗の2名は誰にも教えてはならない』  
 はあく。無事済んでよかった。ついでにだけど、ここで1の内容を『BクラスはDクラスに洞窟の使用を許可（洞窟内での寝泊まりの許可）する』とかにすると一之瀬が好きそうな正攻法の中の工夫、って感じになる。

原作でBクラスは井戸だったが、これを使ってAクラスから洞窟での寝泊まりを許可してもらつて、ポイントの出資を抑える（Cクラスより早くAクラスと交渉する必要がある）とか、Dクラスが川の水を飲むかどうか揉めてる時に颯爽と現れ、井戸水を提供する代わりに20ポイント分くらいの物資を提起してもらおう（普通なら無理そうだけど一之瀬のコミュ力ならいける。むしろここで無敵のコミュ力を発揮しないでどうする）、とか色々出来たと思う。

ルールの穴を利用する裏の様な戦い方じゃなくて、ルールの中で最大限工夫する。今は無理でも将来的に一之瀬にはこれくらいのこととは出来てもらわないと困るぞ。

一之瀬の将来に期待しながら、俺は星乃宮先生と洞窟へ戻った。

## 1日目終了（表）

櫛田、平田との取引を終えた後、洞窟に戻ると人集りができていた。

「おっす。どうしたの？」

「あつ！服部君おかえり。えつと、ね。Cクラスの金田君つて人が来てて……」

南方が教えてくれた。

ああ、なるほど。スパイか。

俺は人集りの中心に突っ込んでいって一之瀬に声をかける。

「一之瀬」

「あつ服部君。あのね……」

「南方からもう聞いている。追いつ返せよ」

「えっ？」

「金田が来たんだろ？何の用だよ、お前」

俺は金田を睨みつける。敵意丸出し。何かしたらブン殴る。そんな雰囲気演出する。

「実はクラスのある人物と方針が別れたんです。そのせいで殴られてクラスを追い出されてしまつて……。クラスに居ずらいのでここにいさせてもらえませんか？ 勿論、雑用でも何でもします！」

金田は頬を押さえながらそう言った。頬は赤く腫れている。よく見ると爪の間に土も入っている。

「皆どうかな？ 入れてあげてもいいんじゃないかな？」

俺のせいで悪くなつた雰囲気を一之瀬が頑張つて変えようとする。ごめんね。もうちよつと続けさせてもらうよ。

「黙つてろ。いい訳ないだろ」

俺は一之瀬に強く言葉を返す。誰かが喋ろうとすると俺はそいつを睨みつけて黙らせる。

俺がクラスを支配している、そう見える状況を作つた。

金田は俺を攻略しないとスパイ活動は難しい、そう判断してくれただろう。

しばし沈黙の後、金田より先に一之瀬が言葉を発した。

「でもさーほらー金田君がここにいたらCクラスは点呼ごとに5ポイント減らされるよね？ そう考えたら私たちにも得があるんじゃないかな？」

俺は逡巡したふりをする。答えはとうに決まつてる。

「30万ポイント」

「えっ?」

「俺に30万ポイント渡せるならお前が洞窟で生活することを許可してやるよ」

「ちよ!それはズルくね?!俺もポイント欲しいんだけど!」

柴田が発言する。ありがとう。こいつのおかげで俺が作ってしまった険悪な雰囲気  
が少し柔らいだ気がする。

俺はニヤリと笑ってクラスメイトに言葉を返す。

「分かってる。ちゃんとお前らにもポイントやるよ」

「「おお……………」」

よし。これでBクラスの殆どが金田がポイントを払えば迎え入れる、という選択肢を  
望むようになった。

「どうする金田?大人しくポイントを払うか?それとも居心地の悪いクラスに帰るか  
?」

金田が一之瀬の方を見る。ばーか。一之瀬もただのお人好しじゃねえぞ。今ここで  
お前を無料で迎え入れたら、クラスからの不満が溜まる。クラスとお前どっちを取るか  
なんか聞くまでもない。

「……………分かりました。ポイントを支払います……………ただ……………」

「あ?なんだ?」

「自分30万ポイントも持っていないくて、5万…いや、10万ポイントなら払えるのです  
が……………」

おつと?何を言ってるのかなあ?笑

「おお?!10万ポイント?!低すぎねえかあ?こっちはお前の衣食住を保証してやるんだ  
ぞお?なあ?!柴田!!ありえないよなあ??礼儀として30万ポイントぐらいは払うべき  
だよなあ?!」

「いや……………俺は別にそこまでは……………」

「神崎—!あり得ないよなあ!」

「勿論だ!!俺はCクラスが6月にBクラスへ行つた非常識で最低で卑劣で醜悪で残酷な  
行為を忘れてないぞ!!なあ?!皆!!」

いやそれは盛り過ぎだろ!

「確かに……………」

「30万は当たり前だな」

「6月のこと考えたらむしろもつと貰つてもいいんじゃない?」

「40万とか?!」

「いいね！それ！」

人は大義名分と金の前では無力だなあ。

「さあどうする？金田。大人しく40万払うか？それとも1週間野宿するか？」

「えっ？なんで10万増えて……」

「おいおい勘弁してくれよ。あの時承諾しなかったお前が悪いだろ。物の価格つてのは常に変動するもの。違うか？」

「」

あーあ。茫然自失、つて感じの表情だな。大丈夫？ここ敵地だよ。

「んんー？どうすんの？野宿する？蚊とか虫とか日光は大丈夫？食料は？水は？寝床は？テントなしで寝るの？クラスを離反したらしい君には全部解決不可能な問題だよね？」

「っー！」

ちよつとは勉強できるお前なら分かるだろ？

お前がBクラスのリーダーを知るにはスパイとして内に入るか、俺たちが占有している塔が見える場所に張り付くか。それくらいしかない。どちらにしろ俺たちに警戒されたら全て終わりだ。後者を選んで近くにテントや食料を用意するなんて間抜けは出来る筈がない。つまり本気のサバイバルしかあり得ない。龍園じゃないんだ。そこま

で覚悟してないだろ？

「逆に考えろよ。金さえ払えば衣食住は保証する、つて言ってるだろ？まあ、逆に言えば無料でお前を受け入れることは絶対ないけどな」

「お願いします！40万なんて大金持つて無いんです！10万まだならなんとか！どうか僕にご慈悲を！」

助けを求めるその目は一之瀬の方を向いていた。良くないよ本当に。一之瀬が何か喋る前に俺は言葉を発し一之瀬を遮った。

「安心してよ金田く〜ん。一括で払えないっただけでしょ？リボ払いつて知ってる？」  
「えっ、リ、リボ払い？」

焦りからか金田の額から汗が流れる。なんせ星乃宮先生でさえ恐怖する凶悪な一手だ。ん？恐怖？引く、とかじゃなくて恐怖？

「冗談だよ金田。普通に利子なしの分割でいいよ」

惨めな金田に救いの糸を垂らす。安心してくれ。俺も流石に高校生から金の取り立てなんかやるつもりはないから。……………多分。

星乃宮先生がほっと息を漏らすのが見えた。今まで見たことないレベルの安堵の微笑みだ。もしかしたらリボ払いにトラウマがあつたのかもしれない。いや、先生の為にもこれ以上考えるのは止めそう。うん。

俺とBクラスの圧力からここが潮時と判断したのか金田は諦め、俺たちに合計40万ものポイントを払うことを選んだ。

その後、星乃宮先生の下、詳しい契約をして

・金田悟は服部晴秋に 9月1日から月の1日ごとに20か月間2万ポイント払う

・無人島試験終了までBクラスは金田悟がBクラスのベースキャンプで生活すること  
を許可し、必要最低限以上の衣食住を保証する

・金田悟はBクラスの指示に従い、労力面でBクラスに貢献するし、法的に許される  
範囲でBクラスの指示に従う

この3つが決まった。そして口約束でこのポイントを皆に分配することも決めた。

この後、暗くなるまで食料探しと薪木探しをした。釣り組と合わせて今回の食糧はそこそこ取れたらしい。それでも初日は水と食料を合わせて買うことになった。Dクラスと交渉したのに水を買ったのはペットボトルが必要だし、食料は純粋に1食分に届かなかった。

夕食中、神崎と話し合う。今は2人つきりだ。一之瀬は勿論、姫野でさえ他の女子達と楽しそうに食べている。

「この試験、どんな感じ？」

「どう、と言われてもな。突然の事が多すぎて困惑ばかりだ」

「そうか？ それにしては十分上手くやってると思うけどな」

「そんなことはない。それより聞きたいんだが、結局金田を迎え入れた良かったのか？」

「ハハッ！ マニユアルを見てみろ」

俺は手元にあつたマニユアルを神崎に渡す。

「マニユアルのリーダーに関する記載の所だ。『リーダーは正当な理由なく変更出来ない』って部分」

その部分を見せるが、神崎はピンとこないようで俺に「どういうことだ？」と聞いてくる。うーむ……。どうやって教えようか。

「せっかくなら、クイズみたいにしようか。そこからこの試験の抜け穴に辿り着いてみてくれ。期限は俺が食べ終わるまでな。ついでに思いついた疑問点は些細なことでも聞いていいし、部分的に答えに辿り着けばその時点で分かった内容を教えてくれ」

「ああ、分かった。リーダーは正当な理由なく変更出来ない。つまり逆に言えば、正当な理由があれば変更出来る、ということか……………」

「いいね。じゃあ、具体的にその正当な理由とは？」

まあぶつちやけ、リーダーが変更出来る、って事実自体は誰でも分かる。問題はこの正当な理由そのもの。

十分くらい考え続けて神崎がついに口を開いた。

「ポイントで正当な理由を言うってのはどうだ？」

早くも神崎が考えを巡らせてアイデアを出したことに、ニヤリと口角が上がる。

「へー、いいじゃん。悪くない答えだ。ただ問題は値段だな。俺も先生に聞いてないから分からないが百万単位のポイントが必要だろうな」

「先生に聞いてない？なら、服部は別のやり方を想定してるということか」

「ああ。ついでに言っておくがこっちのやり方だともう少し安く済むぜ。まあ、安く済むと感じるかどうかは時と場合、人によると思うけどな。俺の場合は、こっちのやり方の方が安くなると感じたな」

「なんだ？そのややこしい言い方は」

要するにクラスポイントとプライベートポイントの優先度やレートは人や状況によつて異なる、って話だ。

「それも考えてみる。……と言ったものの、やっぱややこしいかもしれないし、忘れていいよ」

「あのなあ……………」

「あはは」

呆れられながらジト目で見られる俺は苦笑いで返すしかないのだった。

十数分考え続けていたが、どうやら答えが出そうに無さそうだな。これは俺が食べ終わる方が先だな。

「どうだ神崎？ もう食べ終わっちゃうぞ」

最後の一口を見せながら、神崎に問いかける。

「分かってる。……………悪い。降参だ……………」

「オツケー。答えは『リーダーのリタイア』だ」

「！そうか……………！リーダーは必ず一人いなければならぬ。リーダーのリタイアは新しくリーダーを作るための正当な理由になるのか！」

おおく！理解早いねえ。

「そういうこと！だから俺たちは金だけ貰ってラッキーってことだな」

これでリーダー交代の話が済んだけど、まだなにか話とかないといけないことあった気がする。なんだっけ。

「あ、後！合図とか決めとかないか？金田とポイント交渉する時やり辛くて仕方なかったぜ」

「いいな。一之瀬たちも呼ぶか？」

この後一之瀬や姫野も交えて色んなことを話した。話せない時用の合図も決めた。その後結局、一之瀬が居たので周りに人が集まって来て、クラスで表立って出来る話……夜警の当番や労働の管理、ローテーションシフトも作ったりした。

出だしとして悪くない1日だったと思う。

まあ、まだ1日目は終わってないけどな。

じゃ、暗躍といきますか。

## 1日目終了（裏）

急な試験による疲れで早めに寝ることになり、もう既に殆どの人が寝静まった夜の10時。

俺はこっそりと洞窟を抜け出し、試験開始時に船から降ろされた浜辺に来ていた。

「おーす。Dクラスはどんな感じ？」

「どんな感じ？じゃないわよ!!この根暗インキヤをスパイにしたとか聞いてなかったんだけど?!」

綾小路と榎田だ。綾小路は相変わらずの無表情。逆に榎田の方は普段の姿からは想像出来ないほどの荒れっぷりだ。

「まあまあ、落ち着け。ところで綾小路、実は聞きたいことがあるんだけど……」

「榎田のスパイ適性だろ？俺がスパイだと明かした瞬間はかなり疑ってたし知らないふりしていたが、鎌をかけたら簡単にポロ出したぞ」

え、うん。いや聞きたいことは合ってるんだけど。マジかこいつ。

「マジかー。いや想定通りではあるんだけど。とにかく助かったわ」

「後、これからはああいう手のやり方はやめてくれ。気づくまで時間がかかったし、それ

までのやり取りがかなり面倒くさかった」

綾小路がうんざりしたような声でそう言う。

「悪かった。もうしない」

「は？ どういうこと？」

状況が読めてない榎田に説明をしていく。

今回、俺は榎田にあえて綾小路がスパイ（実際は対等な協力関係）であることを隠した状態で、綾小路に榎田と一緒にここに連れてくるように頼んだ。

それによって榎田が偽のスパイが現れた状況に対応出来るか測ろうとしたわけだ。結果としては、しつかり言い含めて必要があることが分かった。

ついでに清隆にも榎田のスパイ適性を測るつもりだとわざと伝えなかったことで、綾小路の判断力も同時に測ろうとした。結果は惨敗。榎田のことを測ろうとしたことで、けじめなく綾小路のことを測ろうとしたことまでバレた。こいつマジで底が見えねえ。

「つまり、だ。これからは新しい部下が手に入ったら必ずお前に伝える。だから、お前が知らない部下なんて存在しない。騙されないように気をつけるよ」

主に龍園とか坂柳の部下がスパイの振りとかしてくるかもだから。

「というところで臨時の部下が入ったから一応伝えとくな。Aクラスの坂柳派筆頭の橋本と神室がこの試験だけ協力してくれることになった」

「え？」

榊田も綾小路もよく分からないって感じの表情。いや綾小路は無表情だな。

「どういふこと？」

「今回の試験で参加出来なかったのって坂柳なんだよ。だから、この試験は葛城が指揮を取る。坂柳は葛城派を失脚させる為に。俺はポイントを稼ぐ為に。利害の一致で橋本と神室をこの試験だけ自由に使えるってわけだ」

「あーなるほどね。というか、どいつもこいつも腹の中真っ黒で嫌になるんだけど」

「坂柳派、葛城派っていうのは？」

お前そこからか。綾小路よ。

「えーとね。今、Aクラスは葛城派と坂柳派っていう2つのグループで対立してるの。同じクラスなだけで保守派と革新派みたいな感じで折りが合わないんだよ」

いろんな交友事情に詳しい榊田が説明してくれる。

「なんで坂柳はこの試験に参加してないんだ？葛城派を蹴落とす為にわざとか？」

「いや、坂柳さんは体が弱くて本当に参加出来なかったんだと思う。運動も出来ないみたいだし、無人島サバイバルなんてなんじゃないかな」

「なるほど。助かった。で？そのスパイはオレたちに関係あるか？」

「いや、ないな。あくまで一時的なスパイだ。一応、報連相したただけでお前らは一切関わ

る必要はない。むしろ関わるな」

これで無人島試験が終わって神室たちに「服部が櫛田と綾小路をスパイにしてみました！」なんて報告されたら溜まったもんじやない。

「分かった。後でAクラスのリーダーを教えてもらえる、くらいに考えとけば良いんだな？」

「おう。理解が早くて助かる」

まさにそうしようと考えていた。流石綾小路といったところか。

「む………」

なんだ？ 橋本たちについて話し終えた所で櫛田から強烈に睨まれる。特に何か話すわけではなく、じーっと俺の方を見てくるだけだ。不満？ もしくは怒り？ どっちかは分からないが負の感情を感じる。俺何かやらかしたかな。

「ど、どうかした？」

「あのさ、まだスパイとか作るつもり？」

「えっ………？」

「今回は一時的なものかもしれないけどさ、また別にスパイとか増やすつもりなの？」

少し予想外の質問に戸惑う。

ええ……？それ重要か？手に入れたら話すって言ってるんだから今のお前には関係なくない？

一旦、質問に答える為に思考を回す。次スパイを手に入れるとしたら……、Aクラスなら橋本とか神室をそのまま取り込む、適当にCクラスから龍園に不満持つてそんな奴とか他には……、優秀らしい松下とかも候補か？と言つても全部これからの状況で決まるし、今は何とも言えんな。

「まあ……状況に応じて作るかもしれないな」

「私で良くない？」

「は？」

「だ・か・ら！私で良くない？むしろ私以外いらなくない？」

「なんで？」

「だって私がいれば他クラスの情報だつて手に入るし。そもそも私だけが服部君の役に立つていうか特別つて言うか。いや、特別つていうのは別にそういう意味じゃないけど。まあ？服部君が望むなら仕方なく、仕方なく服部君の特別になることも藪坂では無いというか、許可してあげるというか、悪くないというか、ギリギリ許容できるというか、ちよつとアリかもつていうか、不束者ですがこちらこそつていうか」

「ごめん、ちよつと早口過ぎて何言ってるか分かんない。要約して」

「っ!!その、アレよ!えーっど……。そう!!他クラスのスパイなら兎も角綾小路とか何の役にも立たなくない?って話!」

え、そんな話だったのか。思ったより核心付くな。綾小路の実力ばらすわけにもいかないし。いや。なんて答えよう。

「いや、ほら。綾小路はアレだ。そう!使い捨ての駒だ!」

あ、ミスった。テンパってとんでもない事言ってしまった。すまん綾小路。フオロー頼む。

「ああ。オレは使い捨ての駒だ」

いや同意すんのかい!

「そっか。使い捨ての駒か」

「そうだ」

「そうだな」

「……………」

沈黙!そらそうよ!自分から駒宣言する人間への対応なんか知らんもん。いや、ミスった俺も悪いんだけど。

「ならさ、適当に私も何か命令していいの?」

「いやそこは服部を通してくれ」

「えー！服部君。私もこいつを自由に酷使したいんだけど。ダメ？」

唐突な上目遣い。最強の不意打ち。可愛いすぎる。だが、

「すまん。それはダメだ。許してくれ」

お前が綾小路に命令して変に機嫌損ねてみる。怖すぎて死ぬるぞ。

「これでもダメかな？」

そう言つて榊田は俺との距離を詰めてきた。やばい。近づいてゼロ距離だ。今にも触れそう、いや触れてるな。俺の胸から腹の辺りを左手でなぞるように撫でてくる。それはエロいって……！あ、目が合った。吸い込まれそうな瞳が俺を魅了する。Dクラスの連中は毎日のようにこんな美少女を眺められるのか。榊田が更に顔を近づけてくる。ヤバい。近すぎるって。恥ずかしくないの？ いや、榊田の顔も赤い。本当は恥ずかしいのにこんな顔近づけようとするのか。すげーかわいい。更に距離が縮まる。もうキスしそうだ。いやしよう。俺は目を閉じ、唇を……

「おい。そろそろ試験の話をしてないか？」

邪魔すんなやあ！クソの小路！空気読めやあ！

「チツ!!あーもう折角勇気出したのに……。ふざけんなよお……!!」

え、待って。榊田さん。あれ？何その舌打ち。本当はハニトラだったのか？ 何？

もしかして俺を嵌めようとしたの？ 綾小路はわざと空気読まなかったとか？  
……………そんなわけないか。

「そうだな。じゃあ試験の話をしよう。何から擦り合わせる必要がある？」

取り敢えず綾小路の言う通り試験の話に切り替えよう。

「あー。櫛田と平田とした取引って結局なんだ？ 2人とも口を割らないせいで幸村は俺たちを信用してないのか？」とか言い出すし、3バカも騒ぐしそれに女子が対立的になるので、クラスを抑えるのが大変だったんだぞ」

「ああ……………。悪い悪い。あの契約はお前からDクラスが川の水をBクラスに使わせる代わりに Bクラスがリーダーを教える、って内容だ」

「……………リーダーを入れ替える気か？」

「そういうこと。だからBクラスは指名すんなよ」

原作通り綾小路は茶柱に脅されて、ポイント稼がないといけないらしいからな。

「えっどういうこと？ リーダーって変えられるの？」

綾小路がチラツと俺の方を見る。お前が話せ、ってことだろう。

「正当な理由がなければリーダーは変えられない。裏を返せば正当な理由があればリーダーは変えられる。リーダーがリタイアするのは正当な理由に当てはまるだろ？」

「は!?!なにそれ気づいたもん勝ちのクソゲーじゃん!!」

まあ、そうだな……。4月までの授業態度といい過去問といいこの先の優待者試験と  
いいこの学校気付いたもん勝ちみたいな所はあるな。

「あー。でも納得したわ。だから私たちにリーダーカード見せたわけね」

「そういうこと」

「うわっ。もし知らなかったら、大事な水資源を取られてその上クラスポイントも減ら  
されてたつてこと？ゴミじゃん。性格悪っ！」

「いや、性格悪いのはこんなルール作った学校側だろ」

「いやいや、その性格悪いルールを利用する奴も性格悪いよ。まあでも、心底敵じゃなく  
て良かったと思ってるわ」

「ていうかさ、綾小路君もリーダーが入れ替えられることに気づいてたの？」

「いや、実際に気付いてたわけじゃない。『リーダーは正当な理由なく交代できない』つ  
て言葉に少し違和感を持っていただけだ。服部の話を聞いて当てずっぽうで言ったら  
当たったんだ」

「ふう〜ん……」

榊田に納得してなさそうな目を向けられる綾小路。多分演技だろうけど、たじろいで  
る。おもしろい。

助けてくれ、と言った感じで俺の方を見てくる綾小路。仕方ないな。話を変える、い

や戻してやるか。

「そろそろ作戦の共有に入りたいんだけどいいか？まず聞きたいんだけどさ、お前からDクラスのリーダーって誰？」

「クソ堀北」「堀北だ」

「ここら辺は原作通りか。面倒くさいけど綾小路がいる以上何とかなるだろう。」

「じゃあ、櫛田は明日堀北のキーカードを俺の所に持ってきてくれ。やり方はそうだな。他クラスにバレずらくするためとか何か理由を付けて堀北のキーカードを複数人で管理する体制を作って、明日お前がキーカードを管理出来る時間を作ればいい。綾小路はそのサポートな」

「分かった。けど、服部君はそのキーカードをどうするつもりなの？」

「俺の策略としてはキーカードの情報をAクラスに売るつもり。だからキーカードをカメラで撮ることが出来たらそれでいい」

「もしかしてオレたちにもリーダーを変えさせるつもりか？」

「？そっただけど？」

綾小路の反応に違和感を覚えたが、その違和感はすぐに解決した。

そういうえば、こいつは始めから堀北をリタイアさせる戦略を立ててた訳じゃなかったな。

「別にいいだろ30cくらい。ケチケチすんな」

「別にポイントをケチったわけじゃない。分かった。こっちの戦略もお前に合わせる」  
「おうありがとう」

というわけで綾小路の了承も得たから、最大限Aクラスを嵌めれるぜ。

「あ、そうだ。明日堀北のリーダーカード手に入れたら、どこに持っていけばいい？」

あー。考えてなかった。どうしようか。こんな広大な森の中上手く会えるわけなしなあ。でもこんな見晴らし良い砂場で真っ昼間に落ち合うわけにも行かないし。

「なら、うちのクラスのベースキャンプ近くにある小屋まで来てくれるか？多分うちの洞窟に来て上手い具合に頼めば、案内してくれると思う」

「えつと…。まずそのBクラスの洞窟の場所が分からないんだけど」

あらマジか。手間だしリスクもあるが、俺の方から行くか？と考えていた所で綾小路からの助け舟が来た。

「ならオレが案内しようか？今日探索で洞窟を見つけたから場所分かるぞ」

「そっか。なら近くまで案内してくれると助かるかな」

近くまで？別に一緒に来てでもいいんじゃない？

と思っただけど、まあ些細なことか。別に気にする必要ないな。

「んじゃ、そういう感じで大丈夫か？」

「明日以降もここに集合か？」

んー。いや別にそんな小まめに報告し合うこともないだろうな。

「取り敢えず、6日目の夜にここに集合することだけは決定で。それ以外で伝えたいことが出来たら、偵察と称して相手のクラスに行く。そしたらその日の夜10時くらいにここに集合ね」

「緊急性の高い出来事が起こったら？」

「その時は相手クラスの偵察に行つて『また〇時くらいに来るかもしれない』つて伝えてその時間にここに集合することにしよう。もしくは、相手が来るまで待つて個人的な相談つてことにして普通にこつそり話すのもありかもな」

ここまで決めとけば流石に大丈夫でしょ。

取り敢えず现阶段で出来る話は済んだと思つたが、そうじゃないらしい。

「こつちも幾つか報告と聞きたいことがある。Cクラスの伊吹つて女がDのスポットに来たんだが、そつちにもCクラスから誰が来たか？」

あー。対Cの擦り合わせね。原作知識がある身としてはあんまり気にする必要を感じないけど。

「こつちには金田つて奴が来た。うちは衣食住を提供するつて条件でポイントと労働力を払う契約を結んだんだ」

「なるほどな」

「BとDに1人ずつ送るとか露骨すぎじゃない？ やっぱスパイだよな」

「多分な。まあでも、こっちはリーダー変えるつもりだからスパイなんてしても意味ないけどな。無駄な努力ご苦労様って感じ」

「あはは。性格悪っ！」

「だってそうだろう？ 意味ないじゃん」

「そうだけどさー。それで相手から金取って働かせるなんてやっぱり性格悪いよ」

むむ。否定し切れない。でも、こっちは誰かと違って過去に学級崩壊なんて起こしてないんだぞー！

「まあ、状況は把握した。リーダーを変える前提で動く以上伊吹や金田がスパイでもそこまで気にする必要性はないな」

「おう」

「ただ、他クラスにリーダーを変えられる可能性に気づかれないように立ち回るべきだろうな」

「それは同感。こっちはこっちでそれっぽくカモフラージュするからそっちも適当によろしく」

「うん」「ああ」

こうして今度こそ完全に話し合いも終わり、自クラスのベースキャンプに向かうために2人は森の中に消えていった。

俺？ まだいるんだよなあ。会合相手が。

## 今度こそ1日目終了

榎田と綾小路がいなくなつて約1時間半後。ガソゴソと草の根を分ける音が聞こえてきた。そちらに目を向けると出てきたのは橋本と神室。

眠い。待つ時間も長かった。もう少し早い集合時間にするべきだった。

「やっほ」

「おう服部く。眠そうだな」

「俺みたいな真面目で優しい優等生はもう寝てる時間だからな」

そう言ったが、俺は普段これくらい時間でも起きてることは少なくない。なのにこれだけ眠いということは、おそらく初めての特別試験で疲れているんだろう。そんなつもりは無かったが、知らずの内に緊張してるのかもしれない。俺の進退にも関わる大きな試験だし。

「暗躍なんてものしようとしてるお前が真面目で優しい優等生なのかは置いとくが、俺らも眠たいしさっさと終わらせようぜ」

「どうやってAクラスを負かす気か知らないけどちゃんと考えてるんでしようね?」

「そりゃ勿論。むしろお前に聞きたいが、どれだけAクラスが被害を被るか分からない

ぜ。実行する覚悟は出来てるんだろうな？」

「別に。ただあいつの命令だから仕方なくやるだけ」

「そうか。お前は？」

無責任な態度の神室に心の中でイラつきつつ、橋本に尋ねる。これはただの確認だ。今さら駄々こねようが事前の契約で縛ってある。だが、たとえ強制だったとしても、改めてこいつら自身にクラスを裏切る選択を取らせることに意味がある。

「そりゃあ、勿論。覚悟は出来てるぜ」

本心とは思えない薄っぺらい覚悟を見せられる。こいつら……。絶対後悔させてやるからな……。後で泣いても知らないぞ！

「まあいいか。じゃあ、早速Aクラスを墮とすための準備を始めろ。まずはAクラスのリーダーを教えてください」

現時点でAクラス視点での大きな原作改変はない筈だが、万が一の可能性がある。それにこの試験の性質上、Aクラスのスパイを使ってAクラスを蹴落とすというのなら、リーダーを聞くのが自然の流れだ。俺が知らないはずの原作知識の整合性を合わせることは大事だからな。

あえてここで聞かないことで他にスパイがいるように見せかけるのも面白そうだけど。ご自慢の洞察力で自クラスにスパイがないことを知った坂柳が困惑する様子は

見てみたい。

まあ、やらないけどさ。思いがけずに新たなスパイを手に入れる事が出来た場合に足枷になる可能性がある。

「リーダーは戸塚弥彦ってやつだ。知ってるか？」

ちゃんと原作通りっぽいな。ちよつと安心した。

「勿論。葛城の腰巾着だろ？」

「ああ。能力的には大したことないんだが……おそらく俺たち坂柳派を警戒して葛城の一番の側近である戸塚にやらさせたんだと思う」

「なるほど。じゃ、リーダーは分かったし次だ。今試験のAクラスの各派閥の状況を教えてくれ」

俺の目論見通りに行っているのか。その確認だ。

「……その前に今のAクラス自体の状況を伝えてもいいか？」

「分かった。ならそこから話してくれ」

ん？ Aクラス自体？ 何があつたんだ？

「実は、Cクラスの龍園が契約を結びに来た。

内容を簡単に説明すると、『CクラスはAクラスが求める物資を上限200ポイント分まで提供し、その対価としてAクラスは坂柳を除き毎月2万ポイントを龍園に支払

う。更にCクラスはB、Dクラスのリーダーを知りその証拠を掴んだ時、その証拠をAクラスに提供する』という感じだ」

なんだ。ただの龍園の話か。俺の中で当たり前のことすぎて、他人からどう見えるかを考え忘れていた。

だが、改めてこの契約を聞くとどう考えても葛城に寄り添っていることが分かるな。おそらく龍園はここでプライベートポイントとクラスポイントの両方を得つつ、葛城派を躍進させて坂柳を抑えるつもりなんだろう。マジで成功した時のリターンが大きいな。

確か原作では葛城が龍園に対して、『よくも騙したな！学なし！蛇！Tレックスに喰われろ！』みたいなこと言ってた気がするが、むしろ逆だったんだろう。あの時龍園は、『ククク、知らねえよバーカ』みたいなことを言い返してたはずだけどマジで言葉通りに、知らねえよ裏切つてねえよ って感じだったんだろうな。もはやギャグだろ。

「プライベートポイントを払うとはいえ、今回私たちはポイント消費することなく試験を終わらせられる。これで本当に葛城派を墮とせるわけ？」

「ハッ！ 問題ないな。むしろその契約は葛城を墮とすのにありがたい存在だ」

わざわざ言うつもりはないが、この契約はAクラスを墮とすためだけでなく俺の利益のためにも効果的だ。

「ならいいけど。で、具体的にはどうやるわけ？」

「だからまずその前に各派閥の状況を教えて欲しいんだが……」

「ああ。そうだったな。龍園に対する説明が濃くて忘れてた。悪い悪い」

ヘラヘラと笑いながら橋本がそう言った。忘れんな。

「そうだな。まず坂柳派は今回、坂柳がいなくて葛城が指揮をとってるせいでそこそこ機嫌が悪いぜ。表面上は取り繕ってるし、試験だから一応の協力はしてるけどな」

「ほうほう」

上機嫌に俺は相槌を返す。なんか想像以上に都合がよさようだぞ？

「んで、葛城派は逆に調子乗ってるな。戸塚なんかは露骨で、それ以外も戸塚ほどじゃないんだが、幅利かしてるような感じだぜ」

「能力的には？誰が活躍してるとか、葛城以外で指示出してるとか、ある？」

「え〜……つと、そうだな……。そういえば全体的に葛城派の奴らがサバイバル知識が豊富だったような……。もしかしたらそれも合わせてアイツら調子乗ってたのかもしない」

おうおうおう！良いね〜！効いてるね〜っ!!

おつと。ニヤニヤするなよ、俺。まだ油断は出来ない。気を取り直し、いつも通りの表情で俺は言葉を返す。

「ふーん。なるほど、な。じゃあお前ら……いや橋本だな。やって欲しいことがある。両派閥の対立をもっと煽ってほしいんだ。しかも葛城にバレないように」

「なんで私を除外したわけ？」

「だって神室コミュ力ないだろ」

「は?!」

分かりきったこと聞くなよなあ。全く。

「あのね!別に私だってやろうと思えばコミュニケーションくらい出来るわよ!」

「?」

「2人揃って首を傾げるな!!」

いやあ……。何を言つとるか全く分からん。

「あつははは!……そう睨むなって神室」

怖い怖い。と言いながら降参を示すように両手を上げる橋本。

「話を戻すぜ。服部。対立を煽ること自体は簡単だろうが、それを葛城にバレないようにやるってのはかなり難しいと思うぜ。」

だろうな。想定通りだ。だが、真の目的はそこにはないため問題はない。しっかりと橋本の思考を俺の作るルールに乗せていく。

「そうだろうな。でも問題ない。策はある。まず橋本の場合、坂柳派の方が影響を与え

やすいよな?」

「そりやあそうだな」

まずは前提となる土台を考えさせる。ただし、この土台は説得力さえあれば、現実性がなくてもいい。土台に乗ってない選択肢から目を逸らさせられればいいのだ。

「次に、両派閥の対立を深めるって言っても大きな言い争いになれば自然と葛城にバレる。となるとやることはシンプルだ。大きな言い争いにならないように対立を起こせばいい」

「それが出来たら苦勞しなと思うんだけどな。何かあるのか?」

「ああ。言い争いを拒みたくなるような火種を撒く」

「? どういうこと?」

意味が分からない、といった表情を浮かべる神室。坂柳に無理矢理やらされている任務だからなのかやる気を出さず、自分で考えようとしな。俺にとって都合の良い存在だ。

更に新しい土台を重ねていき、橋本たちの思考を一つに収束させにいく。具体例を交えてみかけの説得力を増させる。

「自分が負けるような話題なら言い争わず逃げると思わないか? 例えば、勉強が出来ない奴は勉強のことで勉強が出来る奴に突っかかたりしない。精々、『勉強出来るか

らって調子乗るなよ』くらいだ」

「確かにそうかもな。でもそれって逆に言えばもう片方は勉強出来るんだろ？ なら勉強出来る側がマウントを取ってきて言い争いになる可能性があるんじゃないか？」

「そこも順を追って説明する。まずさっき言った、言い争わず逃げたくなるような話題ってのは『サバイバル知識』だ」

橋本は相槌を打ちながら、神室は特にリアクションもなく無愛想に俺の話聞く。そういうところぞで神室。

「今回はラッキーなことに葛城派はそういった知識が豊富で今回の試験である程度活躍してるんだろだろ？ なら、坂柳派を上手く刺激して劣等感を募らせてくれ」

「まずは坂柳派側から対立を深めさせる、ということか？」

橋本が探るような目で俺を見る。深く考えたらダメだよ。頭空っぽにしようね。

「さっきも言ったが、橋本は坂柳派の方が影響させに行きやすいんだろ？ なら一手目はそっち側から打つのが道理だ。最終的に葛城派が堕ちればいいんだから、最初も過程もどっちから何が起きてもいいんだ」

「そういうことなら何も言うことはないな」

葛城を墮とす最終形を見せてないためとりあえず頷くしかない。『よく分からないけど最後はどうかなるんだろ。両派閥の対立を深める意味も俺たちには分からない

だけでこいつは俺たちとは違う景色が見えてるんだろうな。それに作戦が進めば俺たちにだってその内容がどんなものか分かる筈だ』そう考えるしかない。

「じゃあ続けるぞ。そうやって坂柳派の劣等感を募り両派閥の距離を離すのが第一段階だ。でもここで2つの懸念がある。1つ目は、葛城派が調子乗ってマウントを取って来て大きなイザコザになること。2つ目は、やりすぎて坂柳派の劣等感が爆発することだ」

2人とも俺の説明に頷く。

「まず1つ目なんだが、これは葛城派を使って葛城派を諷めさせろ。俺たちにとってマズイのは、あくまで両派閥の溝が深まっていくことを葛城にバレることだ。だから初段階で葛城派が調子乗ったのを諷めさせることでは計画に問題は生じない。むしろそこで小さな火を鎮火出来たことで葛城に少しの安堵と油断が生まれるだろうし、プラスになる可能性が高い」

「オツケー了解したぜ。服部」

「ああ。次に2つ目なんだが、これは葛城派への劣等感を募らせるのと同時にDクラスをバカにすることで優越感を持たせて劣等感の爆発を抑えればいい。何かあるごとに『Dクラスとか1ヶ月で1000クラスポイント減らすとかヤバイよな。まじ不良品だぜ』みたいな感じだな」

「なるほどなあ。分かった。覚えとくぜ」

関心したように呟く橋本を見て俺はついニヤけそうになる。抑えろ俺。まだ何も始まってないだろ……！油断するな………！

「じゃあ、これで両派閥の溝を深める作戦に問題はないな？ なら次だ。と言っても、もう終わりだ。やつてもらうこと、伝えること2つだけだ」

「オツケー」

「分かった」

2人は授業終わりのような開放感溢れる表情を見せる。失礼な。

「まず伝えること。次の集合は2日目の夜。つまり明後日だ。場所はここ。時間は10時でいいか？」

「ああ、問題ないぜ」

「もしその時間が無理になったとしても一応12時くらいまでは待つつもりだから絶対来るようにしてくれ。もしそれでも無理だったら次の日、つまり4日目の午前中にBクラスのキャンプに来てくれ」

「それは了解したが……Bクラスのキャンプ地をよく知らないんだよな。勿論、よつぱどの事がない限り今日みたいに抜け出せるとは思うんだけど……」

「うーん……。まあそれは明日の時間を使ってうちのキャンプ地調べといってくれ。軽く

教えておくと洞窟だ」

これから寝るだけだし、案内する事も考えたが、もしそこから迷子になったら困るからな。それに万が一の手段だ。そこまで重要視しなくてもいいだろう。

「お、おお……。ま、まあ万が一の場合だしな。2日目の夜に確実に抜け出せらようようにしとくぜ」

この野郎……。うちのキャンプ地を調べるの面倒くさがあったな。

「じゃあ、最後だ。実は明日、Aクラスにいつて葛城とAクラスの奴らにとある契約を提案しようと思ってるんだ。で、その契約を結ぶことに賛成して欲しい」

「その契約の内容は？」

「そうだな……。その契約を知った時に素のリアクションをして欲しいからな。黙っておかせてくれ」

「分かった。でも、なんで俺らにその契約を賛成して欲しいんだ？ 後、どんなものか分からないが、その契約が葛城を墮とすことに繋がった時に賛成した俺たちまで責められたりしないか？」

「お前らに賛成して欲しいのは、その契約の内容的に葛城が否定的な反応をする可能性があるからだ。その契約は葛城派を墮とす為に必要だから何としても締結したい」

まずは、契約に賛成させる理由を納得させる。これに関しては裏もないので、素直に

本当のことを言った。

「次にお前らが責められる可能性だが、その契約は最終的にクラス全員の同意が必要だ。『お前たちも同意したんだからお前らにも責任はある』とでも言って責任を逃れてくれ。悪いがそこまでは俺も関与出来ない」

了承を得られたので、これ以上共有すべき事や話す事も無く解散となった。やっと寝られる……………

## ハグ

無人島試験2日目。暑さを感じて目を覚ます。時刻は7時前。学校がある日の朝よりも30分以上早い起床だ。

「あつー！ おはよう服部くん！」

「ああ。おはよう」

一之瀬がいつもみたいに見える。テンションで俺に声をかけてくれる。流石一之瀬。よく無人島でいつも通りの明るい感じを保てるよ。

「む〜？」

「ん？どうし」

何故かこつちに近づいてくる一之瀬。何かと思つてみると、おもむろに両手を俺の頬に添えてきた。

近い近い近い……!!

軽く後ろに引いて離れようとしたが失敗する。一之瀬から、そこまで強くはないが抵抗しないと離れられない程度の力で、俺の顔を支えるようにして後ろに下がるのを止めて来たからだ。

「ん〜？ 隈があるよ？ 寝不足？ 大丈夫？」

そんな事かよ……！ 相変わらずパーソナルスペースつてもものがない。

「手……離して……」

声が尻すぼんでいく。すっげえ恥ずかしい。多分顔真っ赤だ。

「あ、ごめんね？」

「……………キスでも……………されるのかと思った」

「キ、キス!? にや、にやにを言ってるのかな！ 服部君！」

「いやだって……………。その、いや本当にキスされると思ったわけじゃないけどさ……………！」

それくらい近かっただろ……………！」

さっきまでの状況を思い出したのか、顔を真っ赤に染める一之瀬。

「ご、ごめんね。その、そんなつもりじゃなくて……………。あ、いや別に服部君とのキスが

嫌って言うてるんじゃないよ……………！」

「えっ!？」

予想外のリアクションに思わず声が上が<sup>うわ</sup>ずる。

「い、今のなし!! 私ちよつと顔洗ってくるね！」

そう言つて猛スピードでウォータージャワーの方に駆け込んで行く一之瀬。ウォータージャワーって顔だけ洗うみたいな器用なこと出来たか？

いやそんなツツコミは野暮だな。いつ出てくるか分からないが、今一之瀬と顔を合わせるど分また恥ずかしさが込み上げてくるだろうから適当に外を散策して時間を潰す事にしよう。

午前中はせつせと労働に勤しみ、シフトをオフにした午後がやってくる（Bクラスはシフト制で役割を回してる）

そう。榎田がリーダーカードを持って来てくれる時間だ

ここで念の為、俺の無人島試験での目的、今日行う作戦、今までばら撒いたカードについて振り返っておこう。

まず、無人島試験での目的。これはシンプルにポイントだ。と言っても『どっちのポイント？』って話だが、今回は両方。どちらも最大利益を求めていこう思う。

ただし、ここで注意すべき事がある。

それは坂柳との共闘だ。

坂柳は葛城派を潰す為、俺はポイントを手に入れる為にこの試験でのみ共闘している。この共闘によって俺はAクラスの橋本と神室を”コマ”として自由に扱えるようになったが、代わりに葛城派を潰すという”縛り”（誓約と制約とも言う。普通の人は契約と呼んでる）を得ている。他人との縛りなので、達成出来なければ勿論、罰を受け

る事になる。

つまり俺は今回の試験で、プライベートポイントとクラスポイントの両方を得ながら葛城派の潰さなければならないという事だな。

では全体を振り返った所で、次は俺が今日行う事を振り返ろう。

まず、Dクラスのスパイである櫛田と協力相手である清隆にDクラスのリーダーである堀北のリーダーカードを貰い、それをカメラで撮影する。

そして、Bクラスのリーダーである俺こと“服部晴秋”のリーダーカードと合わせて、Aクラスにプライベートポイントと2クラス分のリーダー情報（証拠付き）を交換する契約を持ち込む。

今日やる事はこれだけだ。明日やそれ以降にやる事の説明は、また当日になったら行おう。

と言ってもそれじゃつまらないよな。なので、明日以降の話に向けて、俺がこの試験の為に今までばら撒いたカードを説明しようか。

1つ目、葛城派に試験の情報を売った事。

2つ目、俺が橋本に頼んだ事。

まず一つ目のカード。葛城派に試験の情報を売った事。俺は原作知識を利用して、終業式辺りに葛城派に無人島試験の一部を教えていたのだが、それによつて葛城派はこの試験に有利なサバイバル知識を身につけている。そしてこれにより、試験に大きく貢献出来ている葛城派に坂柳派が劣等感を募つていつている。

この時点で既に一枚目のカードの役割は終わっている。その役割とは『坂柳派から葛城派への劣等感』という種を蒔くことだ。

そしてここで蒔いた種に水を与えたのが、2つ目のカード。俺が昨日の夜に橋本に頼んだ事に繋がる。

昨日、俺は『坂柳派と葛城派の溝を深める』ために『坂柳派に葛城派への劣等感を与える』よう頼んだ（ここら辺の論理が分からない人は19話を振り返つてほしい）のだが、実はここで俺は橋本の思考を誘導する様な事をしている。

と言うのも、『坂柳派と葛城派の溝を深める』為の手段が『坂柳派に葛城派への劣等感を与える』しか無いように見せかけているのだ。正確に言えば、その選択肢以外見えないうようにしている。

俺が何故こんな方向に思考を誘導したのか。何故、そもそも“コマ”として使える橋本に対して思考を誘導するようなことをしたのか。

結論から言うと、『坂柳派と葛城派の溝を深める』というのは後付けの大義名分でしか

なく、『坂柳派に葛城派への劣等感を与える』ことには別の目的があり、その上、その本当の目的を橋本に知られると契約を反故される可能性があるからだ。

『橋本が契約を反故する』なんて言ってる意味が分からない。坂柳の指示もなしに独断でそんな事するだろうか？

そう言いたい人間がもしかしたらいるかもしれない。が、別にあり得ない話じゃない。どんな時にそうなるかというと、『契約を反故して受ける罰より俺の指示通り動いて受けるマイナスの方が大きい時』だ。

つまり、俺が坂柳派に葛城派への劣等感を与えてまでやりたい本当の目的は、橋本（達）にとつて契約を反故するよりも圧倒的にマイナスになるようなモノだと思ってもらって構わない。その上で、俺の利益になることだ。

さて、作戦を振り返っている間に櫛田が来たようだ。場所はBクラスが取っている小屋の近く。

「来たか」

「やつほ服部くん」

櫛田は、キョロキョロと周りを確認しつつ俺に近づいて来る。……そして、俺に抱きついて来た。

……は？

榎田桔梗 side

や、やつちやつたー！

私は出会い頭に服部君に抱きついた。思わず、とか衝動的に、では無い。一応理由、というが大義名分はある。”一応”だけ。

ああ…でもやつぱりこれ恥ずかしいかも!?

そう思いながらも堂々と服部くんの胸に顔を埋める。石鹸のような柔軟剤の匂い……それと無人島という洗濯も風呂もまとも出来ない環境だから分かる服部くん本来の匂い。へへへっ。

「ちよ、何してるんだ?!」

「静かに。誰かが来たらどうすんの?」

「いや、それはこつちの科白セリフなだけ……」

それはそう。いきなり抱きつかれたら困惑するのは当たり前だ。……でもさ、困惑100%なのは納得いかないんだけど。ちよつとでいいから照れたり恥ずかしがれよ。

「この状況誰かに見られたらどうするつもりなんだよ」

「1番見られたらマズイのは、私たちがカードの受け渡しをしている所でしょ」

『いやいや待て。そういうことじゃないだろ』って言いたそうな顔してるね。ふふっ。こういう時は分かりやすいんだよね。かわいい。

「この状況だつて見られたらまずいし、それとこれとは関係ないだろ?」

「関係大アリだけど? カードは私のジャージのポケットの中にあるから早く取つて。この状態なら誰かに見られても、その、あ、逢引きしてるようにしか見えないから最悪の事態は回避出来るでしょ?」

「はぐ!」

本当にこの場面見られて、誰かに逢引きしてるって勘違いされたらどうしよう。そんな僅かな可能性を憂慮する。いや、憂慮するフリだ。もし本当にそうになったら困る所かむしろ疑似既成事実で外堀が埋められたことを歓迎するだろう。

「いや、それは」

「ああもう意気地なし! 何? あんたまさかこの程度ノことが恥ズかシイワケ?」

一向に何もしてこない服部くんに苛立つてこんな事言っちゃったんだけど……最悪だ。恥ずかしくて声が裏返った。それに絶対、顔真っ赤だ。チラツと(こういう時でも自分が可愛く見える角度は意識してる)服部君の顔を覗くと、『ああ。こいつも本当は恥ずかしかつたのか。無理してたんだな』みたいな事を考えてる顔してる。しかもその直後になんか覚悟を決めたような顔しやがった。

「ふえ!? ちよ、ちよつと何してんの?!」

急に服部くんが私の腰に手を回して抱きしめてきた。これで私がワザと開けていた空間（服部くんがスムーズに私のジャージのポケットからリーダーカード取る為に開けていた空間。恥ずかしくて密着出来なかったわけじゃないから!）が無くなり完全な密着状態のゼロ距離バグになる。

ちよ、ちよ、ちよつと待つてよ!確かに発破をかけたのは私だけだよ!これはがつつきすぎじゃない!?

でもそうやって戸惑いながらも、この密着バグそのものと服部くんがこんなにながつくくらい私を求めているという事実にとキドキする。

「何って腹辺りでゴソゴソやってたら不自然だろ? だから、こうやって手を一周させてカードを取ろうとしてるだけだよ……。あれ? 何? 恥ずかしいの?」

はあ? ……へー。ふうん。都合の良い大義名分つてわけね。そんなモノまで用意してそんなに私とハグしたかったんだ? (自分の事は棚に上げる)

「別に恥ずかしくないけど? このまま進めれば?」

私の負けず嫌いの性格と単純にもつと今の状況を長引かせたいという欲求が、状況を引けに引けなくさせる。

心臓がドキドキ鳴り響く。これ絶対服部くんにも聞こえてるでしょ。

服越しに感じる服部くんの体温とゴツゴツした男の子らしい肉体。

ちよつとドキドキし過ぎて足下がおぼつかないかも。でもふらつくことはなく、支えられてる事実と安心感。

「きゃっ?!」

「えごめん。どこか当たった?」

「いや、何でもないよ。気にしないで」

「?」

ちよつとさつきより抱きしめられる力が強くなつてビックリしちゃった。でも、そつか。私のジャージのポケットに一周させて触らないといけないわけだから、そりゃあ、抱きしめる力は強くなるよね。つて、考えてる間にもドンドン抱きしめる力が強くなつていく。

やばいやばいやばい。

さつきからゼロ距離ではあつたんだけど、それ以上に密着させられると言うか、さつきまでくつつついてるだけだったんだけど、今はお互いの体を押し付けあつてるような感じ。さつきより全然際どい。

「ひゃっ?!」

「ごめん。言えばよかつたな」

「いや、だ、大丈夫……………」

今度は服部くんの手がポケットに入ってきた。そのせいで、ポケット越しの筈なんだけど、直にお腹を触られてるみたいな感覚になる。どうしよう？太つてるとか思われてないかな?!

「離すぞ」

「えっ……………あ、うん」

服部くんがハグを解いたので、私も合わせて解くしかなくなる。心臓の鼓動はまだうるさく鳴り止まないのに、温もりは急速に遠ざかっていく。

「じゃ、ちょっと写真に撮ってくる」

「うん、いつてらっしやい」

そう言っただけから遠くの木の下に向かっていく。私もついでに笑顔で手を振って妻が送り出すみたいなのをやる。多分効果ないと思うけど。私が満たされるから別にいい。

服部くんが戻ってくる前に次のムーブを考える。手を伸ばしてハグを要求する？でももし拒絶されたら、いや、されなくても恥ずかしい。また私から抱きつくか？

そうこう考えるが、まだ考えが纏まらない内に服部くんが帰ってきた。何故かジャージの袖を引っ張って萌え袖みたいにしてる。まあ、アリなんじゃない？

でも、考えが纏まってない私を他所に服部くんは私に近付いて直接ポケットに手を伸ばした。そして、すぐにポケットからも手を離す。萌え袖は解除された。まさか。

ポケットの中を探ると、プラスチックの板のようなモノに触れる。間違いなくリーダーカードだ。ちよつとだけジト目で服部くんを見る。

「流石にあんな事はもう出来ないぞ。俺の心臓が持たないからな」

「!」

ちよつと顔を背けながらそう答える服部くん。私は服部くんの正面に回り込み、下から覗き込むようにして服部くんの顔を見る。

「へー?ふうん?」

「……なんだよ」

また私から目を逸らした。だから、私もまた服部くんの正面に回り込んだ。

「……だからなんだよ」

「いやあ? 別にいい?」

「恥ずかしかつたら言えば良かったのに。それはそうだよ。学校一の美少女とのハグなんて緊張するよね?ごめんねえー。気づかなくて」

「は?!お前もあんなガチガチだったじゃねえか!」

「えー何のことー？覚えてない」

ふふっ。今日は気持ち良く眠れそう♪

「じゃあねー。私の事が好きすぎてハグでいっぱいいっぱいになっちゃった服部くん」

私はそのままスキップでDクラスのキャンプ地まで帰った。

## 畏

無人島試験 2 日目 午後

櫛田と長時間ハグという心臓が何個あっても足りない出来事イベントを終え、俺は A クラスのキャンプ地に向かっていた。場所は、原作 B クラスがキャンプ地にしていたスポット。つまり井戸周辺だ。この世界では俺達 B クラスが、速攻で洞窟を取った為、仕方なくそちらに移動したのだろう。

A クラスのキャンプ地に近づくとも 1 人の生徒が見えた。名前は分からないが見覚えはある。おそらく A クラスの生徒。クラス争いの性質上、どうしても何となく見覚えがあるだけで話した事はない生徒が多くなってしまふ。

立ち姿や周囲への警戒心からして、食糧探索などで偶々そこに居るわけではなさそうだ。おそらく葛城の策。クラスメイトを警備員のような形で使ってキャンプ地を守っているのだろう。原作でも似たような事をしていた記憶がある。

正面から A クラスのキャンプ地に向かう。葛城の事だ。警備の穴など無いだろうし、俺に高円寺の様にターザン走法で警備を掻い潜れる身体能力もないからな。正面突破一択だ。

「止まれ」

まあ、勿論止められる訳だがこれは予想通り。

「ここから先はAクラスが占有しているキャンプ地だ。食糧探索なら他を当たれ」

「葛城に用があるんだ。悪いが通してもらおう」

「葛城さんは忙しいんだ。帰ってくれ」

葛城さんか。

「お前は葛城派か」

「だから何だ。今関係あることか？」

「いや、確かに関係ないな。じゃあ俺は行くよ」

「ああ、さっさとどっか行……っておい！待てお前！」

俺は腕時計の正確な時間を確認し、Aクラスのキャンプ地の方に走っていく。

別に『俺にも本当に占有しているのか確認出来る権利はある』だとか『入っただけでルール違反にはない』だとか『そもそも占有と独占はイコールじゃない』などいくらでも俺がAクラスキャンプ地に向かう主張を行うことも出来るが、時間が掛かって面倒くさいので却下だ。どんな手段でもキャンプ地に辿り着ければ問題ない。それに明日の予行演習にもなるかもしれないしな。

走力で勝てるかは分からないが、たとえ追いつかれても暴力禁止のこの舞台で俺を追

い返すのは難しいだろう。だが、その心配は杞憂に終わり俺は警備の男に追い付かれる事なく、キャンプ地に到達する。日頃鍛えていた成果かな。

時計を確認すると10秒経過していた。道が整備されていない事を踏まえてると、警備の男がいた場所からここまで大体50 mくらいだろうか。

「葛城はいるか？」

もし、この場を外しているなら多少時間が掛かっても待たせてもらおう。そう頭の中で整理しながら、手前にいた女子生徒に聞く。が、その答えを聞く前に……

「待て待て待てえ——!!」

さっきの警備の男に抱きつかれるように引つ張られる。おいおい。男からのハグはノーサンキューだぜ？

「何だ全く騒がしい」

奥のテントから葛城が出てくる。

「大丈夫です！ 葛城さん！なんでもないっす！ この男は俺が対処します！」

俺を引つ張ろうとしながら、叫ぶ警備の男。もうここまで来たんだから諦めてくれよ。

「いやいい。下がってくれ杉尾。その男はお前で対処出来るような相手じゃない」

「え、いや………分かりました。すみません失礼します」

途端に丁寧に頭を下げて、元いた場所に戻っていく警備の男、改め杉尾。それに対して葛城も感謝の言葉を送る。敬意と感謝が交わる気持ちの良いやり取りだ。俺が敵である事を除けば。

「それで服部。ここが俺達Aクラスが占有しているスポットだと杉尾から聞いている筈だが、それを知ってまで侵入してくるとはどういう見だ？ お前はBクラスの参謀。」

下手な真似をして、AクラスとBクラスで戦争が起こっても文句は言えないぞ」

面倒くさい。いや、強行突破した俺が悪いのか。

「単刀直入に言う。Bクラス、そしてDクラスのリーダー情報をお前達Aクラスに売りに来た」

「!?!?!」

Aクラス内に衝撃が走る。

「どういうつもりだ!?!」

「自分のクラスを裏切ったのか!?!」

「Bクラスのリーダー情報を売る？ Bクラス全体の総意か?」

「罠か？ 罠だな？ 罠かもなあ!」

「Bクラスのリーダーを教える訳がない！絶対嘘付くに決まってるだろ!」

「そこは契約で縛れば何とか……」

「というかDクラスのリーダーをなんで知ってるんだよ!？」

「見栄張ってんじゃねえの?」

「いや、流石にここで見栄張ったりはしないだろ」

「どンドン騒ついていくAクラス。これは、落ち着くまで一旦待つか。そう考えていた矢先……………」

「落ち着けお前達」

「收拾が付かなくなりそうだったクラスの雰囲気を一喝で鎮静化する。流石だな。ここに居るのは葛城派だけじゃないだろうに。」

「ここでどれだけ騒いでも意味がない。むしろ服部の思う壺だ」

「ま、葛城の言う通りだな。ほら、契約書は用意してある。そつちで確認してくれ」

「そうやって、懐から紙を2枚取り出し、その内1枚を葛城に渡す。もう1枚は自分用だ。」

『 1学年無人島試験契約書』

契約日 2015年8月2日

契約署名者 服部晴秋

※以下で使われるクラス名は契約を結んだ時のクラスを指している

1. 服部晴秋は、葛城公平にBクラスとDクラスのキーカードに書かれてあった名前を教える

2. 服部晴秋は契約1の証拠として、キーカードを撮影した写真を見せなければならない

3. 契約2について。写真がブレている、画面が暗すぎる、撮った写真がキーカードの背面を写している、などの『名前がハッキリと確認出来ない写真』であった場合、契約4は履行されない

4. Aクラスは服部晴秋に対し、毎月1日に40万ポイント払わなければならない。これは2015年9月から2018年3月まで効力を発揮する

5. 契約4並びにこの契約全体はAクラスの総意として扱う。その為、契約署名者が退学やクラス移動をしても効力を発揮する

6. 契約2. 3. 5の証明として、この契約は真嶋先生立ち会いの下で行う

7. 真嶋先生はこの契約に対し公平な立場を取らなければならない

8. この契約の内容と存在をAクラス生徒は卒業まで他クラス（服部晴秋本人を除く）に喋ってはならない。喋った事が判明した場合、服部晴秋に罰金として10万ポイント支払わなければならない

「ふむ。クラス内で1度話し合っても構わないか？」

「勿論。ただこつちも暇じゃない。20分。いや、この場に居ない他のクラスメイトを集める時間も考えて30分だけ待ってやる。それだけ経っても決まらなければ、値上げか帰るかさせてもらうからな」

「随分と強気だな」

「そりゃあな。軽くかもしれないが中身は確認しただろ？ かなりそちらに得がある話だ。これを飲まないのはどう考えても損。強気にもなるさ」

「なるほどな。だが、こちらも怪しいと感じれば手はすぐに切らせてもらうぞ」

「勝手に疑ってくれ。別に怪しくなんかないからな」

葛城らが話し合っている間にスポットの位置、そしてテント、井戸、焚き火をしていたであろう木が集められた場所、地面が特に踏みしめられた場所など『本来なら人がまわっている場所』の位置を記憶しようとする……が、スポットが見当たらない。

契約書に注目している葛城らに気付かれない程度に軽くキャンプ内を動いて詳しくスポットを探す。

……アレか？ 2つのトイレとシャワー室。それらに3方向から挟まれるように大きな布で囲まれたナニかがある。流石に今直接確認するのは不味いだろうし、後で橋本に確認しておこう。

恐らくだが、葛城目線で最も気にすべき点は龍園との契約だ。原作通り契約を結んで

いるそうなので、龍園がBクラスとDクラスのリーダー情報を手に入れたら、証拠付きでAクラスに流すようになっていく。

龍園にとってBクラスとDクラスは他クラス。リーダー情報を手に入れられる保証はないのに対し、逆にこちらは既に証拠を見せられる状況。ただ、もし龍園がこれからリーダー情報とその証拠を手に入れてしまったら、俺との契約は無駄金になる。

葛城にとって悩ましい所だろう。だが、俺との契約で得られるのは100 c1だけじゃない。差を詰めてきているBクラスに150 c1とスポットでのボーナスポイントを失わせる事が出来る。葛城目線、俺達はDクラスのリーダー情報を持っている為、追加で50ポイント得られる状況。契約を結ばなければ、Bクラスに更に差を詰められて溜まったもんじゃないだろう。逆に、契約を結べば、Bクラスと大きく差を広げられる。

そしてその功績によって葛城派の勢力は強くなる。口ではああ言っていたが、心は絶対こつち寄りな筈だ。

他の懸念点として予想出来ることは、坂柳のいない試験で成果を得すぎて葛城派が勢力を伸ばすことよく思わない坂柳派の反発あたりか。ただ、それに対してはこつちに橋本（とついでに神室）がいる。契約を結ぶ方向で上手く纏めてくれる筈だ。

程なくして、俺の予想通り葛城は戻ってきた。勿論、契約は結ぶらしい。これでAクラス潰しの第一段階は成功だ。

無人島試験2日目 夜

昨日伝えた通り、着船時の砂浜に橋本がやってきた。

「おいおい服部さんよ。あんな契約結んで本当に大丈夫なのかよ。このまま行けばウチのクラスが勝っちゃうんじゃないか？ 覚えてると思うが、俺たちは龍園とも契約を結んでいて無人島で与えられたポイントは使わず300ポイントそのまま保有してるんだぜ？」

開口一番にそんな事を聞いてくる。もうちよつと信用してくれても………つてそれは難しい話か。

「問題ない。このまま行けば葛城はコケる。それより確認したい事があるんだが、キャンプ地周辺を警備をしているのは全員葛城派か？」

「ん？ いやそんな事はないぜ。普通に坂柳派も警備に割り振られてる奴はいる。割合的に言えば半々つて所かな」

「へえー。警備の交代のタイミングはいつだ？」

「大体3時間交代だ」

「なるほど。スポットの更新は大体どの辺りの時間に行うんだ？」

「点呼の午前8時前後に更新。そこから8時間おきに午後4時、午前0時に更新していい」

「まあ、スタンダードなやり方だな。あつ。そういうばさ、スポットはどこにあるんだ？」

「トイレやシャワー室で3方向から囲まれてたヤツか？」

「そうだ。2つのトイレとシャワー室で物理的に外から見えずらくした上で、更に布で隠してある。更新する時は葛城が決めたメンバー何人かがあの布の中に入って完全に隠れて更新するようになってる」

「流石の防御っぷりだな」

「想像以上の防御力に関心する。裏切りが無ければ、リーダーがバレルリスクがほぼ0に近い。裏切りが無ければ。」

「それでもって仕掛けるタイミングは……キャンプ地周辺に警備が一切居ない午前8時は論外として……午前0時の方か？ いや待てよ。」

「警備はいつからいつまでやってるんだ？」

「朝の6時から夜の9時までだ。勿論、点呼の時だけキャンプ地に戻るけどな」

「危ない危ない。午前0時に仕掛けるのは無しだな。消去法で仕掛けるのは警備がいる午後4時のタイミングだ。」

「午後4時以前で直近の警備交代タイミングは午後3時で間違いないよな?」

「ああ。合ってるぜ」

「よしつ。じゃあ、明日の午後3時半にここ集合。それまでに午後4時辺りに更新する筈のスポットの占有が切れる正確な時間、その時間に葛城派の生徒が警備している場所を一箇所把握して、俺に教えてくれ」

「了解。葛城派の生徒は誰でも良いのか? どんな奴が良いとかあるか?」

へえ。気が効くじゃないか。こういう所は坂柳も気に入つてそうだな。

「そうだな……。出来るだけ足が遅い奴の場所を教えてくれ」

「任せろ」

「それで俺が明日やる事なんだけどき、——つてことをするから、それが終わったら——ようにしてくれるか?」

「なるほど。今日、俺達とあんな契約を結んだのはその為か。明日の策で葛城派を失墜させるってわけだな?」

『葛城派を失墜させる』という坂柳との契約。その結末は既に俺の中で決めている。当初の予定とは大幅に変わったが、それでもAクラスに大きなダメージを与えられるだろう。

だから、俺は橋本の質問に答える事なくこの場を解散した。

無人島試験3日目午後4時頃 Aクラスキャンプ地周辺

今は、橋本から伝えられたスポットの占有が切れるちようど30秒前。場所はこれまた先程橋本に教えられた生徒……に見つからないよう十数m手前の木に隠れている。

30分前に橋本にここを教えられてからコソコソとここまでやって来た。

20秒を切った所で、両手を上げて敵意が無い事を示しながら警備の方向に向かう。

「服部?! 今日は何の用だ?」

「また葛城に用があつてな。通させてもらうぞ?」

「それは絶対に葛城さんじゃないとダメな案件か?」

「ああ。というか、最終的にはまたAクラス全体に伝えることになると思う」

嘘は言っていない。今回は昨日のような平和的やり取りは存在しないけど。

「……………まさかCクラスのリーダーが分かったのか?」

「いや、流石にそれは分からん。とりあえず行かせてもらうぞ?」

「……………分かった。俺も着いていくが、構わないな? それとちよつとだけ待ってくれ」

そう言つて遠くに見える他の警備の人間に合図を送る。すると、その警備の人はキャンプ地に向かってジョギング程度の速度で戻り出した。

まずいな。昨日からの対策か？

ここで葛城達に待ち構えられると面倒だ。あつちはジョギング。走れば先に着くか？ いや、こつちが走り出せば向こうも気付くかもしれないし、何より対策がこれだけとは限らない。

例えば、キャンプ地に向かって叫ばれる。その声を聞いて、警戒状態で葛城達が待ち構える。

こういう事をされると俺の身体能力では作戦が失敗する可能性が高くなる。

なら一旦、堂々とキャンプ地に入ってから葛城をかわすか？ 警戒してない状態ならかわすのも余裕だろう。

ただ、ここで警備がミスした印象を植え付けたい。堂々として葛城をかわせば、それは警備のミスではなく葛城のミスだ。

いや、流石に失敗するのが一番不味い。ここは堂々と迎え入れられて、不意打ちで葛城をかわす。警備がミスした印象を与えるのは橋本に任せよう。

「じゃあ、行くぞぞ？」

「ああ」

警備の男に着いて行き、Aクラスキャンプ地に到着する。と言つても直線を50 m 程進んだだけだが。

もうスポットの占有時間は過ぎてている。流石に慎重派の葛城が、俺が来ることを知った状態でスポットの更新はしてないだろう。

「さて今日は何の用だ？ 服部？」

予想通り葛城に出迎えられる。さてどう動くか。軽くスポットの方を見て、1つの案を思い付く。

「その前にちよつとトイレ借りていいか？」

「……………こんな時にか？」

「すまん！ ちよつと我慢出来そうになくて！ 頼む！」

「……………分かった。早くしろ。男子トイレはこちらから見左の方だ」

「ありがとう」

葛城は優しい男だ。『トイレを貸す』という害が出ない行動なら、試験中でも助けてくれると思った。

そして俺は堂々とトイレの方向、つまりスポットの方向に歩いていく。

スポットの近くには誰もいない。スポットは布で覆い隠されている。人を配置して警戒していたら、逆にそこにスポットがあると知らせてしまうからだろう。それにクラスの人数も限られているからな。不必要に警戒しすぎて他に手が回らなくなったら本末転倒だ。

スポットは目前だ。俺は目の前にある大きな布を引き剥がした！

「服部?! どういうつもりだ!?!」

焦る葛城の声に反応してAクラス中の目が俺に向けられる……が、もう遅い! 露出したスポットに自身のキーカードをかざした。

「ハッーハハハ! Aクラス共! このスポットは俺が占有した! ここを使いたければ俺にポイントを払いやがれ!」

ゲスの笑い声がキャンブ内に響いた。

## 不満爆発

「このスポットは俺が占有した！ここを使いたければ俺にポイントを払いやがれ！」

ゲスの声がキャンブ内に響く。

「な……………!?!」

「どういうつもりだ!?!」

「くっ……………! 昨日の取引はこの為か！ 外道め!」

「そんなに褒めるな。照れるだろ?」

念の為の確認か最後の希望に縋りたいのか。葛城はスポットに向かい、本当にスポットが占有されているか確認する。そこに映し出される『Bクラス占有中』の文字。

「……………」

「おめでどう。これで俺がBクラスのリーダーだって確定したな。ああ〜50 c1減らされちゃう〜」

煽る煽る。クソ煽る!

この煽りは、ただの趣味趣向というだけではない。戦略の意味も一応ある。ペラペラと手口を公開して煽ることで意味のない情報を公開しても、ブラフではなく煽りとして

処理されることを期待している。

「葛城！お前のせいだぞ！ お前があんな契約受け入れるから！」

「何言ってるんだ！お前らだって賛成してただろ！」

坂柳派の暴論に戸塚が反論する。ここは戸塚の言う事も行動も正しい。あの契約はAクラスの総意として扱われるモノだ。少し口調が強いかもしれないが、こういう場ではむしろ弱気で正論を紡ぐよりプラスになる。

「おいおい内輪揉めしてる場合か？ 『試験終了後に1人2万ポイント』か、『卒業まで毎月1人3000ポイント』のどちらを俺に払うなら、スポットの更新をしない事を宣言し、占有期間中にAクラスがこのスポットを使用することを許可する。この場を去って追加のテントや水を買うか、このスポットを俺から買うか。さあ好きな方を選ぶ。Aクラスのリーダー」

「どうするんですか?! 葛城さん！」

「……………少し、考えさせてくれ」

「5分で決めろ」

スポット内にいるAクラスの間人が集まり、俺に聞かれないよう方針を決める。一部の人間は警備などでこの場にはいない人間を呼びに行くのか忙しく走っている。

さあ、どう出る？

Aクラスの人は1つに集まり、それぞれ意見を重ねていく。

「このスポットを手放した時、出る出費はどれくらいだ？」

「まず、井戸がなくなるから水が必要だ。今日は4日目。7日目に水を買わずに耐えると考えても、今日のこれから夜に向けてに1本。5日目、6日目に朝から昼、昼から夜に向けてそれぞれ2本ずつ。合計5本が必要だ。水1本の値段は6ポイントだから、30ポイント必要になる」

「熱中症でリタイアするリスクを考えたら、水は買い渋れないよなあ」

「地味だけど、今日からスポット占有のポイントが入らなくなるからその分も減るよ」

「1日3回、今日の分は終わって、7日目だけは2回しか更新出来ないから……」

「8回、つまり8ポイント。水と合わせると38ポイントだな」

「それ以外買わないとしても、既に『毎月3000ポイント』の方が安く済む計算になっ  
てんのか。あの野郎、上手く考えてんな」

「一括で払う場合は20000ポイントか。これって安いのか？」

「『毎月3000ポイント』と比べるとその6ヶ月分だから、長期的に見たら2万の方が  
安く済むことになる」

「俺たちはAクラスでポイントも十分。0 c1のDクラスじゃないんだし、2000

0ポイントくらいは誰でも払えるよな？」

「なら、20000ポイントが1番得か。得つてよりは損がないって方が正しいけど」

どう足掻いてもダメージを喰らう。誰もがそう思った時、新たな希望の風が吹いた。

「なあ、俺バカだからよく分からねえんだけどよ。そもそもずっとスポットを占有されるのか？」

「「は？」」

「時間的に考えれば、次の次の更新タイミングは午前8時頃だろ？ 点呼のタイミング

じゃね？」

「あー！なるほどっ！」

「有りか？ 有りだな！有りかもなあ！」

1人の生徒の疑問から生まれた一筋の希望。しかし…………

「やーでもよ。次の更新タイミングは大体夜中の12時だろ？ そこで30分とか1時間くらい更新されず張り付かれたら終わりじゃね？」

橋本だ。見えかけた希望の光は一瞬で閉ざされる。

「夜中の12時でもこの無人島で活動出来るの？」

「夜でもライトがあれば行動は出来る。勿論危険だから本来はやるべきでは無いが」

「クラス争いやポイントが絡む以上ある程度の危険も飲み込んで行動くらいして可

能性は高いよな？」

「だな。少なくとも俺があいつなら多少のリスクは顧みず、スポットを取り続ける」

「ワンチャン、その事に気付いてない可能性は………？」

「いや。流石にその賭けは分が悪過ぎるだろ」

「まあ、そりゃそつか」

やはり、契約を結ぶしかないのか。この場がそんな雰囲気で纏まりそうになるが、何とか突破口を見出そうとギリギリまでどうすべきか意見を交えていく。

「やっぱり、どう考えても20000ポイントが得だよな？」

「考えられる限りでは」

「値下げ交渉すれば、応じると思うか？」

「いや無理ゲーだろ。あいつとしてもこちらが飲みやすいラインの要求をしてるし、多分下がる気はないと思うぜ」

「だよなあ」

やはり、結論は変わらない。そろそろタイムアップだ。

「そろそろ多数決を取ろう。『交渉に応じず、井戸とスポットを放棄する』が良いと思う奴、手を挙げてくれ」

誰も手が挙がらない。それを見渡した確認した葛城が次の問いかけに移る。

「服部に毎月3000ポイント支払う」が良いと思う奴、手を挙げてくれ」

チラホラ2、3人の手が上がる。瞬間的にでもポイントが出ていくことを嫌う人がいるようだ。

「もう必要ないかもしれないが……『服部に20000ポイント支払う』が良いと思う奴、手を挙げてくれ」

多くの手が挙がる。一度も手を挙げてない人間が何人かいたが、これは意図的な無効票もしくは手を挙げてても挙げなくても意味が無いと考えた結果である。

ともあれAクラスは服部と契約を結ぶこととなった。

昨日と同様、真嶋先生の下で契約を完了させる。

「じゃあなAクラス。お互い試験頑張ろう」

キレッキレの皮肉を送り、服部はこの場を去っていった。『坂柳派から葛城派への劣等感』。種は撒き、水も与えた。最後に日光を与えてやれば発芽するだろう。

無人島試験4日目 昼

Aクラスキャンプ地近くに1人の男がいた。名は森重卓郎。坂柳派の1人。現在彼はAクラスキャンプ地を警備している。

森重は焦っていた。初めての特別試験。自分達のリーダーがいない不安。内輪揉め。

葛城派の活躍。それなのに自身大した活躍も出来ず、それどころか服部とかいうポツと出のゲス野郎に良い様にされて。

プライドが傷付けられ、不安と劣等感で焦っていた。

そんな彼の警備範囲に迷い込んでしまった男が一人。無人島生活のせいかな髪はボサボサ、服にも一部土がついて汚れている。如何にも弱そうな男だ。

「おい止まれ」

「あ……………」

「ここで何をしている？　ここはAクラスのベースキャンプの近くだ。さっさと去れ」

「で、でも……………」

「あ?!何だよ?」

「ス、スポットの権利は占有であって独占じゃないですよね?!」

そもそもスポットの範囲内ですらないが、少年の言うことは正論である。

「だから何だ?他のクラスだって事実上、独占してるようなもんだろうが。それとも何だ?俺らAクラスと戦争したいのかお前。てかどこのクラスだよ?」

目の前の少年の聞き取りづらい声の小ささ、ハッキリしない喋り方、芯がしつかりしていないナヨナヨした立ち姿に森重は苛立ちが募っていく。

「た、ただの落ちこぼれのクラスです」

「フン。Dクラスか」

Dクラスと分かった瞬間、森重は少年を嘲笑する。

「あ……………」

「あ？なんだよ？」

「い、いや何でもないです……………」

「チツ。これだからDクラスは」

森重がここまでDクラスを見下すのは、彼の性格が理由ではない。いや、正確に言えば性格も一因ではあるだろうが、それが1番の要因ではない。

この試験で劣等感を刺激されたのは森重だけではなかった。坂柳派のほとんどが当てはまる。故に彼らは集まった。傷口を、舐め合った。

その方法は……………」

『Dクラスの奴らまじバカだよなあ。1カ月で1000 c1とかどうやったら減らせるんだよwwwwそれに比べて俺たちは900 c1以上残せた！やっぱ俺たちこそが1番なんだよなあ！』

底辺のDクラスを馬鹿にすること。

傷付いたプライドを回復するために。劣等感を覆い隠すために。ずっとずっと馬鹿

にしてきた。

散々馬鹿にしてきた相手が目の前にいる。多少、態度が横暴になるのも仕方ない話だった。

「とにかくこつちはお前を入れる気はねえ。さっさと帰れ」

困った少年は、ポケットから白い紙を取り出し、ギョツと胸の前で抱きしめる。

「ん？何だそれは」

森重は一度追い返そうとする態度を止め、白い紙について尋ねる。

「え……？あ」

もう遅いだろうに紙を隠そうとする少年。自分から取り出した癖に隠そうとするなんて行動がチグハグだ。

「おい。何隠そうとしてんだよ。その手に持つてる紙だ。見せてみろ！」

だが、隠されたモノを見たくないのは人間の性。Dクラスと聞いてから苛立ちを隠そうとしなくなった森重は、無理矢理ひったくるように紙を奪う。

「この島の地図か。随分と書き込んでやがる………おいおい俺らAクラスの場所も描かれるじゃねえか。分かかってここに乗り込んできたって事だよな？ どういうつもりだ」

「ク、クラスのある人に頼まれて………」

「ふうん。誰だ？」

「いい、言えません！」

「ハッ。落ちこぼれのDクラスの中で更に下っ端か。救いようがねえな」

「う、うう………」

森重の仕事は警備だ。兵士や消防、警察が仕事していない時が平和なように警備だつて何も起こらない方がいい。

だが、心の奥底で無意識に何かが起き、その何かで手柄を立てることを期待していた。自分の焦りを、不安を消してくれる何かが起こることを期待していた。

さつさと少年を帰そうとしていた森重が、一度追い返そうとする態度をやめて地図を奪ったのもその期待感故である。

そしてその地図は当たりだった。期待に沿うものだった。手柄を立てるに十分な情報であった。

更に目の前の相手は散々舐め腐ったDクラスの間人。しかも下っ端。

確信に森重に向かって風が吹いていた。故に、森重の行動は必然だった。

「おい」

「は、はこ」

「もうどっか行け。目障りだ」

「で、でも……」

「でもじゃねえ。お前のバックにいる奴には失敗したとでも報告しておけ。それと」

「？」

「この地図は俺がもらう」

「え」

「当たり前だろ？ お前みたいな落ちこぼれDクラスが無能が俺らエリートAクラスの陣地に入ってタダで帰れると思ってるのか？ それにお前みたいな無能が使うより俺みたいな頭の良い人間に使う方が遥かに有用だ。この地図もそっちの方が嬉しいだろうよ」

「う、うう………」

何も言い返さず、トボトボと帰っていく少年。

戦利品を手にした森重の高笑いがある森の中に響いた。